ＩＳ　いとこが如く

鎧竜機

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　いとこが如く

【Ｎコード】
Ｎ７５８９Ｖ

【作者名】
鎧竜機

【あらすじ】
関西の龍を義親に持ち、そして一夏とはいとこの関係を持つ女オリ主こと郷田真夏がインフィニット・ストラトスで送る義理?と人情?の物語……
真夏「主人公であるウチをよろしゅ～お願いしまっせ～」

プロローグ「行き成り自己紹介や！」（前書き）

勢いで書いてしまった二作品目です。プロローグだけですが見ていただけると嬉しいです。感想待ってます。

プロローグ「行き成り自己紹介や！」

行き成りやけど、初めまして～ウチの名前は郷田真夏(ごうだまなか)五才や！
自分とおとんでアパートで暮らす二人家族で将来の夢はおとんとたこ焼き屋をやる事なんや。ウチの事についてはあと後お話するやと思いますからまってて～。
まずは幼稚園のお話からお送りするで～、ほな本編スタートや！

ここは幼稚園……そこは元気な子供達が通う活気ある場所、そこに……

「いっちゃん！行くで！」

「おう！」

二人の子供がボールで遊んでいた。

「見ててや、これが真島はんの奥義！」

「ま、まってまなちゃん！そ、それは無理だよ！」

「え？駄目なん？」

「う、受け止められないよ……」

「でも打ち込む！それがウチの極道や！」

「怖いよ！？」

五歳児にしては恐ろしい単語を放つ女の子は足を思いっきり振り上げ……

「必殺！神室キッｋ「パシッ」あいた！？」

突然、後ろから叩かれ、声を上げる女の子はその場で蹲る。
後ろには中学校の制服を着た女性が立っていた。

「何、一夏を虐めているのだ？真夏は……」

「千冬姉ちゃん！」

「ち、ちー姉ちゃん……」

ポコッ

「はうっ！？」

「姉と呼ぶのを許した覚えはないが？」

「あうあう……」

「ち、千冬姉ちゃん、それ位いいんじゃ……」

「はあ……一夏、迎えに来たぞ」

そう言って男の子一夏に近ずいて手を取る姉の千冬、

「うう……」

「ほれ、行くぞ」

千冬は真夏の手を取って歩き出す、再起動した真夏は千冬に言う。

「あれ？千冬はんがウチを連れて帰るちゅう事は……おとんはまたたこ焼き屋やろか？」

「ああ、またおやっさんにしごかれているらしいぞ？」

「そうなんか～ウチもはよう腕磨かんと！」

「そうだな」

クスッと千冬は笑い、両手に弟と妹分を連れて家に帰る。

「おとんに認めてもろたら真っ先に千冬はんといっちゃんに食べさせて上げるで！」

「そうか、楽しみにしていよう」

「俺も楽しみにしてるぞ！」

「うん！任せてな！」

そう言いウキウキしながら家路に着く三人の姿は家族その物であった。

千冬はまず一夏を先に家に送った。真夏と一夏はまたねと言って別れその後に真夏の家であるアパートへと送った千冬はその時偶然、

「あ！おとんや！」

「ん？おお、真夏かいな」

「どうも、龍司さん」

そこにいたのは厳つい風貌の男がいた。真夏の父親だ。その姿はたこ焼き屋の格好である。

「何時もすまんのぉ、千冬の嬢ちゃん」

「いえ、弟の一夏も真夏には遊んで貰っていますから」

「さよか…そや店で作ったたこ焼きがあんねんこれを一夏にでも食わせたってや」

「何時もすいません」

「ええんや、ウチの娘も一夏とツレしてくれとるんや、助かるで」

「はい…」

「？、（なんやちー姉ちゃんのおとんの見る目が妙に色っぽい様な……気のせいかな？）」

そんな事を考えていると真夏の父親が近ずいて来て

「よっ」

「ふあ！？」

真夏を肩に抱き上げる。真夏は少し驚いたが嬉しそうにして父親の頭にしがみつく、

「世話になったな。ほなまた」

「はい、また真夏の送り迎えの時は呼んでください」

「助かるで」

そう言って千冬は帰り、あとに残った二人はアパートの自分たちの部屋へと帰る。

「今日は楽しかったか？」

「うん！いっちゃんが何時もウチと遊んでくれてるから楽しいで！」

「さよか、そりゃよかった」

楽しそうに喋りながら真夏は父親の頭に抱きつく、

「こら、前がみえへんやろ」

「えへへ、堪忍やで～♪」

「ふんっ……」

真夏の父親は少し憂鬱しそうにもどこか嬉しそうだった。

「今日ご飯は何や？おとん」

「たこ焼きや」

「今度の具は？」

「からしや」

「なんやそれ！？バツゲームやないか！」

「冗談や。今日はわたみん家の牛煮込みや」

「ホンマか！？」

「そうや」

「楽しみや！はよ帰らな！」

「そやな」

そう言って父親は真夏の頭をわしゃわしゃ撫でて微笑む、

「さてまずは……」

「おとんとお風呂や！」

「言ってる側から先に風呂かいな……」

「駄目なん？」

「ええで、先に風呂にしよか」

父親がそう言うと真夏は嬉しそうにしてまた抱きつく、

「よっしゃ！はよいこか！」

「急に元気なりおった……」

少し驚く真夏の父親は歩く速度を上げる。

紹介が遅れたが、真夏の義親であるこの男は名は郷田龍司、元近江連合直参郷龍会二代目会長。「関西の龍」の異名を持ち、神室町と呼ばれる町で伝説と成った極道の一人である。今は『たこ三味』の定員で、世話になっているおやっさんと龍司と娘の真夏の二人だけだ。

「おとん！はよはよ～！」

「へいへい……」

疲れてそうな顔をしている龍司、だがその顔は幸せそうだった……

プロローグ「行き成り自己紹介や！」（後書き）

真夏「二作品目か～……頑張らな！」
千夏「あたしはどうなるんだ……」
真夏「かめへんかめへんって♪作者は頭悪うけど体力あるで？」
千夏「だといいんだがな……」

一話や！「神室町でカラオケや！」（前書き）

プロローグだから二話じゃない！？一話上げました！感想待ってます～。

一話や！「神室町でカラオケや！」

ここは、知る人と知る神室町……そこで一組の幼い男女が神室町を歩いていた。

「どや？いっちゃん！神室町ってええ町やろ？」

「そうだな。良い町だ」

「せやろせやろ♪」

真夏と一夏だ。二人は家から電車で五分のところにある町、神室町に来ていた。
五才で電車に乗って御出かけとか最近の子供進んでいる様である。

「それじゃさっそく神室町へ繰り出しまひょ？」

「おう」

そう言って真夏は一夏の手を握る。

「え！？ま、まなちゃん？」

「ん？どないしたんや？」

「い、いや、なんでもない（ま、まなちゃんが俺の手を！？）」

「そか、ほな行くで～」

そう言って真夏は一夏の手を引いて神室町を歩く、その二人の姿はとても仲良しであった。

視点・「郷田真夏」

ウチはいっちゃんを連れて神室町を歩いてんねん。
いっちゃんはウチが手ぇ握ると顔を赤くして驚いた表情したんや、なんでやろ？

「いっちゃん何処へまずは何処へいこか？」

「そうだな……どこかお勧めはあるか？」

「そやなぁキャバｋ…やなくてカラオケとかオススメやで？」

あ、危なかったで……ウチが一度キャバクラに間違えて入ってしもうた事を気づかれるとこやった……

「？キャバ…なんだって？」

「な、なんでもないねんいっちゃん！忘れて！」

「？、おう」

「ふぅ……さて、気を取りないしてカラオケに行くで～！」

ウチはいっちゃんを連れてカラオケへ向かう。「ＧＥＴ　ＴＯ　ＴＨＥ　ＴＯＰ！」を熱唱するでぇ！

視点・「織斑一夏」

俺はこのちゃんに連れられてカラオケ店の個室に入る。カラオケ店の店員は目を丸くして俺達を見ていた。そりゃそうだ。俺達見たいな幼いお客、しかも二人だけて来てるんだ。驚くのも無理はない。普通五才でカラオケなんて行かないしな。

「きょ～「いえぃ！」おか～「いえぃ！」ら、Ｔｒｙ　ａｇａｉｎ～♪」

てか上手いな…このちゃん、ノリノリだし、自分も人の事を言えないが…

「別れを告げよう！い～「いえぃ！」つも～「いえぃ！」のトラウ～マへ～♪」

もしかしてこのちゃんって前にもカラオケいってたのかな？

「ラメ色した　輝くＳｈｉｎｉｎｇＧａｔｅ～！」

お、そろそろ終わりかな？

「ラ～ラ、ラ～ララ～ララ～……」

おおう、良い声だ。

「ラ～ラ、ラ～ララ～ララ～……」

終わったか……

「ふう……美声や…」

自分で言うな。

「お疲れ、次は……」

「いっちゃんの番や！」

「ええー…やっぱ歌わなきゃだめか？」

俺は嫌そうにするとこのちゃんは少し顔を曇らせる。

「なんやん、ウチだけ歌わせといて自分は歌はへんの？」

「いや、だって恥ずかしいし……」

「何が恥ずかしいんや？」

「……」

「いっちゃん？」

「……下手だったら…恥ずかしいから…」

俺は少し小さい声で言う。うぅ……これを言うのも恥ずかしいのに……

「……ヘッ」

笑われた！？鼻で笑われた！！

「わ、笑ったな！千冬姉にも笑われた事無いのに！」

「いや、それは何時もの事やん」

そうだけどね！じゃなくて！

「笑うなよ！」

「あははは、堪忍や～、でもいっちゃん」

「……なんだよ？」

「あん、いっちゃんそないな拗ねんといてえなぁ。ウチが悪かったさかいに」

「……ああ、で？」

「うん……いっちゃん、歌う事は恥ずかしい事やないで」

「え？」

「それにいっちゃんが言う様に恥ずかしがったら「羞恥心」歌ってる人達に失礼や」

いや、それは違う気がする……

「……話を戻すで？」

自分から言ったんだろ……

「歌は自分をさらけ出す事や、貯めたもんを出す為でもあり、自分を表現する為でもあり、そして、自分の想いを他者に伝える為にもあるんや。まあ、ラブソングが良い例やな」

「他者に想いを伝える為……」

「そや、普通に言うだけでは伝えにくい事でも、歌で伝えれば自然と伝えたい人に自分の想いを伝えられるんや。それが歌なんや。歌は時として人救う事が出来るんや。銀河を救ったように……」

おいこら、アニメを急に持ってくるな。せっかくの良い話がアニメに染まって来たぞ。良い歌だけど、

「そう言う訳で、いっちゃんは恥ずかしがらずウチにいっちゃんの聞かせてほしいねん……」

「俺の……歌を？」

「そや、ウチぃいっちゃんの歌、聞きたいねん！」

「……」

俺の歌……か……

「……わかった」

「ほんま？」

「ああ」

「後で、アレ無しってのは無しやで！？」

「嘘はつかないよ」

「よっしゃあ！さっそくいっちゃんの為にチョイスするで！」

まなちゃんが急に真剣な顔から溢れんばかりの笑顔を俺にふりまき、カラオケの端末を手にとって曲を入力する。

「まったく…良い笑顔して…」

俺の声が自然と漏れていたのか、まなちゃんは俺の方を向いて、

「ん？いっちゃん何かいうたか？」

「い、いや、なんでもないぞ？」

「？、そか」

まなちゃんはそう言って再び端末とにらめっこをするそんなに真剣に選ぶ事か？

「おっしゃ、これで行くで！」

どうやら決まったらしい。俺は歌う為に立ちあがる。

「いっちゃん、準備は？」

「何時でも」

「行くでぇ！ＭａｃｈｉｎｅＧｕｎ　Ｋｉｓｓ！スタートや！」

曲が流れる。俺は体を自然体にして楽にする。そして、歌は流れる。だが俺はこの時ちゃんとイントロを確認すべきだった。だってあんな恥ずかしい歌だったなんて思いもしなかったんだぞ！

「いや～どエライ楽しかったなーいっちゃん！」

「……そうだな」

「な、なんや、まだ怒ってるん？」

「全然……」

カラオケで歌を歌い終えて俺達はカラオケ店から出る。
俺はは少し顔を赤らめている。それもそのはず俺事織斑一夏五才は、
あの歌は早すぎたと言う事だ。

「い、いっちゃんウチが悪かってん…だから仲ようして欲しい…」

「怒ってないって……」

「おこっとるやん…」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒ってない」

「怒ってる」

「怒って……て、なんど言わせる気だ!?」

俺ははループから脱出し、声を荒げる。その声にビクッと真夏の体が強張る。

「やっぱり…怒ってるやん…嘘つき」

「いや、だから……はあ、悪かったよ…」

「いっちゃん?」

俺はため息をついて諦めた言う様な顔をして真夏を見る。そんな怯えんなよ……

「真夏、俺はもう怒ってない。本当だ」

「ホンマに?」

「本当だ」

「嘘やない?」

「嘘じゃない」

「そ、そか…よかった……」

真夏は胸を撫で下ろす様にしてふぅ～と息を吐く、

「そろそろ帰ろう。真夏、母さんに心配させちまう」

「っ――――――そ、そやったな。はよ帰らんと……」

ん？どうしたんだ？真夏のや…つ…あ、

「わ、わりぃ……」

「いいねん、気にしとらんし」

「でも……」

俺は言ってはいけない事を言ってしまった。

真夏の前では龍司さん意外の家族の話は禁句だったのに、

「ええねん。ホンマに気にしとらんし…大丈夫や」

「……ほんとにゴメン…」

「だからええって……ホンマに気にしとらんから…」

バカだ俺は……なんて真夏の事を考えずに口に出しちまったんだよ……

俺は前に真夏の家にお邪魔した時はかなり泣きそうになった。考えても見ろ？

行き成りデカイ男が出迎えたら誰だって驚くぞ。

最初は強盗かと思ったけどそのデカイ男の肩にちょこんと座った真夏を見て、え？知り合いって思ってやっと警戒が解けたんだ。この事を真夏やその父親である龍司さんの話すと、
真夏は爆笑、龍司さんは少し肩を落としていた。悪い事しちまったか……？
でも一番驚いたのが……

（俺と真夏がまさかいとこ…とはな）

そう、そうなのだ。俺と真夏の母親が姉妹で、俺の母さんが姉で真夏のお母さんが妹だったのだ。この時、俺も真夏も驚いた。何故分かったかと言うと真夏の前の名前が俺と同じ織斑だったからだ、まだある。真夏と俺は生まれた病院と誕生日が同じだったのだ。気づけよ俺の両親……そんなこんなで真夏の過去を真夏自身から聞いて竜司さんが真夏を擁護施設にたこ焼きを寄付した時に出会って意気投合、結果として竜司さんと養子縁組をして晴れて名字を変えて親子になったのだ。意気投合って……漫才じゃないんだからさ…でも…

（なんで……真夏の両親は、真夏を捨てんだろう……）

そうなのだ。何故真夏が養護施設にいたのは、両親に捨てられたからって聞いた。
その時に真夏は一瞬悲しい表情をしたような気がして、俺はしまったと思った。

（はあ……千冬姉ちゃんに何時も言われているけど、俺ってそんなにデリカシーが無いのか？）

う～ん、治そうとは思っているのだが、どう直せば……

「いっちゃん」

「ん？なん「ムニッ」だ？」

俺は真夏に行き成りほっぺたに指を押し付けられた。

「な、なんだ行き成り……」

「名前」

「え？」

「名前、まなちゃんゆってってゆうたろ？」

「へ？、あ……」

そうだった。つい昔の呼び方で呼んでいた。だが……

「なあ、そろそろ……」

「約束破る男は嫌いや」

「うぐっ」

そこまで言うか…しかたない……

「……まなちゃん」

「はい♪よくできました♪」

そう言ってまなちゃんは俺の頭を撫でる。こら、子供が子供を子供扱いするな。

「はあ……帰るぞ？」

「うん！」

そう言ってまなちゃんは俺と手を握って駅に向かう。何と言うか……今日は疲れた。

俺はそう思いながらも楽しそうにしてまなちゃんと手を握りながら家路に着いた……

一話や！「神室町でカラオケや！」（後書き）

真夏「いっちゃん楽しかった？」

一夏「ああ、楽しめたぜ！」

真夏「よかよか♪」

作者「二人目の鈍感ヒロイン……千夏さんと被らない様にしないと……」

二話や！「ストリートファイトや！」（前書き）

真夏「二話でたで～見とってや！」
龍也「なんで俺が……」
沙紀「まあまあ」

二話や！「ストリートファイトや！」

ウチはまた神室町に出向く為、電車に乗って駅に着き神室町を歩いてるところや、

「タッちゃん、きょうは何処行こか？」

「だからタッちゃん言うなって言ってんだろうが……」

今ウチはタッちゃんと一緒に神室町を歩いてるんや、

「ええやん小さい事気にしとったら器の小さい男に見えんで？」

「やかましいぃ……」

タッちゃんはめんどくさそうに頭をボリボリかいているぅ。
ちなむにタッちゃん言うんわ右京龍也っちゅう名前や、出会いはウチが……あ～なんや、チンピラに絡まれている時に颯爽と現れてチンピラをボコってウチを助けてくれてんねん。
あんときはかっこよかったでぇ～……
それからやろか、神室町に行ってはタッちゃんが暇な時に一緒に遊んでんねん。
それにおとんと同じ龍の名前があって気にいっとるんや！

「はあ……何処行きたい？」

「お菓子」

「行き場所聞いてんだよ！なんでお菓子をねだるの選択に代わって

んだぁ！？」

「ええやんお腹すいたし、ジェラテリアにでも食いにいかへん？」

「だから行き場所を聞いてるっつってんだろうがあああぁ！！！」

タッちゃんは叫ぶ、なんやそないな大声出して溜まってるん？
言ってくれればウチが……きゃ？

「なんやタッちゃんたまっとるんか？ウチで発散するぅ？」

「五才のガキに欲情するかあああぁ！！！」

タッちゃんはまた叫ぶ、ホンマタッちゃんからかうとおもろいで～、
少し経ってからしかめっ面のタッちゃんをお手て繋いで神室町を歩くぅ……そしてタッちゃんと手を繋いで歩いていると何故か周りから声がして来てんロリコ…やら警さ……やら聞こえてたけど……なんだったやろ？

「なんや野外からウチらを見ながら声が聞こえんで？」

「あ、あぁ…俺には聞こえなかったが……」

「う～ん、聞き間違いやろか……」

「そんなことよりさっさと行くぞ」

タッちゃんは何故か顔を青くして小走りでウチを引っ張る。
ちょ！タッちゃん！

「た、タッちゃん、そない強く引っ張らんでも…」

「んぁ？ああ、すまん」

そう言ってウチの歩幅に合わせて歩いてくれるタッちゃん、やっぱタッちゃんは顔に似合わず優しいわぁ～

「えへへ」

「なんだよ急に」

「なんでもないで～」

「そうかい……」

少し呆れる様な顔をしてはニヤリと笑ってウチを神室町に連れてく。

今日も神室町を歩くで～！とその時、

「あら？まなちゃんじゃない」

「ん？」

「あ！さっちゃんや！」

ウチは名前を呼ばれて向くとさっちゃんがいたんや、

タッちゃんとも知り合いでただならぬ関係やとウチは睨んでいるんや。

名前は工藤沙紀、ウチはさっちゃんと呼んでんねん。

「さっちゃんもお出かけ？」

「いいえ買い物よ。龍也君の後輩がまた試合で無茶をしちゃってね」

「なんやまたタッちゃんの真似しようとして怪我したん？」

「当たり」

「たく、よえぇのに俺の真似するからだ」

「タッちゃんそう言ったらアカンって、タッちゃんに憧れてドラゴンヒートに入ったんやで？それにタッちゃんの後輩や。自分に憧れて入った子なんやほんとは嬉しいやろ？ん？」

ウチがそう言うとタッちゃんはほんのり顔を赤くさせてそらしてポリポリ頬をかいていた。ウチとさっちゃんはそれを……

「さっちゃん」

「まなちゃん」

ウチらは互いの名前を言って、

「「照れてますね？」」

「照れてねえぇ！！」

「「きゃー♪」」

ウチらはタッちゃんが叫ぶと互いの手を取り逃げた。

それを見て追ってくるタッちゃん、

「待てやコラァ！！」

「いやや～照れたタッちゃん可愛かったで～」

「うんうん、龍也君も良い顔するね～」

「てめぇらあああああぁー！！！」

小走りで走るウチらを追いかけるタッちゃん、ホンマタッちゃんからかうとおもろいで～……
でもウチはその時追ってくるタッちゃんを見ていて前を見んかったんや。そのせいで……

ドンッ！

「きゃっ！？」

「まなちゃん！？」

ウチは誰かとぶつかってしもうたらしくて尻もちをついてしもうたんや。

「あいたた……す、すんまへん」

「まなちゃん大丈夫？」

「だ、大丈夫平気や」

ウチはさっちゃんに手を差しのべられて経とうとするけど、

「おい」

パシッ！

「いっ！？」

「な！？」

「あたっといて詫びを一つせえへんのか？このガキ……」

ウチと当たってしもうた男の人は……ガタイの良い大男やった。いかにも格闘家って感じや、

「聞こえんかったか？ガキ、詫びの一つも一一一一一」

「捕まえたぞ真夏ぅ！」

「ちょ！く、首根っこは持たんといて！服が伸びてまう！」

「ちょっと龍也君！乱暴だよ！」

「うるせぇ！このガキがいけねえんだろ！」

「子供の言った事じゃん！」

「せや！大人げないで、タッちゃん！」

「たっちゃん言うんじゃねえええぇ！！」

急にタッちゃんが叫んでウチの首根っこを掴み持ちあげる。
言葉を遮られた大男はこめかみをピクピクさせてみていた。

「おい……」

「た、タッちゃん…ホンマに伸びてまうってこれおとんに買ってもらった大事な服なんや…だから…」

「っ一一一一一わかったわかったからそんな悲しい顔すんじゃねえって」

タッちゃんはそう言うと静かにウチを下ろして、服を直してくれたんや。
ホンマに優しいで…タッちゃんは……

「おい……！」

「「ん？」」

「あ、まだいたんだ……」

ウチは話をしていて近くにいた大男の存在にやっと気付いた。
てかさっちゃんそれ酷いで……

「なんだ？このおっさん……」

「ウチが走ってた時にぶつかってしもうた人や」

「そうだ！さっきまなちゃんの手をはたいたでしょ！？なにするのよ！」

「うるせぇ！詫びを入れろっていってんだよ！そこのガキが俺に当たって――――――」

「おい……」

男が喋っているとタッちゃんが低い声で男に言う。
その声はさっちゃんに連れて行って貰ったドラゴンヒートで見たタッちゃんの姿やった……

「なんだガキ……ヤル気か？」

「ガキ相手にイキがってんじゃねえよおっさん……」

二人が睨みあう、今にも喧嘩が始まりそうや、て！

「あ、あのウチが悪かったです…だから喧嘩は――――――」

「うるせぇ！ガキはスッこんでろ！」

ゴッ！

「きゃっ！！」

「まなちゃん！？」

「！！っ」

ウチは男の人に殴られ、吹っ飛ぶその時ウチはガードレールに当たってしもうておでこから血が出る。

「ううぅ……」

「まなちゃん！大変！血が出てる！」

「真夏っ！」

「ふん、てめぇのガキだったか」

「てめぇ……！」

タッちゃんはウチが血を出してしゃがんでいる姿を見て男を睨む、

「俺のガキじゃねえが……」

タッちゃんはウチを一瞬見た後に再度男を睨んだんや。

「俺のダチに手ぇ出した事をテメェ自身に詫びさせてやる！！」

そう言ってタッちゃんは構える。男はそれを見て鼻で笑った後、自身も構え臨戦態勢を取る。

「行くぞオラァ！」

「！っ」

男は先に仕掛けたて来た。あの構え……

「ぼ、ボクサーや…」

「龍也君！」

「任せろぉ！」

タッちゃんは力強くさっちゃんの声に答え、自分も仕掛けた。

「オラァ！」

ブンッ！

「おせぇ！」

タッちゃんは右のストレートを避け、左手のフックを炸裂させる。

バキッ！

「ぐふぁ！」

「まだまだ行くぞぉ！」

次にタッちゃんが繰り出したのは右のボディーブローから左のストレート、

ボゴッ！バキィ！

「グッ！ガッ！？」

「弱ぇぞテメェ、そんなんで俺のダチに手ぇだしたのか！？」

バババキッ！

「がはぁ！」

「タッちゃん……凄い…」

「あれが神室町の狂龍…右京龍也の…本当のファイトよ」

タッちゃんの姿をポ～と見ているさっちゃん、なんや恋する乙女やんか……

ウチが見ているのをハッ！と気づいて顔を赤くするさっちゃん、ん～うぶやなぁ…「ふら…」…あれ？

「ま、まなちゃん！？」

「あ、あはは～…すこ～し血ぃ流し過ぎたわぁ……」

あ、アカン…ボーとするで…どないしよう…

「終わりだぁ！！！」

「ひ、ひぃぃぃ！！」

男は殴られまくり、ところどころから血を出しながら怯える。
そしてタッちゃんのヒートが溜まり……

「ヒートアクション発動や！」

「ちょ！急に元気に！？」

ここで言わなきゃ何時言うねん！

「絶技・バンカーナックル！」

「死ねやボケェ！！！」

タッちゃんの腕から放たれた強烈なエルボーが……

グシャッ！！

「がはあああぁ！！！」

男の喉に食らいつき、吹っ飛ばした。

ドサッ！

タッちゃんは相手が起き上がらない事を確認するとすぐにウチの側までよって来てウチを抱き上げた。

「龍也君？」

「病院に行くぞ！怪我は大した事ねえが出血がひでぇ！」

タっちゃんは焦りながらウチを運んで行こうとすると……

「まだ終わってねえぞ！！！」

「「！？」」

血だらけに成りながらも立ち上がり、片手にナイフを持って突っ込んでる男にタッちゃんは動けない。

「クソッ！」

「龍也君！？」

タッちゃんはウチを守る様にして構える。アカン！それじゃあタッちゃんが刺されてまう！

「う、ウチを捨ててはよう！」

「黙ってろ！」

ウチの言葉をかき消す様に叫び男を見るタッちゃん、

もう駄目や！ウチはそう思って目をつぶると……

「ありゃりゃ…子供相手に刃物は不味いっしょ？」

「あぁ！？「バキィッ！」ぐほぁ！？」

男は横から来た強烈なパンチを食らい。今度こそ気絶した。
タッちゃんは横やりを入れた相手を見て……

「あ、あんたは……」

「いや～まさかまなちゃんが血を流しながら王子様に抱かれているのを見てね。それにピンチだったし」

「ハッ余計なお世話だ……」

「そりゃ失敬、伊達さんを呼んどいたから、もう平気だよ」

そう言うとパトカーのサイレン音が聞こえてくる。

「ううぅ…し、駿…ちゃん？」

「大丈夫かい？まなちゃん」

そう言ってウチの近くによる駿ちゃんはウチがの血ぃ出してる所を見て顔を歪めた後、すぐに気持ちを切り替えて、

「スカイファイナンスに行こう。すぐそこだから医療キットもあるし」

「ああ、わかった」

「お願いします」

「お世話かけます……」

「ははっいいって」

そいってタッちゃんはウチを抱えたまま駿ちゃんの後を着いて行く。
タッちゃんが駿ちゃんの言う事を聞いたのはウチの容態を見ての事やもしれへんな。

（ううぅ…おとんになんて言おう…）

ウチはそれが心配やった。ウチのおとんは心配性やからなぁ……
そのせいでタッちゃんにおとんを紹介した時睨みあいが一時間は続いたで……ホンマにあれは堪忍や…
こうしてウチらは騒動を終えスカイファイナンスで治療して貰ったんや。ちなみにウチの怪我は血ぃは多くでとったけど幸い傷も残らず完治するって花ちゃんが言ってたんやそれを聞いたタッちゃんとさっちゃんはホッと胸を撫で下ろしたん。ホンマお世話かけますぅ……駿ちゃんや花ちゃんにも迷惑かけてしもうてウチは罪悪感でいっぱいになってもうた……
治療を終えて駿ちゃん達にお礼を言った後、さっちゃんの買い物に付き合ったりたっちゃんとさっちゃんのラヴな展開を鑑賞したりと痛い出費はあったんやけど今日は満足した一日やった……
ちなみに、この後タッちゃんはマッポの伊達はんに少しこの小僧を借りるぞ?ていってタッちゃんを連れて行ったんや。その時タッちゃんは、俺はロリコンじゃねえええええ!!!!と言って叫んではったけど……

ロリコンってなんや？

視点・「織斑千冬」

私は今学校の帰りの道を外れ、ある店に行く為向かっている。

「……」

私の前を歩く歩行者達は引きつった顔で道を開けていく。
多分、私の目は刃物の様に尖らせている事だろう。一夏にも怖がられて少し傷ついたので治そうと頑張っているのだが……

（どうしても……龍司さん意外に笑顔を見せられない……！」

龍司さん限定と言うのは幸いしたが、何故私は笑えない！？
真夏は怖がらず普通に話してくれるが、未だ一夏は怖がってあまり話してくれない。
クッ！このままでは私と一夏の間に亀裂がっ！

「ううむ…どうすれば…」

「――――ん？なんや千冬の嬢ちゃんやないか、またたこ焼き買いに来てくれたんか？」

「へ！？」

しまった……私は考えていて目的地の店に着いていた事を気づかなかった。

その上あんな素っ頓狂な声を龍司さんの前で上げてしまった……うう、恥ずかしいとこを見られてしまった……

「どうしたんや？」

「な、なんでも！なんでもないです！」

「さ、さよか…そや、ワシが作ったたこ焼きがあんねん。食うてくか？」

「は、はい！喜んで」

なんとタイミングがよかったのだろう。まさか龍司さんが作ったたこ焼きを食べれるとは……！

私は龍司さんの店のまでまで行って龍司さんのたこ焼きを器に乗せ終わるのを待つ、

「出来たで」

「あ、ありがとうございます」

私は龍司さんに手渡しで渡されたたこ焼きを受け取る。

「熱いから冷ましてから食うんや」

「は、はい…」

私は少し冷ましてからたこ焼きを食す……

こ、この味は！私はたこ焼きの味に顔を驚かせる。

「やっぱり気づいたんか…嬢ちゃん」

「このたこ焼きに使われているのは宗名産谷のタコですね？しかもミズタコ……」

「さすがやな千冬嬢ちゃん、そや…北海道の宗名で取れたミズタコや！」

さすが龍司さん！タコの事は誰よりも理解している。

「心地よい歯ごたえが持ち前のミズタコを生地の中にいれた具が閉じ込められる事によってミズタコの甘みが閉じ込められ倍増し、応えられない美味しさになる……　このたこ焼きにかけられているソースがまた美味しさを倍増し、たこの淡白な甘味を一層引きたてます！」

私は龍司さんの作ったたこ焼きの味を解説した。

「そうかい。ほな作ったかいがあったわ」

龍司さんに言われ、ハッとする。な、何をしているんだ私は！これじゃまるで料理番組の女子アナではないか！！

「す、すいません…美味しすぎて我を忘れてました……」

ま、また恥ずかしい所を見られてしまった……
私の顔は今トマトの様に赤くなっているだろう。
は、恥ずかしすぎる……！

「ん？なんや千冬嬢ちゃん顔赤いで？熱でもあるんか？」

そう言って龍司さんは私のおでこに手を乗せて熱を測ろうとする。

「へ？あ、えっと！そのぉ……」

今の状況が上手く飲み込めず、私は口下手になってしまっていた。
い、行き成りは反側です！

「な、なんや、また顔がタコ見たいに赤くなっとるで？」

「あうあう……」

クッ！何故だ！？何故こうも龍司さんに触れられているだけで動揺する！？

「病院行った方がよさそうやな…連れてこか？」

「だ、大丈夫です！ぜ、ぜんぜん平気ですから！」

私は声を張り上げて言ってしまった。

ま、また恥ずかしい所を……

「さ、さよか…でも無理はいかへんで？」

「ほ、本当に大丈夫です…心配かけてすいません…」

ぜ、絶対龍司さんに変な女性と思われてしまった……

ど、どうすれば……

「まあ、本人が大丈夫って言うんなら良いんやけど、無理はせえへんようにな？」

「はい、ご忠告ありがとうございます……」

はあ……なんで私は龍司さんを前にしてこんな醜態を……

「ホンマに大事はないんか？なんや一人でブツクサ言っとるが……」

「え？あ…えっと…」

またやってしまった！？クッ、どうしたと言うのだ織斑千冬！

何時も通りの冷静さはどうした！？

「え、えっとですね……その…」

「ふむ……今日は早く帰った方がよさそうな」

「あ……」

「それにそろそろ一坊が家に帰るとこやろ？はよ帰ってやらんと」

「はい……」

もう少し龍司さんと会話をしたかったが、一夏を一人家に待たせる訳には行かない。帰るか……

「お、お邪魔しました……」

「おう、また買ってってな～」

龍司さんに別れを告げて家路に着く、うぅ……何故私は龍司さんの顔をちゃんと見れないんだ……

織斑千冬１４歳、恋多き年頃であった……若干ジジコンに成りかけてはいるが……

二話や！「ストリートファイトや！」（後書き）

龍司「こんガキャァ！ワシの娘に何怪我させとんじゃあああぁっ！！！」

龍也「ケジメつけたんだからいいだろうがあああああっ！！！」

真夏「二人とも喧嘩はやめてえなぁ！！」

沙紀「龍の名を持つ人って、血の気が多いわねぇ～……」

三話や！「ホールインワン……やと！？」（前書き）

真夏「そう言えばおとん」
龍司「なんや？」
真夏「前に来てたあのスーツの男の人ってだれなんや？」
龍司「ああ、ワシが前にいた組の弟分や」
真夏「おとんの弟分？何しにきたんやろ？」
龍司「それは後でな。本編初めんで」
真夏「そやったわ！始まりや！」

三話や！「ホールインワン……やと！？」

ここは森や草花、そして砂浜や池がある広い平原……
そこに二人の男と二人の幼い男女がいた。

「……」

その幼い男女の少女は真剣に自分の真下にある小さなボールを見つめる。
手には棒状の先にヘラの様に広がった物が付いている。

「……」

「……し、真剣だな。まなちゃん」

「どんな事でも真剣に取り組む、それが真夏ちゃんのええ所や」

「ですね。にしても凄い集中力だ……」

少女である真夏を見て感想を言う少年と棒を肩に担ぐ眼帯の男、そしてスーツ姿の男は少女を見守る。そして……

「……ーーーーーー！！」カッ！

少女はカッ！と目を見開いて棒状物を思いっきり振り上げ、

「貰ったあああああっ！！！！」

行きよいよく振り下げげ真下にあるボールを打つ、

ガッ！

棒はボールに当たり、ボールは呼んで行く……そうこれは……

「ホールインワンや！！！」

「子供の腕力じゃ無理だよ！？」

「いや、見てみい！あれはもしかしたらいけるでぇ！！」

「これは行くか！？」

ボールはじょじょにゴールである旗が刺した穴に飛んで行き……

コンッ！

玉は旗に当たり、そして！

コロコロ……

入らなかった……

「なんでや！？良い感じやったのに！！」

真夏はその場で地面をゴルフクラブで撲殺する。その度にクラブが悲鳴を上げていたが……

「ま、まなちゃん！落ち着いて！」

「せやで、そう簡単に入ったらタイガーウッズが泣くでぇ？」

「むー！」

「まあまあ落ち着いて、まなちゃん」

少年である一夏と秋山と真島と言う。この眼帯の男は東城会若頭補佐、直系真島組組長の、真島吾朗である。そしてスーツの男は前に怪我をして血を流していた真夏を自社に招き怪我の治療をした恩人である。神室町で消費者金融「スカイファイナンス」を営み、キャバクラ「エリーゼ」のオーナーも務める男、それが秋山駿その人である。

「悔しいわぁ、なんで入ってくれへんのや？」

「俺達じゃまだ無理だよ」

「む～……」

「まあそお落ちこまんでもええで？ウチらかて無理やし」

「そうだよまなちゃん、俺らでも普通は無理だよ」

「せやけどなぁ……」

真夏はどこか納得できない様子で飛んでいったボールを見つめる。

「じゃあ次は俺の番だな」

そう言って自分のピンを地面に刺して構える。

「お！次は一坊か、頑張りや」

「頑張れよ。一夏君」

「はい！」

「いっちゃん頑張って～！」

「任せろ！」

そう意気込み、一夏はゴルフボールに集中する。
そしてクラブを握りしめて思いっきり振り上げる。

「せいっ！」

一夏のスイングでボールに当たり、ゴールのある芝生へと飛んでいく。

「行きますね」

「せやなぁ…もしかしてホールインワンやったりして」

「まさかぁ」

「せや、駿ちゃんの言うとおりや。入ったら頑張ったウチが泣くで」
そう三人が言っているとボールは段々ゴールへ近ずき、そして、
コロンッ！コロコロ……
「へ？」
「なん…やと…？」
「こ、これってもしかして……」
「ホールイン……ワン！？」
一夏のボールは見事に穴に入りホールインワンを成し遂げた。
それを見て驚きながらも一夏を祝福する真島と秋山、
「すごいやないか！一坊！ホールインワンやでホールインワン！」
「いや～まさか一夏君がホールインワンをだすとは……やるじゃないか！」
「あ、いや…えっと…えへへ」
一夏は二人に惜しみない拍手をされ照れていた。だが真夏は……
「……」

「ーーーーーー、？、まなちゃん？」

「ん？どしたんや真夏ちゃん？」

「どこか具合でも悪いのかい？」

三人が心配そうにして俯いた真夏を見ると真夏はその声に反応したのか、顔を上げる。

「……」

「ま、まなちゃん！？」

「ど、どしたんや！？目ぇに涙たまっとるでぇ！？」

「だ、大丈夫かい！？まなちゃん！！」

三人は目に涙をためて耐える真夏を慌てる。

「ーーーーーー…ちゃんの…」

「え？」

「いっちゃんの……」

「い、一坊がどないしたんや？」

「いっちゃんのぉ……」

「ま、まなちゃん？一夏君がどうしｔ－－－－－－－－」

秋山が言おうとしたその時、真夏は大声で、

「いっちゃんのアホーーー！！、ウチが初めて取ろぉお思っとったのにーー！！うわあああぁんっ！！」

そう言って真夏は泣きながら走り去っていく。それをポカーンと見てた後に再起動した三人は、

「ま、まなちゃん待って！これは偶然で…てっ俺が狙って出来る訳ないだろ！？」

「そやで真夏ちゃん！一坊が出来たんは偶然や！せやから落ちつきぃ！」

「言う前に追いかけませんか！？もう見えなくなりそうですよ！」

二人はハッとして真夏を追跡する。誤解を解く為に張りながら真夏を説得するが、

「付いてこんといてー！」

「まなちゃん違うんだ！本当に偶然なんだ！」

「真夏ちゃん一旦止まってくれや！ワイもう疲れたでぇ……」

「はあ、はあ、……自分も…もう限界です…というか五歳児で五分間全力で追いかけたのに二人に追いつけないなんて……」

歳とっちゃったな～と落ち込む二人をしり目に一夏は真夏を追い続ける。

「いっちゃんなんて嫌いや～！」

「だから落ち着けえええええっ！！」

二人の闘争劇は十五分にわたって続いたと秋山と真島は後から語る。
子供の体力には適わないと言ってた二人だが、一夏と真夏が異常なのだと後に知る二人であった。

「うわあああああぁぁん！！」

「俺は無実だあああああっ！！」

まったくもって元気な少年少女である。

四人はゴルフ場を後にし、一夏は真夏の誤解を解いて神室町へ戻る。
そこで四人はスマイルバーガーで食事を取っていた。

「むー…ウチがホールインワン出そう思ったのに…あんまりや…」

そう言いながら角煮バーガーを食べる真夏、

「いや、だからワザとじゃ……」

スマイルチーズバーガーを頼んで、まだ拗ねる真夏のご機嫌を取り戻すべく説得する一夏

「真夏ちゃんええ加減機嫌直したってや」

マグロバーガーを頼んだ真島が一夏を援護し、

「そうだよまなちゃん、一夏君のアレは偶然だったんだから」

そう言ってキングスマイルバーガーをほおばる秋山達に入われ、真夏は……

「……せやなぁ。何時までウジウジしてたら皆に迷惑やなぁ…」

皆に言われて機嫌を直す事にした真夏は角煮バーガーをほおばる。

「ふう、よかった」

「せやなぁ、まあ真夏ちゃんも何時かは出来るで？」

「そうそうまなちゃんも何時か出来るって」

「そやなぁ…ウチも何時かは一発で入れたるで！」

その意気や！と真島に言われて元気を出す真夏、四人は明日の出来事や今日の話で盛り上がる。すると真島がある事に気づく、

「そういや真夏ちゃん」

「はい？」

「その額の包帯はなんや？」

「え？いまさら気づいたんか？」

「遅いですよ…真島さん」

「そうですよ。なんで気づかなかったんですか？」

「や、やかましい！わ、わしは真夏ちゃんが気にしとるぅ思ってあえて気づかないふりをしとったんじゃ！」

（（嘘だ！））

一夏と秋山は考えがシンクロした。

「そうやったんか～ごーちゃんおおきに～」

そう言って真島に微笑む真夏、その笑顔は神室町の極道共の癒しである。

「お、おう…か、かまへんって」

少し恥ずかしそうにしてそっぽを向いた。

「なんやごーちゃん照れとるん？」

「て、照れてへん！な、何言うとんじゃ真夏ちゃん！？」

「顔赤いで～」

「お、おっちゃんをからかうもんやない！」

「フフフ、堪忍や～」

（あの真島さんが照れてる……）

（なんでだろう…なんか心に引っかかる様な感じが……）

秋山は真島の姿を内心驚き、一夏は真島と真夏が仲良く話している所を見て何故か心を揺さぶられた。

そんなこんなで会話が進み、真島は真夏に怪我をさせたチンピラがいると分かると、

何処からともなくショットガンを取り出し、いてこましたる！と叫んで三人が必死こいて止めたと言う。

「何処のチンピラじゃあぁ！風穴あけちゃる！」

「お、落ち着いてください！」

「ごーちゃん、もう過ぎた事や！せやからその散弾銃しまっといて

ー！」

「ま、真島さん！それは不味いっすよ！？」

「おんどりゃあああああぁっ！！！」

今にも撃ちだしそうな真島をなんとか止める事に成功し、四人はスマイルバーガーを後にした。

「帰り道に気を付けるんやでー」

「一夏君、真夏ちゃんをちゃんとエスコートしてね？」

「はい、任せてください」

「駿ちゃん、ごーちゃんほなまた遊んでや～！」

一夏と真夏は秋山と真島に別れを告げて家に帰る為に電車に乗り込み、

「いっちゃん今日はおもろかった？」

「うん、初めてゴルフしたけど、楽しめたよ」

「うんうん、いっちゃんが楽しめてよかったわ～」

そう真夏は言う。一夏も真夏や大人たちと遊べて楽しむ事が出来た様である。

「ホンマ……楽し…かった…で」

「まなちゃん？」

「う～ん…」

コテッ

「え！？」

一夏は驚く隣に座っていた真夏は瞳を閉じて一夏の肩に寄り添う。

「ま、真夏？」

一夏は慌てた事で真夏を昔の呼び名で呼んでしまうが当の本人は……

「すぅ……すぅ……」

「ね、寝てる？」

一夏は真夏が疲れて眠った事が分かり、がっくりした様なホットした様な複雑な気分だった。

「ま、いいか…まだ家までは遠いいし」

一夏は真夏をそのまま寄り添うままで寝かせる。

「お休み…真夏」

「う～ん…すぅ…すぅ…」

二人は電車に揺られながら家路に着いた。一方昨日真夏と行動を共にしていた龍也と沙紀は……

「龍也！三人分追加や！」

「お、おう」

「声が小さい！返事もへいや！」

「へ、へい！」

真夏のおとん事、郷田龍司が世話になってる師匠であるおやっさんの店で働かされていた。

「いや～真夏がいるとよく売れるが沙紀がいるともっと売れるのぅ」

「いえ、それほどでも！」

「クソ、なんで俺がこんな目に……」

何故かと言うと龍也がいたのに真夏が怪我をしたと言う何と言うか理不尽なケジメを付けられたのである。店を開いているおやっさんは定員がぎょうさんおるのはええ事やと言って龍也と沙紀に働いて貰っているのである。

「しゃべっとらんと、はよたこ焼きを袋に詰めんかい！」

「言われずとも！」

そう言って龍也は素早くタコを箱に入れて袋に入れる。

「出来ました！」

「千三百円になります」

「ありがとうございましたー！」

龍也はそう言ってお客にたこ焼きを渡すバイト戦士、

「なんや龍司が連れて来た若いもん筋ええやないか」

こりゃ後継ぎが増えるわと言って嬉しそうである。

「コイツはまだまだですわおやっさん、もうちっと使えるようにせんと」

「俺は十分出来てるだろ！？」

「やかましい！おんどれの腕はひよこ以下や！」

「なんだとこらぁ！？」

「やる気かあああぁ！？」

「ち、ちょっと龍也君！龍司さん落ち着いて！」

「かかかか！まるで親子や！」

龍也と龍司は互いに睨みあい。一触即発に成りかけたがおやっさんのどなり声で収束する。

今の光景は祖父に怒られる息子と孫である。沙紀はその光景を見ていいなぁとどこか羨ましそうであった……

「二階堂、覚悟は出来たかな？」

「覚悟はとうの昔に出来とるわ……」

ある二人の男が部屋で話していた。

片方はスーツの男、もう一人は白いスーツで顔は少し外人ぽかった。

「君の兄貴分の説得は無理だった様だね？」

「ああ、仕方あらへん兄貴に目ぇ覚まさせる為に兄貴の大事なモン取ってこなぁ…」

「ふふふ、外道だねぇ…」

「なんとでも言え、ＤＤ…」

ＤＤと名前を言った二階堂は神室町を一望できるビルの窓から神室町を見る。

「ここが……おんどれの墓場や…桐生一馬…」

そう言って二階堂は行動を開始した。そして神室町で起こる惨劇が幕を開け始めた……

三話や！「ホールインワン……やと！？」（後書き）

龍也「クソ！なんで俺が怒られる！？」
沙紀「喧嘩したからでしょ？もう……」
おやっさん「龍也は今はまだまだやがちょっとすりゃ光るかもしれへんのう」
龍司「あのガキがですか？」
龍也「がきじゃねえ！」
龍司「ふん、噛みついてる時点でガキやワシ見たいにクールに返すんや」
龍也「お前がクールって言葉使うとクールが汚れる！」
龍司「なんやとぉ！？」
龍也「やんのかぁ！？」
沙紀「また始まった……」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（前書き）

谷村「なあ俺の出番まだか？」
真夏「まーくんの出番は次や、我慢しい」
谷村「はあ、麻雀しながら待つか……」
真夏「また伊達はんに怒られるで？ウチもやるけど」
谷村「お、真夏ちゃんもやるか？今度は負けないぜ？」
真夏「フフ、お手柔らかに♪」

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」

「スゥ……スゥ……」

ウチは今、家で朝を迎えてんねん、まだ寝てはりますけど……

「スゥ……んぅ…スゥ……」

今日は気持ちのいい朝でウチはまだ起きる気配はないねん。けどウチの家には生きてる時計がおんねん、それは……

「コケッコッコー！」

「んむぅ？」

「コケーコッコッココケー！」

ウチの朝を告げる時計事ピーちゃんが起こしてくれるんや、このピーちゃんやけど前におとんと海へ行った時に出会ったんよ。確かくれた人は……とったどー！て言うた後にウチにピーちゃん持たせてそのまま海へドボンっていったんや。まあそれからやな…ぴーちゃんにはいろいろ役立ってくれて卵は産んでくれるし朝は起こしてくれておおだすかりや。さてピーちゃんも起こしてくれはったしウチも起きるぇ、

「グガァー…グゴォー…」

「相変わらず大きい音やなぁおとんのいびきは……」

前までではこの朝に鳴り始めるおとんのいびきで起き取ったけど、ピーちゃんの方が若干早いんよ。

「さて、おとんの朝食作らな…」

ウチは蹴飛ばされたおとんの掛け布団をおとんにかけ直して台所に向かう。今日は何にしよう？

「う～ん昨日はスクランやったから今日は目玉焼きと大豆のパンを作って……パンにかけるんは納豆でええな…後おとんの大好物のキュウリの塩ずけでオッケーやな…」

ほな、そうときまればさっさと作ったるで～、

視点・「郷田龍司」

「んんう……？」

なんや朝起きたらええ匂いがするで、それに……

「なんや頭がところどころ痛い様な……」

ワシは痛む頭を抑える。その時ワシの目の前に、

「コケーコッコッコ……」

「……ピーかいな」

「コケッコー！」

なるほどな…またお前がワシの頭突いたんかい。

「なーんでワシだけ頭突かれるんや？」

「コー…コケ！」

「いや、言ってる事分からんわ」

「コォー……」

いやそない落ち込まれても……そやった！

「おいピー、真夏はどうしたんや？」

ワシと一緒の布団に寝てはったはずやけど…どこや？

「コケコケコッケー！」

「お、おい何処へ行くんや？」

ピーは走って台所の方へと走って行きよった。なんや真夏は台所におるんか？

「……ほな行ってみるか…」

ワシは体を起して台所へ向かう。そこに小さな料理人がいたんや。
その料理人は手際よく目玉焼きを焼いてその後オーブントースターが焼けたのを確認した後に、
ワシがよう使っとるお椀に納豆とネギにからしに後醤油を垂らして料理を作ってた。

「あ、おとん起きたん？」

「あ、ああピーに突かれて起きたわ」

「またピーちゃん？もうピーちゃんには鳴いて起こしてって言うたはずやのに…まったく悪い子やね」

「コケェ～……」

頭をガクンとさせて謝るニワトリ……なんで人語が分かるんや？

「まあええわ、鳴いて起きんおとんも悪い子なんやしな」

そりゃぁ……まあ、そうなんやけど、

「おとん、料理出来たんやから座ってな。ウチは後ピーちゃんのご飯作らな」

「おう、わかったで」

何時ごろやろか…ワシの為に真夏が料理作ってはるんわ……

「真夏何時もすまんの」

「かまへんて！ウチが好きでつくっとるさかい。おとんには感謝してるんや…ウチが施設で一人ぼっちの時に養子にするう言ってくれた事、嬉しかったんや…」

「真夏……」

泣けてくるで…ホンマ、ワシはええ娘をもろうたでぇ…せやけど…

「あ、おとんウチぃ直ぐにトラちゃんとこに行かなアカンねん。せやから今日はピーちゃんと二人で食べてなー」

そう言って身支度をして玄関のドアを開けて出て言ってしもうた。

…なんでや…なんでなんや……ワシの娘の料理は……

「ワシだけのもんやーーーーー！！」

そういうても真夏にはきこへんかった。ワシは一匹と一緒に寂しい朝食を迎えた。あ、この大豆のパン美味いで……

真夏は家から出て神室町近くのアパートに向かっていた。

「トラちゃんも最近食事が偏ってきたし、ウチがちゃんと管理せんとまた体重増えてまうしなぁ」

真夏はトラちゃんと言う人物の朝食のメニューを考えながら歩くと、

「お、もう目的地に着いたで」

正確には龍司におねだりで勝ち取った自転車に乗って家から十分の所に目的の家がある。

「ええと…鍵鍵っと…あった」

真夏はアパートの二階へ駆け上がり、そのアパートのドアを開ける。

「トラちゃ～ん！今日も来たでーて、うわ！酒くさ！？」

「あ～頭がいったいわぁ…うん？なんや真夏ちゃんかいな」

「真夏ちゃんかいな…じゃないで！なんやまた酒飲んだんか！？」

「そやでぇ…兄弟が飲み行こう言うとったから……気持ち悪…」

「ちょ！ウチの前で吐かんといて！今水用意しますから！」

そう言って真夏は部屋に入りコップを洗って水を注いでその人物に水を差し出す。

「ほらトラちゃんこれ飲んで」

「おおきに……」

そう言った後にゴクゴクと飲み干す男はプハァと言った。

「よかった少し顔がよくなったで」

「生き返ったで…ほんとに世話かけるで真夏ちゃん…」

「ええって、とりあえずウチは料理作ったるから台所借りるで？」

「ええで～美味しいもん作ってくれや」

「フフ…任せてな！」

そう言ってトラちゃんと言う人物の部屋に置いてあるエプロンを着て台所へと向かう真夏、

説明が遅れたが、このトラちゃんと言うのは冴島大河であり東城会直系冴島組で真島と同じ組長である。

『真夏ちゃんの姿を見てると…靖子を思い出すな…』

冴島は亡き妹の姿を真夏に浮かべていた。

『ホンマによう似とるでぇ……アカン、涙でてきそうやわ…』

慌てて目をこする冴島、その時台所から真夏の声が聞こえる。

「トラちゃ～ん！手ぇ届かんから手伝ってえな～！」

「おう、今行くで」

そう言ってフラフラと立ちあがり台所へ向かう冴島、
そして真夏の近くによるとその体を抱き上げて物を取らせる。

「取れたか？」

「取れたでー」

そう聞いて冴島は真夏を下ろして自分も調理に参加する。

「あ、ウチがやるで」

「ええって真夏ちゃんだけにやらせたら悪いし」

「でも……」

「二人で作った方が早く出来るやん」

「ん～そやね！」

「ほな作ろか」

「了解や！」

二人は並んで料理を作るその姿は、２６年前に失った光景を思い起

こさせた……

視点・「郷田真夏」

「頂きます」

「召し上がれ～♪」

そう言ってウチはトラちゃんに味噌汁とご飯を器に入れてトラちゃんに差し出す、

「おおきに」

受け取ったトラちゃんは先にご飯を食べてその後に味噌汁で流し込む、

「もう…トラちゃんご飯は逃げへんからゆっくり食べるんやで？」

「ん？おおすまん」

そう言って食べるペースを落とすトラちゃん、

「お？このシャケ美味いで……」

「自信作や、どんどん食べてなぁ」

「おう」

そう言ってシャケにパクツクトラちゃん、なんやこうしてると……

「まるで料理を作って旦那さんに食べてもろうてる主婦やなウチって」

「んぐぅ！？」

ウチがそう言うと急にトラちゃんが声を出す。なんや？

「と、トラちゃんどうしたん？」

「！…！？」

「と、トラちゃんまさか喉ぉ積まらせたん！？」

あ、アカン！はよ飲み込ませんと！

「と、トラちゃん！はいお茶！」

「！……んぐっ…ふう…死ぬかと思うたで…」

「だからゆっくり食べれって言うたんや…」

「いや、今のは真夏ちゃんが……」

「なんや?言い訳か?仁義貫くトラちゃんが?」

「い、いや…そうじゃなくて」

「もう…トラちゃんはいけない人やなぁ…」

「……すんまへん」

まあええで、とりあえず助かったんやし、

「次からゆっくりで…ええな?」

「わかったで」

うむ、いい子や、ほなウチも……

「ほなまたな～」

「て帰るんか！?」

「せや、ウチぃのご飯は他で食べんねん」

「いや、ここで食えばええと思うんやけど…」

「う〜ん他の人も食事が偏ってるんや見にいかな」

「あ、いやちょっと待ちなはれ！」

そう言ってトラちゃんはウチの腕を掴んだはいいけど昨日の飲みすぎで足元がフラフラのせいで…

「あ！」

「きゃあ！？」

ドンッ！

トラちゃんは倒れ、ウチを押し倒す形で倒れてもうた。

「……トラちゃん？」

「な、なんや？」

トラちゃんは少し顔引きつかせる。

「トラちゃん……」

「お、おう」

「朝ヤルうんは早いで？」

「へ？」

「も～タッちゃんに引き続きトラちゃんまで…アカンて～？」

「ぶっ！？ち、違う！そうじゃ――――――」

「なんや？リクエスト？上から？それとも……下？」

「だからちゃうって！」

「え～じゃあどっからや？」

「せ、せやから「なにやっとんねん……」へ？」

「ん？あ、ごーちゃん」

玄関のドアには真島のごーちゃんがおった。

「兄弟…ウチらの約束…忘れたんか…？」

「い、いや待て兄弟！約束って――――――」

「真夏ちゃんは……」

「……ウチは？」

「東城会の共有癒し財産やーーーーーー！！」

ジャキッと何処からともなくショットガンを取りだすごーちゃん、

いや、ウチが共有って……

まあそれはともかく…多分ウチとトラちゃんは顔を青くしておるや

ろな……

「ま、待て兄弟！落ち着け！俺は何もやっとらん！」

「そ、そやでごーちゃん！ウチはただ冗談を言っただけで……」

「何が冗談や！どうみたらその体勢が冗談に見えるんやぁあぁぁ！！？？」

駄目や…完全にキレとる……。

「兄弟ぃ！」

「だから落ち着けえええええええっ！！！」

「ほ、ほなウチはおいとましますぅ……」

ウチはトラちゃんとごーちゃんの仁義なき戦いを見ることなくその場去った。

え～と後は……だいちゃんやな、だいちゃん六代目になってから胃に穴が開くぅ言うとったから胃に優しい朝食にせんと……

「トラちゃんごーちゃん、ほなまたな～」

ウチは小さい声でそう言ってトラちゃんの家を後にする。

「きょうだあああああいいいいいっ！！！！」

「おおおぉちいいいいいぃつううううぅけえええええぇっ！！！！」

無駄に派手なバトルやな…これって…

四話や！「みなはんの朝食つくらな……」（後書き）

二階堂「ワシはこの小説でも小物かい……」
真夏「いや作者が言うには少し変更らしいで？」
ＤＤ「どんなだい？」
真夏「それは……わからへん」
二階堂「まあ気長に待つわ」

五話や！「伊達マヨラーや！」（前書き）

真夏「ちー姉ちゃんのおとんの見る目がなんやごっつぅ色っぽいんやけど……いっちゃんなんかしらへん？」

一夏「そ、それは……（言えない！行ったら千冬姉ちゃんにシバかれる！！）」

五話や！「伊達マヨラーや！」

ここは真夏と一夏が通う幼稚園、そこでは運動会が行われていた。

「え～と次は……龍司さんと千冬姉ちゃんが出場する綱引きだ！」

「おとん！気張ってな～！」

そう、次は父親や母親が出場する競技、綱引きである。そこに……

「ほな頑張ろか？千冬嬢ちゃん」

「はい！（龍司さんと一緒に綱引き……勝たねば！）」

そう意気込み、普段着の千冬は燃える。普段着である龍司も娘が見ていると言う事もあってかっこ悪いとこは見せられないと思い、本気を出す。

「なんやちー姉ちゃん燃えとるなぁ」

「あ、ああ…あんなに燃えてる千冬姉ちゃん初めてだ」

二人は龍司と千冬が何故ああまで燃えているかが分からない。だがヤル気があるないいいかなぁという事で二人はスルーした。

「もうすぐ親御さん達の綱引きが始まりまーす！競技に出る人は綱のとこまできてくださーい！」

「出番や…行くでぇ！」

「はい！」

親御さん達が行く中、ただならぬオーラを纏う男女に後ずさりしたと言う。

視点・「織斑一夏」

俺が通っている幼稚園で真夏のお父さんと千冬姉ちゃんが親参加の綱引きに出場する為グラウンドの真ん中に行く。というか、

「ここの幼稚園の運動会って本格的だな……」

「せやねぇ。ホンマやしかも場所を移動しての運動会やし」

そうなのである。普通は幼稚園のグラウンドでやる物なのだが、ここは違う。

なぜなら東城会が経営する幼稚園であり、真夏が通う事もあってか設備やら資金面が豊富であるのだ。
俺の両親は少し引きつっていたが……

「お？始めるでぇ！おとん！ちー姉ちゃん！頑張ってー！」

「龍司さん！千冬姉ちゃん！がんばれー！」

そう俺達が応援すると、二人はこちらを向いて手を振る。聞こえた様でよかった。

「それでは皆さん、綱をもって用意してください！」

幼稚園の組長…じゃなくて園長が準備を進める。
その声に従って父親達と千冬姉ちゃんが綱を持つ、そして……

「よーい……」

「そっこうで片ぁを付けたる……！」

「手加減はしない……！」

ここはスルーしよう、うん。

「ドン！」

「「うおおおりゃあああああぁっ！！！！」」

俺達の応援がいけなかったのか、千冬姉ちゃんと龍司さんがあり得ない力で……

「「「「「「ア”ーーーーーーーーーーーッ!!!!!?????」」」」」」

相手側の父親達は鳥になった……人間ってあんなに飛ぶんだなぁ……と現実逃避しているとドサドサッと大きな音を上げて父親達が地面に沈んだ。

「アンターーーーー!!!!」

「あなたーーーーーーー!!!!!」

「おとーーーさーーーーん!!!!」

「パパーーーーーーーーー!!!!」

相手側の母親や子供が駆け寄ってきた。もうこれ戦争だよ……

「あー……真夏ちゃんのお父さんに一夏君のお姉さん?」

「は、はい……」

「お、おう……」

冷静な声で千冬姉ちゃんと龍司さんを呼ぶ組長…じゃなくて園長が二人に歩み寄り……

「やりすぎです!」

「すみません……」

「すんまへん……」

園長に怒られて謝る二人に俺達は……

「おとんは好きやけど、加減は覚えて貰わんと……」

「……そうだな」

はあ、とまた溜息を吐く俺達、ほんと……千冬姉ちゃんは影では優しいんだけどな……

そんなこんなで幼稚園最後の運動会が終わり、皆は帰って行った。

視点・「郷田龍司」

ワシの娘の真夏が幼稚園で運動会が行われると聞ぃたんで弁当を作って来たんはええんやけど……

「なんで東条会の身内がおんねん……」

しかもこの幼稚園を東条会が経営しとるって……東条会は何がしたいんや？

「？、おとん…だいちゃん達となんかあったん？」

事情を知らない真夏が不思議そうにしてワシを見とった。

「なんでもないんや。気にせんでええで」

「そか、ならええんやけど……」

少し顔を伏せる真夏、なんや？ワシ間違った事言うたかいな。

「どしたんや？真夏」

「……おとん」

「あ？」

「おとんの腕奪ったんは……東条会の人やったよな……」

その事かいな……腕の事だけは話してもうたからなぁ。

「ワシはその事はもう気にしてへん。せやから真夏が思い悩む事は無いんやで？」

「でも、ウチぃ……」

「真夏」

ワシは真夏の名前を呼んで抱き上げる。

「おとん？」

「腕ぇ無くなった事で気づいた事や得たもんがあるんや、せやからワシはこれでええと思うてんねん」

「おとん……」

「ワシは極道抜けてカタギに成った事で真夏に会えたんやしおやっさんにも会えた……せやから、ワシはこの生活手に入れたん思うと腕の一本も安いもんやと言えるんや」

「おとん……！」

真夏はさっきまで沈んだ表情をしていたが、ワシが真夏にあえてよかった言うと花が咲くような笑顔になった。

「せやから真夏が気にすることはないんや」

「おとん、わかったで……ウチはもう気にせえへん様にするわ！」

「ええ子や……」

そう言って真夏の頭を撫でる。ホンマにええ娘をもったで…ワシは……

「ほな千冬嬢ちゃん達と帰ろか？」

「うん！あ…でもその前に組のお手伝いせえへんと」

「……ほどほどにせえよ…それと終わったらすぐに帰るんやで？」

「うん、わかったで」

そう言ってワシらは千冬嬢ちゃん達と手ぇ繋いで帰る。なんや急に子供が増えた様で楽しいもんや。

せやけどなんでか一坊が千冬嬢ちゃんと手ぇ繋いで欲しィ言う取ったけど……まあ、別にええでっていったら千冬嬢ちゃんがタコ見とぉに顔赤くさせとったんや……なんでや？

一夏と真夏の幼稚園最後の運動会が昨日終わり、

またまたまたここは神室町に三人の男性と幼い男女がいた。

「谷村！まぁた真夏ちゃんと一夏を麻雀に連れていきやがって！」

「いいじゃないですか伊達さん、大人の楽しみを知る権利は子供だ

ってありますよ？」

「五歳児に麻雀教える刑事が何処にいるんだ！？」

「ま、まあまあ伊達さん落ち着いて……」

「てめぇもだ！城戸！どうしてお前まで子供二人と麻雀やってんだ！？」

「……すんません」

「あははは…い、いけない事だったんだ……」

「ま、まあまあ伊達はん…まー君もたけちゃんも反省してますし…」

「へ～い反省してまーす」

「ほんとすんません……」

「役一名は全然反省してないだろ！？」

「楽しかったんやからええんとちゃう？」

「いやその歳で楽しんじゃいけねえだろ！？」

伊達さんの突っ込みがさえる日だった。

真夏、一夏、谷村、城戸の四人は一夏に麻雀の遊び方を教えるついでに賭けをしたが結果……城戸の大損であった。

「と言うか初心者に負けるって……」

「す、すいません」

「ああ、いいんだ。弱かった俺が悪いし……」

「あ、そうや後でみなはんで牛丼食いにいかへん？」

「そうだな行くか……」

「俺もお供するっす」

「あ、俺も」

「待て！まだ話は一一一一一」

伊達が話そうとするが谷村はスタスタと松屋のある方へと歩いていった。

逃がすものかと伊達もそれの後を追う。

「あ～んまー君待ってぇな！」

「置いてかないでください！」

「ちょ！二人とも待ってくれ！」

置いてかれた三人も早歩きで谷村の後を追った。

少したってから松谷に着き、各自席へと着く一行、

「俺は牛丼並で」

「俺も」

「俺もそれで」

「ウチも！」

「俺もだ。あとマヨネーズ」

「「「マヨネーズ！？」」」

真夏と城戸と一夏の声が上がる。伊達は牛丼の他にマヨネーズを頼んだのだからそりゃ驚く、

「ん？なんだ？」

「え、え～と……」

「ま、マヨネーズを……」

「何に使うん？」

「何って、そりゃ……」

「お待たせしましたー！牛丼並五人前です！」

そう言って定員が各自の席へ牛丼を置いていく。

「お、来た来た！冷めねえ内に早く食おうぜ」

「え……あ、はい」

「そ、それじゃ……」

「いただきます…」

三人は気になったがお腹空いているので検索は後にした。
そしてその直後、あり得ない光景が伊達のところで起きていた。

「マヨネ～ズ～」

「ブフッ！？」

「ゴホッ！？」

「うひゃあ！？きちゃない！！」

一夏と城戸は口の中に入れた牛丼を吹き、伊達の隣にいた真夏が巻き添えを食らった。

「だ、伊達さん！？」

「何故牛丼に！？」

「うえぇ～ん…服にかかってもうたぁ～…」

二人は驚き伊達を見る。一人は今にも泣きそうだったが、

「ん？これが俺のスタイルだ。美味いぞ？食うか？」

「遠慮します」

「お、俺もいいです……」

「二人とも酷いでぇ……」

ゴメンゴメンと真夏に謝る二人、だがここで谷村が動いた！

「すげぇぜ伊達さん、美味しい牛丼が犬の餌に昇格だぁ」

「んだとコラァッ！？」

（（うわ～また喧嘩になる……））

「フキフキ……」顔を吹いている

伊達は立ちあがり谷村を睨む、だが谷村はそんな事お構いなしに牛丼を口に運ぶ、

それに怒ったのか谷村に掴みかかろうとしたが……

「お、落ち着いてください！伊達さん！」

「そうですよ！他のお客さんに迷惑が！？」

「離せ！コイツいっぺん痛い目にあわせねえと！」

「まあまあ伊達の旦那落ち着いて……」

「おめえが喧嘩フッかけてきたんだろうがぁ！！！」

うがー！と伊達が怒り、それを必死に止める一夏と城戸は心底疲れ

た表情で店を出たと言う。

「ん～♪牛丼美味しいでぇ♪」

その光景をとりあえず他人のふりをしながら顔を拭き終わり、食事に専念する真夏、
こうして一騒動は何とか収めた一向は谷村は伊達に怒られながらもイヤホンで競馬の状況を聞きながら警察署に連れて行かれ、城戸は新井のところに戻ると言って真夏と一夏が残された。

「……ほな皆を見送ったし、ウチらも変えろか？」

「そうだな…まなちゃん俺の家で遊んで行かないか？」

「ええで、いこ！」

そう言って真夏は一夏と手を繋いで駅へ行く。
だがその後ろから野球帽の男が真夏達を見ていた事に二人は気づかなかった。
その人物はスゥと身を隠し、姿を消した……そして、ついに神室町に惨劇が始まろうとしていた……

ここは神室町から離れている路地、
千冬は今日曜の休みを利用してここ龍司とおやっさんがいるタコ三味にいた。だが客としてではなく、

「嬢ちゃん！三人前追加や！頼むで！」

「はい！」

何故かタコ三味のアルバイトをしていた。
龍司も何故千冬がたこ焼きに興味をしてめしたのか今一分からなかったが、
自分と同じくたこ焼きを好きなってくれたと言う事で良しとしていた。
毎回言うが、真夏や沙紀や千冬がアルバイトや手伝いとして来た事で店の売上がウナギ登りなのは言うまでも無い。

「龍司さん出来ました！」

「早いやないか、千冬嬢ちゃんええ腕しとるで」

「あ…ありがとうございます！」

千冬は龍司に褒めれた事を嬉しそうに微笑む、それは真夏やある千冬の親友すら見たことない笑顔だった。

「その調子で頼むで」

「はい！」

そう言ってタコを回して焼く千冬、そして今日の売上も上々の内に店じまいとなった。

ある日のウサギ……

「なんで！？なんで束さんの出番が無いのかな！？」

それはＯＦ　ＴＨＥ　ＥＮＤの最後で活躍します。

「長いよ！？」

我慢してください。

「酷いよ～！！」

こうして神室町で起こる悲劇が近づいて行った……

五話や！「伊達マヨラーや！」（後書き）

束「ちーちゃーん…束さんの出番が無いよ～……」

千冬「もう少し待ってろ…」

束「ぶ～…ちーちゃんは束さんよりもあの厳ついおじさんが大事なの？」

千冬「そうだ」

束「即答!?酷いよ～……」

千冬（ハァ…我が親友ながらメンドくさい……）

作者「苦労が絶えないのは、どこのｓｓでも同じですね千冬さん…」

六話や！「始まりは突然にや……」（前書き）

真夏「う～ん……」
一夏「どうしたんだ？まなちゃん」
真夏「うう～ん……」
一夏「まなちゃん？」
真夏「……ウチの名前に龍を入れるの忘れてもうたらしい…作者が」
一夏「入れたかったんだ……」

六話や！「始まりは突然にや……」

ここは夜の神室町……夜になると普段昼は閉めている店が開店する時刻、そこに幼い少女と男がいた。

「さあ夜の神室町に出発や～」

「大丈夫なの？まなちゃん……」

真夏と秋山が夜の神室町に繰り出していた。
普通はこんな夜中に男が少女とお手て繋いで歩いていたら補導されかなねい筈だが、
ここは神室町…犯罪ウェルカムである。

「大丈夫やおとんには友達と一緒に行くゆうとったし、おとんも今日は夜まで営業するっていっとったしな」

「そうなんだ…じゃあ良いかな？」

秋山も神室町の雰囲気と常識に毒され判断意識がマヒしている様である。
伊達に極道達が銃刀法、傷害、チンピラは窃盗に後ドンパチにエトセトラエトセトラ……

「せや！行くでぇ～」

そう言って真夏は秋山と手を繋いで犯罪臭をプンプンさせながら歩く、ここは神室町……常識にとらわれない町である。と少し歩くと目の前にフラフラのオッサンが姿が見える。

「うう～……うぇ…うぷっ……うえええええええええぇっ！！！！」

「おっと！？」

「うひゃあぁっ！？」

真夏と秋山の前で……お察し下さい……秋山は真夏を庇うようにその男の横を通り過ぎる。
オッサンはその場で膝をついて高い酒を地面に出していた。心配になって真夏が駆け寄ろうとしたが秋山に止められ、神室町では珍しくない光景だから平気さと言って真夏をその場から連れて行く。
これが日常茶飯事なら今頃神室町はゲ〇の町に成っている事だろう。

「平和だねえ……」

「び、びっくりしたで……」

「かかって無い？大丈夫？」

「へ、平気や。なんとか……」

そう言って二人は気を取り直して町を歩く光輝くネオンが町を照らし真昼の様な明るさを保つ、店の前では売り子や接客員が客を店へと誘う光景が見られる。
ここは神室町…普通は良い子は寝る時間である。と後ろから大声が聞こえた。

「秋山さん！」

「ん？」

「ほえ？」

秋山は名前を呼ばれ後ろを振り向き、真夏も何事かと思い後ろを向くと……

「サイの突進や」

「違うわよ！」

「な…花ちゃん」

二人は声をかけた人物を確認すると真夏はどうしたんやろ？言い、秋山は心あたりがあるようでバツが悪そうだった。この女性は秋山の会社、スカイファイナンスの社員こと、花である。真夏と花は一年前に知りあったと言う。だが真夏が言うには昔の花と今の花とはかけ離れていると語っている。

「はあ…はあ…何やってるんですかもう！約束、忘れちゃったんですか！？」

「え、え～と……」

「約束ぅ～？」

「集金ですよ！集金！今日こそちゃんとやるって社長言いましたよね！？」

「い、言ったかなぁ……？」

「もう！私、こんな体調なのに町中探しまわって……熱もほら、三十七度ですよ！？」

そう言ってカバンから温度計を取り出し計った熱を見せる。
それを秋山の背中にへばり付いている真夏が食い入るように見る。

「ほとんど平熱じゃない」

「ホンマや……」

「微熱ですよ！いいんですか？私倒れちゃっても社長だけでウチの会社やってけます！？」

「やってけ……」

「ウチがおるで？」

「まなちゃんは黙ってなさい！！」

「ほ～い」

真夏はそそくさと秋山の背中に隠れる。

「……無いよね。うん」

「だったら自分のケータイくらい持ち歩いててください！」

そうスカイファイナンスの社員である花は言って秋山にケータイを渡す、

花は少しカンカンであった。苦労が絶えない花である。

「以後、気をつけます…」

「夜遊びはお預けかいな……」

「ゴメンね？まなちゃん」

「もう社長はどうしてこうまなちゃんに甘いんだか……」

ブツブツと口うるさく言う花に秋山はヤレヤレと言って集金へと向かった。

真夏も夜遊びから集金の手伝いに変更して秋山達に付いて行く。

その姿、ギリギリ親子である。

「まあええか……それじゃ張り切って集金へゴ～！」

「ゴ～」

「はあ二人してふざけて…もう」

花は疲れた様にして二人の後に続いた。その時、

「ん？」

「どうしたの？まなちゃん」

真夏は目の前を横切る野球帽を被る黒ずくめの男を見ていたが秋山と花は気づかなかった。

「ん～…気のせいや、何でもないで」

「そっか…じゃあ行こうか」

「うん」

「社長、早く行きますよ？」

「ああ、直ぐ行く」

そう言って真夏の手を取って歩き始める。その後神室町最初の事件が始まった……

場所を代わり、ビルのエレベーター前で野球帽を被った男がエレベーターを待っていると、

後ろから声を掛けられる。

「失礼ですが…どちらさんで？」

「……」

男は答えない。そしてこのチンピラ風の男に悲劇が起こる。

ここは神室町の一角の事務所、そこに靴を磨く極道がいた。

「おお～、親父の靴まだまだあるからな」

「「「ウッス！」」」

そこの組長のものである靴を磨いていた。

組長は雑誌を読みながらエレベーターを監視しているモニターを見ていると、

組の一人が野球帽を被った男の肩を掴んで振り向かせると……

「！？」

突如モニター内で野球帽の男が組の男に掴みかかった。

そして組長が慌てて組の者に言う。

「おい！カチコミだ！」

そう組長が言い、組の者たちは慌てただしく立ちあがり、

「おい、明りを消せ！守りを固めろ！」

そう言って守りを固め、部屋の明かりを消した。

「「「「……」」」」

チーンッ♪

エレベータのドアが開き、その乗っている男の姿を確認すると、見えるのは組の一人の男だった。
しかし……

ドサッ！

組の男は血を流しながら倒れ伏し、その後ろからカチコミをしに来たと思われる男が立っていた。
そして数秒後、我に返った極道達が一斉に……

「「「「「うおおおおおおっ！！！」」」」」

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

持っていた拳銃で男に発砲した。男は撃たれながらも直立不動して立ちつつげ、そして頭部へと銃弾が命中する。男はこれには溜まらず体勢を崩しかけたが、まだ立ったままで顔をだらんとさせていた。
そして野球帽の男はゆっくりと顔を上げ、目を開く。

「……」

その目は不気味に赤く光っていた。その後組の者たちの惨劇が始ま

った。

視点・「郷田真夏」

「んで?誰から集金するんや?」

「え~と、確か……ん?」

秋山が立ち止まる。それを見て真夏と花も止まる。

「どしたん?」

「いや、なんか人だかりが……」

「おい、アレ…鉄砲の音じゃねえか?」

「ヤダ…警察に届けた方がいいんじゃない?」

秋山達は野次馬の声を聞きその銃声の音がする方へ目を向けると……

「ーーーーーーこの銃声……密造銃の銃声音が複数…それに正規品の銃の音も混じってはるな……」

「なんでそんな事を分かるの？まなちゃん……」

「前にごーちゃんに撃たせてもろうたんや」

「あの人は五歳児に何を教えているんだ……」

呆れる秋山に真夏は不思議そうにして見つめている。もう真夏は普通の五歳児では無くなっていた……突如四階の窓ガラスが割れ、そこからスーツ姿の男が堕ちて来て……

ドサッ！

野次馬はポカーンとしていたが、直ぐに悲鳴を上げてその場から少し離れた。

「あ、あはは…こりゃ、集金どころじゃないよね……」

「駿ちゃんって事件体質なんかな？」

「……それはまなちゃんもじゃない？」

そんな事無いで？と言いながら見ていると堕ちて来た男が立ち上が

ろうとしていた。
そして騒ぎを聞きつけた警官が堕ちて来た男へと駆け寄る。

「退いてください！」

「道を開けてください！」

そう言ってやっと男の元へと駆け寄る。

「これで解決やな」

「そうだといいんだけどね……」

「二人とも！見学はそのへんにして早く集金に「ぎゃあああああっ！？」へ！？」

花が二人に喋っていると警官の悲鳴が聞こえて三人は悲鳴がする方へと視線を送る。

「しゅ、駿ちゃん！」

「おいおいマジかよ……」

「な、何で警官が噛まれてるの！？」

そう、堕ちて来た男が警官の喉元に噛みついていた。もう一人の警官はアタフタとしていて何も出来なかった。野次馬はその光景を見て悲鳴を上げながら逃げ、足元に男と一緒に堕ちて来た拳銃を蹴る。
そして蹴られた拳銃は秋山の足元へとやって来た。

「ん？」

「お、マケドニアシューターやん。ええ趣味しとるでえ」

「それどころじゃないでしょ！？」

真夏の言葉に突っ込みを入れる花、そして男は警官を解放してもう一人の警官へと向かう。

「へ！？お、おいく、くるなぁ！」

警官がそう言っても男は止まらず、警官の肩を掴み引き寄せる。引きはがそうと警官も暴れるが男の力は異常に強く引きはがせない。

「た、助けてくれぇ！！」

「しゅ、駿ちゃん！お巡りさんが！！」

「！」

秋山は真夏の声で銃を拾い上げて男の方へと構える。

「おい、動くな！」

「秋山さん！」

「駿ちゃん！」

男はその声に反応したのか、男が警官の拘束を解き秋山の方へと向く、

「駿ちゃんって銃使えるん？」

「し、知らないわよ！」

「動くな。動けば撃つ……」

だが秋山が威嚇をしてもその男はこちら見続け向かってくる。
秋山も相手の行動の異常差に気付き始めた。

「おい、本当に撃つぞ？……」

「なんや全然引く気配がないんやけど…」

「撃たれたら…痛いんだぞ？」

「そりゃそうやろ」

そう言って話していると男の見る目が秋山から代わり……

「ーーーーーーへ？あ、あれ？な、なんやなんでウチを見とるん？」

真夏の方へとフラフラと歩いて近づいてくる。
これには真夏も怖いのか秋山の後ろへと隠れる。

「しゅ、駿ちゃん！…あの人…怖いで…」

「まなちゃん！俺の後ろに、花ちゃん逃げるんだ！」

とその時、後ろにいた警官が男に向けて銃を発砲した。

パンッ！パンッ！

だが、男は少しよろけただけで効いて無いようだった。撃った警官はそれを見た後上から降って来た別の男達によって……

「ぎ、ぎぁあああああああ！！！！」

男達は警官に掴みかかって襲う、その光景を来てヒッと悲鳴を上げる真夏を抱き上げた秋山は走り出す。

「どうなってんだ？」

「わ、わからへん……」

そう言いながらもこちらを標的したかの様に秋山と真夏を追いかける男達、
秋山は逃げる為、地下街へと逃げた。

「ーーーーーー！、あらら……」

「ど、どうしたん？」

肩に担がれている真夏は秋山が走るのをやめた事に気づき声をかける。

「……シャッターが下りてる…」

「え～と…それって」

「袋のねずみだね……」

そう言って秋山がシャッター蹴る。

「しゅ、駿ちゃん！う、後ろ！」

「！」

「「「あ”あ”あ”……」」」

後ろからうめき声の様な声を上げる男達、その姿を確認いしていると、

「な、なんで噛まれた警官まで追いかけて来たんや！？」

「おいおい…増えちゃってるよ…」

秋山は真夏を肩からおろして迫りくる男と警官達に言う。

真夏はすぐに秋山の後ろへ隠れる。

「あのー…穏便に話し合う気はないんだよね？…きっと」

「き、来とるで…」

「絶対…無理なんだよね？」

「も、もうそこまで……」

「そしたら悪いけど――――――」

「しゅ…駿ちゃん！」

「俺はこんなとこで死にたくないし……」

秋山は銃を構え、真夏の方を見る。

「まなちゃんに指一本触れさせる訳にもいかないんでね！」

その日、神室町で一人の金貸し屋の男が大事な友を守る為、銃をぶっ放した。

六話や！「始まりは突然にや……」（後書き）

一夏「始まったな…とうとう」
真夏「そやね…ウチどないやるんやろ？」
一夏「そうだな…所で、名前に龍を入れるって話は？」
真夏「作者が名前を変えるエピソードを考え中や」
一夏「変えちゃうんだ……」
真夏「ん？どしたん？」
一夏「な、なんでもない（同じ夏が入ってるのがよかったんだけどな～……）」

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」（前書き）

上手に出来ま……できたかなぁ？

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」

パンッ！パンッ！パンッ！

「キャー♪駿ちゃん集金取り立てる姿もカッコええけど撃ってる姿もカッコええで～！」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！？」

秋山は撃ちながら移動し、真夏は……

「ほれほれ～鬼さんこちらっ手の鳴る方へ～♪」

「さっきまで怯えは何処に！？」

真夏がオトリになり秋山がその隙を突いて真夏に襲う”奴ら”を撃つ、

だが秋山がいくら撃っても多少は怯むが全然奴らの勢いは収まらない。

「うひょ！？あっぶなぁ…もう少しで鬼になるところやったで……」

「ほんとに鬼にされちゃいそうだけどね！」

「あ”あ”ー……」

「あー！もう！なんで倒れない！」

秋山はいらつく、早く無力化しなければ真夏も危ないからである。

「どうすれば……！」

「駿ちゃん駿ちゃん」

「！、な、なに？」

真夏は奴らに追いかけまわされながらも秋山と話す、

「この手の相手はお決まりの急所があるで？」

「急所？」

「せや、急所や」

そう言って真夏は奴らを指差して秋山に撃つ場所を教える。

「狙って！」

「わかったよ！」

秋山は真夏の指さす方へと銃を構え……

「ザケル！」

パァンッ！

真夏は意味の分からない言葉を言う。その声に反応して秋山が撃っ

た急所は……

「あ”ーーーーーーー」

ドサッ！

ゾンビは頭を撃ち抜かれ、倒れるその後起き上がることは二度となかった。

「た、倒れた……」

「ナイスキルや」

「あ”あ”……」

一体は倒したがまだ四体いた。真夏はその後もオトリを続けて秋山を援護する。

「駿ちゃん！」

「任せて！」

パンッ！　パンッ！

秋山は正確に急所を狙い撃ち、確実に倒して行く。

「ビューティフォー……や」

「後二人……！」

そして秋山が最後の二体に向けて発砲する。

パンッ！　カチッ！

「！？」

「ん？なんや弾切れか…？」

「クソッ！こんな時に！」

秋山は予備のマガジンなど持っていなかった。その場で銃しか拾っていないので当たり前なのだが、

「し、駿ちゃん！？」

「！？」

秋山がどうしようか悩んでいると真夏の声が聞こえ見ると、

「まなちゃん！！」

「あ”あ”……！」

「い、いやぁ……来ないでぇ！」

真夏は壁際へと奴らに追い込まれ、ジリジリと後ずさる。

「まなちゃん！クソっ！！」

秋山はいても立ってもいられず真夏に駆け寄るが相手の警官を掴んで離さなかった腕力を思い出し、思いとどまる。

（駄目だ！もし俺が噛まれてあいつらと同じになったらまなちゃんを襲ってしまうかもしれない！）

秋山は必死に考える。

（もし噛まれた時の自決用の弾が……）

弾切れを起こした銃を恨めしそうに見つめる秋山、すると真夏が秋山へ向けて叫ぶ、

「駿ちゃん！」

「！、まなちゃん！？」

「これを！」

真夏はポケットから銀色の輝く何かを手を上げて見せる。

「それは！？」

「さっき駿ちゃんが倒した男のポケットから落ちて来たんや！」

それは秋山が使う銃のマガジンだった。

真夏はそれを思いっきり振りかぶり下へ滑らす様に投げた。

「受け取ってや！」

「ああ！」

秋山は真夏がマガジンを投げると同時に走って飛び込む、秋山がでんぐり返ししている途中で真夏が地面に投げる様に滑らせたマガジンを取り、銃のマガジンキャッチボタンを押して空弾装を捨て、それと同時にマガジンを銃へと挿入する。

カシャッ！　ジャキンッ！

スライドレバーを押してスライドを前後に戻し、秋山は素早く構え、こう言い放った。

「少女趣味は二次元だけに留めろっ！」

パァンッ！

「あ”っ……」

秋山の撃った弾は奴らの頭部へと吸い込まれる様に当たり、

ドサッ！

倒れ伏した。秋山は撃った体勢のまま呼吸を乱していた。
そして真夏は秋山に駆け寄り無事を確認する。

「駿ちゃん平気か？」

「あ、ああ……なんとか」

秋山は体を起して腰を叩く、

「ふうぅ……年甲斐もなくダイナミックショットをやるもんじゃないねぇ…」

「フフ、何言うとるんや？駿ちゃんは十分若いで？」

「そうかな？」

「そうやって♪」

二人は笑いあう。その時花が階段から下りてくる。
花は二人を見つけ無事を確認して駆け寄る。

「秋山さん！まなちゃん！」

「花ちゃん！」

「やあ、花ちゃんも無事だった様だね」

真夏も秋山も花の無事を確認してホッと一息した。

「でも…これって…」

「……うん、そうだね…」

「いったい…これは…」

三人が倒れ伏した奴らを見て吹いていると、真夏が……

「映画の撮影にしては中々気合が入ってるで」

「へ?」

「え、えっと?」

真夏は秋山達から離れて撃たれて倒れている奴らをツンツンしていた。

「ホンマに上手く演技してるでぇ、このゾンビ役の人たち……」

「えっとまなちゃん?」

「ん?なんや?」

「今の…撮影だと?」

「?、違うんか?」

「あ～…えっと……そうだね。うん！映画の撮影だった見たいだね」

「やっぱりそうなんか～そらそうやよなぁホンマにゾンビなんておるはずないよなぁ…」

「えっと…秋山さん？」

『シッ…下手に本当の事を言ったらまなちゃんがパニックになるかもしれない…』

『と、言うと？』

『このまま黙ってよう。後、一度スカイファイナンスに戻って状況の整理をしたいし』

花と秋山は未だ役者だと思っている真夏は倒れている人をツンツンしていた。
また起き上がって真夏を襲いかねない奴らの側にいる真夏を見て気が気でない二人は即座に行動した。

「さ、さあ！まなちゃん！今日はもう帰ろう？撮影も終わった事だし」

「ん？もう帰るんか？監督とかからギャラ貰ってへんのに？」

「あ、あとから振り込み式だから大丈夫さ！さ、帰ろう？」

「そ、そうよまなちゃん！もう遅いから私達の会社に帰りましょ？」

秋山達は必死で真夏を説得した。真夏は二人の必死様に可笑しそうに見てそれから秋山達の言う事を聞いて立ちあがる。

「そやね。もう遅いし…今日はお開きやな」

「じゃあ行こう。もう冷えてきたし」

「そ、そうですね社長！」

「？……なんや分からんけど二人とも必死やなぁ…まるで何かを隠している様に見えるんやけど……」

「ドキッ」

「あわわわ…」

二人は真夏に言われアタフタしていたが、とりあえず今はこの場から離れる事にした。

「さ、さあ行こう！」

「え？あ、ちょーーーーーーー」

「行きましょう！」

「い、行き成りどないしたんや？」

真夏は訳が分からず頭を悩ませていた。そして真夏は何かを思い出したようにして倒れている奴らに、

「あ！そやったわ…えっと、お疲れ様でしたー！」

そう言って倒れている奴らに手を振りながら秋山に手を繋いで連れて行かれる真夏、

花と秋山はそそくさとその場を後にした。

秋山達がスリルを味わっている頃。ここは龍司が働いているタコ三味、そこに織斑兄弟の姿があった。

「一坊！一人前追加や！頼むでぇ！」

「はい！」

「一夏、気合を入れろ」

「千冬姉ちゃん…なんで俺働いてるんだ？」

一夏は姉に連れて来て貰って龍司の店で働いていた。

「将来の為に成る。覚えとけ…（そうすれば龍司さんの店に気兼ねなく行ける！）」

案外黒い姉だった。一夏の将来の為に成ると聞きとりあえずは龍司から仕事を覚える。

「龍司さん！出来ました！」

「おう！」

龍司は一夏からたこ焼きを受け取り、その盛り合わせに不具合が無いか見る。

「ええ感じや…やるやないか！一坊！」

「ありがとうございます！」

一夏は龍司に頭をクシャクシャに撫でられ、少し恥ずかしそうにして笑顔になる。

「この調子で頼むで」

「はい！」

「一夏、頑張れよ」

「おう！任せとけ千冬姉ちゃん！」

そう言ってまた注文が来てたこ焼きをパックに詰める一夏、千冬はそれを微笑んで見ていた。

（中々に上手い手付きだ……今度の夕食のたこ焼きも期待できそうだな……）

千冬は少し楽しみにして二人の仕事を見ていた。
そして龍司達はあとから気づく、真夏達がある男の復讐劇に巻き込まれている事を……

オマケ・「東城会六代目、仏の顔も三度まで……の巻や！」

「おやっさん！宣伝に行ってくるで～！」

「おう、きぃつけてな」

日曜日、ウチは今町中でたこ焼き屋をやっているおやっさんとおとんと一緒に営業をしとるんや
おやっさんのたこ焼きはむッチャおいしいねん！せやから接客とかのお仕事とかが多いんよ。
でもおやっさんの店にくるお客さんは何故かまいどウチが接客や宣伝する時が多いんや、何故やろ？

「たこ三味のたこ焼きはむッチャ美味しいですよ〜！よってってや〜！」

ウチは少し店から離れた路上で店の宣伝を始める。

「たこ三味の店によってってな〜！美味しいで〜！」

ウチがそう宣伝するとウチの周りにはたくさんのお客さんが集まってくる。ウチはそのお客さんを店まで案内するんがお仕事や、

「おやっさ〜ん！六人様追加や！」

「おう、ご苦労さん」

そう言っておやっさんはウチの頭を撫でてくれる。
おとんもそれを見て笑ってたんや、

「えへへ〜♪」

「ほな、また宣伝頼むで…郷田！六人分追加や！」

「へい！」

おとんはおやっさんに言われて、慣れた手つきでたこ焼きを六人分の紙パックに入れていく、
その素早さはおやっさんには遠く及ばないもののなかなかの腕やった。

「おとんも上手に焼けました〜やな！」

「まだまだや、おやっさんの腕には遠くおよばへん」

「そないなことないって～」

「まあ、まだ暖簾を譲るにはまだまだやな」

「おやっさんまで～……」

おやっさんは厳しいな～おとんのたこ焼きは早くてむっチャ美味しいのに……

「ふん、おおきにな真夏…ワイもぎょうさん腕を上げるさかい。そんときゃおやっさんの味を超えるたこ焼き食わしたる」

「おとん……うん！」

「へっワシの味を超えたきゃワシの腕見てもっと腕を上げい」

「へい！」

「おとん！ファイトや！」

「おう！」

おとんは気合よく声を出してウチに返事をしてくれはった。

「ほら、真夏ももう行きや。客をぎょうさん集めたッてくれ」

「了解や！」

ウチは走って人の多い場所へ向かう。そして何時も通り大きな声を出して宣伝をする。

「美味しいたこ焼きありまっせ～！よってってや～！」

ウチがそう言うといろんなお客さんがウチによってくる。もっと声だしてぎょうさん稼ぐで～！

「たこ三味のたこ焼きは世界一いいいいいいいいい！！！」

ア、アカン…少し気合を入れ過ぎてもうた……お客さんが引いてしもうてる……

そんなこんなで店は大繁盛、ウチとおとんはホクホク顔で家路に着いた。

「おと～ん、いっちゃんの家に遊びにいってもええか？」

「ん？千冬の嬢ちゃんの家にか？」

「そや、いっちゃんと遊ぶ約束してんねん」

ウチがそう言っておとんに頼むとおとんは笑って言う。

「ええで、でも暗くなる前には帰るんやで？」

「うん！分かったで！」

そう言ってウチはいっちゃんの家に向かって走る。

「――――――――、ん？曇って来よったな……」

おとんが何言うたかは離れてしもうてよう聞こえんかったけど、ウチはおとんの吹いた言葉を聞いてやな予感がしたんや。この時、ほんまにあないな事が起きるなんて思いもせんかった……

視点・「織斑一夏」

今俺はまなちゃんとの約束があって自分の家の前で待っていた。

「遅いな…まなちゃん」

俺がまなちゃんがくるのを待っているが、その待っている人物はなかなか現れない。

ちなみに、俺は普段千冬姉ちゃん意外はちゃん付けはしない。では何故まなちゃんはちゃん付けして呼んでいるかと言うと……

（ウチがサッカーで勝ったらまなちゃんって呼んでな？）

まなちゃんにそう言われ、俺は負けるはず無いと思って勝負をしたのだが……結果…負けてしまった……

と言う訳で俺は真夏をまなちゃんと呼ぶ事になってしまった…これ結構恥ずかしいんだがな……

「ふう…少し様子を見てくるか…」

俺はまなちゃんの家のある方向へとかけだす、アイツが約束の時間に遅れるなんて結構珍しい……

そう思っていると……

「ん？アレって……」

少し走ってから少し経つと黒服の一団がいた。

（なんだあれ？）

俺が少し近づくと黒服の人たちの奥に誰かがいた。

「あの子って…まなちゃん？」

囲まれてる？そう思っていると、

「来てもらおう」

「嫌や！離してぇ！」

（！？）

ま、まさかこれって……

（ゆ、誘拐！？）

俺は誘拐の現場を目撃した。それも自分のいとこがさらわれようと

している。

（な、なんとかしないと……！）

でも…俺は，その場に動けなかった……

（ど、どうすれば……）

俺が躊躇していると黒いワゴン車が黒服の前で止まり、まなちゃんを無理やり抱きかかえた男は車にまなちゃんを放り込もうとしている。その時、偶然にも男に担がれたまなちゃんと目があった。

「！、……」

（ま、まなちゃん？……）

まなちゃんはずっと俺を見ていた。その目は助けてと…そう呼んでいるようで成らなかった。

でも俺は、その場から動く事が出来なかった……そしてまなちゃんは車に放り込まれ、

「きゃあぁ！！」

「！、まなーーーーーー」

声を出しそうになったが慌てて口をふさぐ、

「ん？」

「どうした？」

「……」

男の一人が俺に気づいた。不味い、気づかれた!?

「……いや、気のせいか」

「そうか、さっさと行くぞ。二階堂さんが待ってる。あっちの方も桐生一馬の泣き所をさらい終わったはずだ」

「そうだな……」

そう言って男達はワゴン車に乗り込もむ、

「た、助けなきゃ……!」

だが俺の足はガクガクと震えていた。なんだよ…なんで震えてんだよ!?

その時聞き覚えのある声がした。

「ちょっと待って貰えないか?」

「あぁ?なん…バキィ!…ブべらッ!?」

俺は顔を上げるすると……

「え!?」

「まなちゃんは東城会の大事な人なんでね?返してもらう……!」

そこには神室町を仕切る……

「誰だテメェ！？」

「俺か？俺は……」

東城会六代目会長……

「俺の名は――――――」

「堂島大吾だ」

堂島大吾さんその人だった……

「んぅ～！んー！（だいちゃん……！）」

「まなちゃんは返してもらうよ？」

「と、東城会だとぉ！？」

「そ、それも六代目！？」

「ひ、ひるむな！やっちまえ！」

ヤラレ役の台詞を言う黒服の男達は次々と襲いかかるが、大吾さんは微動だにしなかった。

「危ない！」

俺がそう叫ぶ大吾さんは相手の手を取り、

「ふんっ！」

ボキッ！

「ぎぃやあああああああっ！？」

腕をへし折った。それを見た黒服の相手は驚く、

「ひ、ひぃぃ……」

「お、折りやがった……！？」

「いてぇ！！」

「神がお前達を見逃しても……」

大吾さんは後ろを向き背中を指差す、

「俺の背中の不動明王は見逃さない！」

「ううぅ……」

「こ、こいつ……」

「た、助け…助けて……」

大吾さんは拍子抜けと言った感じで溜息を吐く。

「今ならあまり血を見ずに終わらせてやる……まなちゃんを解放しろ」

「く、クソっ！」

大吾さんジリジリと後ずさる男達に近づく、するとまだ車の中にいた一人がまなちゃんを抱えたまま出て来て、

「動くな！コイツがどうなってもいいのか！？」

「！？」

「んー！んー！」

そこには口に布を巻かれ縛られているまなちゃんがいた。

「てめぇら……！」

「へ、へへ……これじゃあ手も足も出せねえな！」

「仲間の腕折られたケジメ付けさせてやるぜ！」

そう言って大悟さんに近づいてくる男達に、大吾さんの顔が険しく

なる。
ど、どうすれば!?

（そ、そうだ!まなちゃんを助け出せば!……でも…）

ど、どうやって!?そうしているうちに男達と大吾さんの距離が縮まって行く。
……お、俺がやらなくちゃ!

「逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ!」

そう自分に念じて覚悟を決め、俺はまなちゃんを捕まえている男の元に走った。

「うおおおおおおおっ!!!!!」

「!?、な、なんだ!?」

「まなちゃんを返せえええええええっ!!!!!」

「一夏君!!??」

「な!?まだ仲間がいたのか!?」

皆が驚いているがそんな事しらない!今はまなちゃんを!

「まなちゃんを返せ!」

「なぁ!?い、いてて!コイツに足に噛みつきやがった!?」

俺は男の足に噛みついてまなちゃんを助けようとする。

「は、離せ！」

「んー！」

「んうぅー！（いっちゃん！）」

「このガキィ！！」

男は思いっきり足を振って俺を蹴飛ばす、その勢いで俺は飛ばされて壁に当たったしまった。

「ぐうぅっ！！」

「んー！？」

「一夏君！？」

くっ！……負けるかぁ！！！

「まだまだぁ！！！」

「こ、こいつ性懲りもなく！？」

俺はまた再度男の足に噛みついてまなちゃんを助ける。

「いててててっ！？このガキっ！！」

ゲシッ！

「ぐっ！！」

「んう！んうぅー！！（いっちゃんもう止めてぇ！）」

まなちゃんが何か言ってはいるけど俺は……

ガシッ！

「な！？今度は掴みやがった！？」

「俺は……」

俺は龍司さんに！

（一坊…ワシは昔恨まれる様な事しとった…せやから、真夏にもそれが及ぶと思うんや…）

俺はぁ！！

（せやから、そんときに真夏の一番近くにおる一坊に……）

まなちゃんをぉ！！

（真夏を守って欲しいんや…ええか？男の約束やで？）

「守る！！死んでも離さない！！」

「こんのガキはあぁ！！！」

男は足を上げ、俺を踏もうとする。

「死ねやぁ！」

「んーーーーーー！！」

「くぅ！！」

俺は目をつむって痛みをこらえる。だがその痛みは来なかった。

「ふうぅ…間一髪…だね」

「な、なあぁ！？」

「え？」

「んんう？」

俺はゆっくりと目を開けると、

「もう大丈夫だ。一夏君…あと残っているのはコイツだけだよ」

「へ？」

「な、なにぃ！？」

俺はあたりを見回す、すると……

「お、お前ら！！」

向こうで血を流して悶絶している二人組の男がいた。
大吾さん…俺がまなちゃんを助けている間に倒していたんだ……
そして大吾さんは俺を踏もうとしていた足を持ち上げて男の体勢を崩し、

「んむう！？」

「おわぁ！？」

まなちゃんだけを取り上げて男を倒した。
そして大悟さんはまなちゃんの口に着いていた布を取り安否を確認する。

「大丈夫か？まなちゃん」

「大丈夫や！いっちゃんが助けてくれてん！」

「そうか……」

大悟さんはその場でまなちゃんを下ろすと倒れている男の元へと歩みよる。

「覚悟は……出来ているんだろうな？」

「なっ……」

男は何かとてつもない者を見た様な目で大吾さんを見る。
俺にも分かる。大悟さんの後ろに不動明王が見えている様な錯覚が……

「お前は三回の罪を犯した……」

「さ、三回？」

「まなちゃんを誘拐した事、一夏君に怪我をさせた事、そして……」

大吾さんは握り拳を作り、構える。
その構えは喧嘩殺法だ。

「女の子に涙を流させたことだあああぁっ！！！！」

バキイイイィッ！！！

「あべしぃ！！？？」

大吾さんの渾身のパンチが男を取らえる。男は円をかく様にフッとばされてそのまま大地に伏した。
仏の顔も三度までってやつだな……

「……ふうぅ一夏君大丈夫か？」

「あ、はい……大丈夫です」

俺はポカーンと見ていた様で大悟さんに声を掛けられるまで固まっていたようだ。
て、それどころじゃない！

「まなちゃん！」

「いっちゃん！」

まなちゃん俺に賭けつける。
その顔は心配と悲しみで染まっていた。

「いっちゃん！いっちゃん！平気か！？平気なんか！？」

「だ、大丈夫だまなちゃん…伊達に千冬姉ちゃんに鍛え上げてもらって無いからな」

「で、でも口から血ぃでとるで！？」

「え？ああ、これか……」

どうりで痛いと思ったら、蹴られた時口の中切ったかな？

「俺は大丈夫だよ」

「でも、ウチを助ける為に……」

「まなちゃんの為におった傷だ。どうってことないさ」

「……」

まなちゃんは声を押し殺して泣いていた。そっか…誘拐されかけたんだもんな…

「……俺は救急車と警察を一一一一一一むっ!?」

大吾さんは何かに気づいたらしく、慌てた声だ。何事かと俺も見ていると、

「ず、ずらかるぞ!」

「「「お、おう……」」」

ボロボロになりながらも必死に車に乗って逃げる男達がいた。そして全員が乗り車は急発進して逃げた。

「まてぇ!…クソ、逃げられた……!」

大吾さんは悔しそうにして顔を歪めていた。
俺も奴らが逃げた事に腹が立ったが、今はまなちゃんの無事を喜ぼう。

「まなちゃん、怪我は無いよな?」

「うん…グスッ…無いでぇ…」

まなちゃんは泣きながら応える。
ほんとに怖かったんだなぁ……

「まなちゃんもう大丈夫だから泣かないで一一一一一」

「ちゃう……」

「え？」

まなちゃんは声を上げて否定する。
そして顔を上げて俺を見るまなちゃんの顔は涙でぐちゃぐちゃだった。

「ウチが泣いとるんはいっちゃんが怪我したからや……」

「まなちゃん……」

「いっちゃん…もう無茶せんといて…いっちゃんにもしもの事があったら…ウチはぁ…」

そう言って俺に寄り添うまなちゃん、そうか…心配かけちまったんだな…俺は……

「わりぃすまねぇ許せ……」

「そんな…謝らんでもええって…」

まなちゃんはまた泣きだし、俺の胸に顔を埋める。
それに俺はまなちゃんの背中をポンポン叩いてあやす、

（……守ろう…今度こそ…絶対に！）

俺は生まれて初めて強くそう願った。

「……お邪魔のようだな……」

大悟さんは察してケータイを取り出して警察と救急車に電話した。
その後警察と救急車が駆けつけて俺はタンカに乗せられまなちゃんと一緒に病院に行った。
そして病院で待ち構えていた千冬姉ちゃんに無茶をするなと抱きつかれて怒られたのは少し意外だった。
千冬姉ちゃんと一緒に駆けつけていた龍司さんは俺の頭を撫でてよく守ってくれたと言い俺はなんだか分からないけど泣いた。その光景を嬉しそうに見つめるまなちゃんを見て恥ずかしくなったのはここだけの秘密である。

七話や！「秋山フィーバーや！あとだいちゃんも」（後書き）

真夏「いっちゃん…ホンマに平気か？」
一夏「大丈夫だって、ほんとに口を怪我しただけだから」
真夏「でもぉ…」
龍司「真夏、傷は男の勲章とも言うんや。褒めたれや」
千冬「龍司さんの言うとりだぞ真夏、一夏は良い事をしたんだ」
真夏「……そやね…いっちゃん、おおきに！」
一夏「あ…うん…（え、笑顔が眩し過ぎる！！）」

八話や！「ウチは…人を……」（前書き）

遅くなってしまい申し訳ありません

八話や！「ウチは…人を……」

「社長…あれはいったいなんだったんでしょう……」

「分からない…まなちゃんの言うとおり撮影だったらよかったんだけどねぇ……」

「スピィ～……」

俺は今背中で寝ているまなちゃんを緒ぶって花ちゃんと一緒にスカイファイナンスへ帰宅している。

あの襲ってきた連中を片づけたはいいが、どうして俺が襲われたのか分からな……いやあり過ぎて検討がつかないだけか……ともかく、俺は撃ちあった場所から離れる事を選択して帰る事にしたんだ。

なんでまなちゃんが寝ているかと言うと歩いて帰る途中でコクリコクリと頭を揺らして寝むそうなまなちゃんを俺がおんぶする事になったんだ。まあ、俺は役得だけどね。

「……まなちゃんってある意味大物ですよね」

「そうだね、あんな事があったのに寝てるし……」

「うう～ん……えへぇ…」

寝ているまなちゃんは何故かにへらぁと笑ってよだれを垂らそうとしている。

ちょ！俺のスーツに掛ってしまう！？

「あー今吹きますね……」フキフキ…

「んむぅ……」

「ふう…危なかった」

危うくスーツが涎かけになるところだった……しかしほんとになんだったんだろうねぇあれは……

俺は本物の銃で人を撃った感触を思い出し、少し身震いした。

（まなちゃんにホントの事が分かったら人を撃った俺を責めるかなぁ……）

何故かそっちがかなり心配になる俺だった。と…着いたか……

俺は階段を上がって花ちゃんに鍵を開けてもらい中へと入った。

「どっこらせっと……」

ポスンッ

「んうぅ……スゥ…」

まなちゃんを起こさない様に部屋の奥に前々から用意していたハンモック（注：以前からまなちゃんはウチの会社で寝泊まりすることがあって用意した物だ。ソファーでもよかったんだけどハンモックが安く売られていたから衝動買いしちゃったんだよね……）で寝かせ寝顔を見る。

「ホント、子供の寝顔は天使だね……」

伊達に「神室町の龍妃」、なんて呼ばれてはいないか……
ちなみになんでそんな異名で呼ばれているかと言うと、まあ…あの人の娘だしねぇ？

「そうですね…」

俺達はまなちゃんの寝顔を楽しみつつ、煙草に火を付けようとしたがまなちゃんがいるので止めた。
そしてさっきの出来事について花ちゃんが切りだした。

「あの人達って……ホントになんだったんでしょう……」

「分からない…」

奴らがなんで俺達を襲ったのかは分からない……まあいずれ分かるだろうさ……とその時、花ちゃんは唐突に、

「私…今夜泊って行きます！」

「へ？」

「だって秋山さんが心配ですし…まなちゃんも……」

「……俺は良い秘書を持ったもんだ……」

俺はしみじみそう吐く、まなちゃんと良い花ちゃんと良い、俺は恵まれている……

「でも襲わないでくださいね？」

「襲う？俺が？、ハ、ハハハハハ……」

俺が乾いた声で笑うと花ちゃんはムスーとした表情で、

「なんです？その笑い……」

「えっと……」

花ちゃんは大丈夫として…まなちゃんは……

「まなちゃんも襲わないでくださいね？」

「いや、少女に手は出さないよ？」

「ホントですかぁ？」

……えっと……

「……もういいです。私はソファーで寝ますから」

そう言って奥から毛布を持って来て花ちゃんは寝る。さて……

「俺も寝るかな……」

考える事は沢山あるが今は体を休めよう、まなちゃんの親御さんにもまなちゃんから会社で寝るかもと伝えたって聞いたし、

「明日、何もなきゃいいが……」

俺は不安な予感と共に椅子で寝る。まさか明日にはリアルバイオハザードが起るとは夢だけにして欲しかった……

視点・「郷田真夏」

「ふぁ～……よう寝たでぇ……」

ウチは目をこすりながら駿ちゃんが用意してくれはったハンモックから起きあがる。
あたりを見回すと雑誌を顔に乗せて寝ている駿ちゃんと……

「花ちゃん?」

体を震わせて毛布を体にかけてソファーで寝ている。花ちゃんを発見したんや、

「花ちゃん?平気かいな?」

ウチは少し心配して花ちゃんの元に駆け寄ってん、
そんでおでこに手を置くとかなり熱かったんや、

「これ…もう微熱やあらへんで……」

ウチは直ぐに駿ちゃんを起こしに行く。

駿ちゃんは相変わらずのスタイルで寝とっといた。

「駿ちゃん！起きてえな！」

「う、うぅん……」

「駿ちゃんってば！」

「うぅん？……まなちゃん？」

「せや、駿ちゃん起きて、花ちゃんが！」

「花ちゃんがどうかしたかい？」

ウチは立ちあがった駿ちゃんの手を引いて花ちゃんのところまで連れて行く。

駿ちゃんは震えている花ちゃんのおでこに手を当てると険しそうな顔をしたんや。

「これはもう微熱じゃないな……」

「それはウチがもう言ったで？それよかはよ花ちゃんを――――」

ガチャガチャ！

「！」

「ん？なんや？お客さんかいな？」

でもなんやろう……嫌な予感がするで……

とその時駿ちゃんはテーブルの上にあった拳銃を取ってドアの横へ

と移動したんや、

「駿ちゃん？」

「あ、秋山さん？」

あ、花ちゃん起きたんや、

「シッ……」

駿ちゃんがそう言うとウチらは黙って駿ちゃんの様子を見る。

カチリと駿ちゃんは拳銃のハンマーを下ろしてドアに近ずき……

「どちらさん？」

駿ちゃんがそう尋ねても返事が無く、次の瞬間……

ドオォンッ！

「！？」

「な、なんや！？」

「きゃあああああ！」

ドアを突き破って血だらけを人たちが押し寄せて来よったんや……て！

「な、なんや？まさかまだ撮影続いとんのか！？」

「まなちゃん！離れて！」

駿ちゃんがそう言うと拳銃を構えて入ってきよった人たちを迎え撃った。

ウチは花ちゃんを庇うようにして部屋の奥へと連れて行く。クッ！お、重いで！

パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！

部屋の中で銃声が響く、駿ちゃんの射撃センスは良いようで次々と入って来た人を倒す。

せやけど人数が多いようで次第に追い込まれて来よった。

「あ”あ”！」

「！？、不味い！」

「駿ちゃん！」

ウチはハッとして昨日撮影で拾ったある物を取り出して……

「わあああああっ！？」

「駿ちゃんから離れて！」

パアァンッ！

「あ”ーーーーーー」

ドサリッ

駿ちゃんに噛みつこうとした人をウチは銃を使って倒した。
それを見た駿ちゃんはポカーンとして見てはった。

「駿ちゃんボーとしてはる時やないでぇ！」

「え！？で、でも……」

「はよ！」

「は、はい！」

駿ちゃんは再起動して相手を出迎える。まったく……二日連続撮影なんて聞いて無いで……

真夏があの時に拾った密造銃で秋山と共に交戦し、奴らは何とか倒した。

「ふぅ……」

「まったく、ウチらの会社を使ってまで撮影するなんて…非常識や！」

相変わらずズレた発言をする真夏に秋山は、銃を使った事に怒って良いのか現実を教えるかで少しなやんだ。秋山は直ぐに窓の方へと歩き、外の状況を確認…その後、電話を取って見たものの繋がらずケータイを見たが圏外だった。

「……花ちゃん、まなちゃん…どうやら集金は無理そうだ」

「どしたんや？なんか外であったんか？」

秋山は真夏の問いのどう答えればいいか悩んだが、花の状態が最優

先と考えた。

「その話は後だ。大丈夫かい？花ちゃん」

「はい、なんとか……」

「花ちゃんもしかして昨日の風邪が悪化したんか？」

「歩けそう？」

「はい――――――きゃ」

花は立ちあがろうとするが体に力が入らないらしく崩れてしまう。

「花ちゃん！」

「体の具合は？」

「寒いです…凄く」

「医者がいるな……柄本先生を呼んでくる」

「え？…でも」

花は倒れている奴らを見る。秋山も気づいて苦虫を噛み潰した様な顔をする。

「？、どしたん？」

「いや……とりあえず場所を移そう」

そう言って秋山は花を担ぎ部屋を出る。真夏もそれに続いて部屋を出た。

「どうするんですか？」

「二階にさ、ニューセレナって店があるだろう？」

「はい……」

「そこに立てこもろう」

「駿ちゃん平気なんか？」

「大丈夫だよ……花ちゃん、少し、最近痩せた？」

「おととい……一キロ、痩せました」

「やっぱりね」

「昨日…二キロ増えちゃいましたけど……」

「あっそ……」

「意味無いやん……」

秋山達は真夏を前衛にして階段を下りている。
真夏が前の安全確認をして秋山達はそれに続く、
そして二階に着くと秋山は花を下ろして階段の隅っこになる植木鉢

を退かす、

「よっこらせと……」

「お、鍵や」

「不用心なんですね…セレナさんって……」

「そうなんだよねぇ……」

そう言って秋山は扉に鍵を差し込む、

「でも助かった礼は今度言うとして……」

「せやな」

秋山は扉を開け、真夏はすぐさま中に入り安全を確保する。

「異状無しや」

「……ちょっとだけ邪魔させてもらおう」

秋山は真夏の手慣れた行動に苦笑いしつつ花の肩を担いで中へと入った。

真夏は奥から持ってきてくれた毛布でソファー横たわる花に掛ける。

「直ぐに戻るよ。柄本先生を連れてくる」

「すみません……気を付けてくださいね……」

「分かってる、終わったら今日こそ集金に行くよ」

「ウチも付き合うで？」

「はい……」

そう言って外に向かう秋山、そしてそれに着いて行く真夏、秋山が気づき、ピタリと足を止める。

「ーーーーーーまなちゃん？」

「なんや？」

「なんでついてくるの？」

「？、駿ちゃん一人で行こうとしてはるからウチが手伝おうと思うて」

「いや、外は危険だから……」

「危険って……映画の撮影なんやろ？」

「……まなちゃん」

「なんや？突然真剣なりはって…」

秋山は決心した様に真夏の肩に手を置くと語りだす。

「昨日の時も、今日起きた出来事も……全部本当の事なんだ」

「本当の事？」

「そうだ。俺が撃ったあの人達も…ホントは役者じゃなくて、本物のゾンビ……かもしれない」

「ゾンビって……駿ちゃん死者が蘇ってホントに襲ってきた言うんか？……笑えん話やで？」

真夏は少し可笑しそうにして笑う。だが秋山が真剣な表情したまま真夏の目を見ている事に気づき、次第に目を見開いて信じられない様な顔をする。

「……ホンマなん？」

「本当だ」

「じゃあ駿ちゃんが撃った人は？」

「……死んじゃった…と思う」

「じゃあ…じゃあウチが撃ってしもうた人達も……？」

「……ああ」

真夏は手から銃を取りこぼしてその場でガタガタと震える。花も真実を告げられた真夏を心配して上半身だけを起こす。

「う、ウチ…は…ウチ、人を殺して――――」

「まなちゃん落ち着いて……」

「ウチ…人殺しなって……」

「まなちゃん……」

「ウチぃ！」

「まなちゃん！」

秋山は力いっぱい真夏を抱きしめる。秋山の胸の中では真夏が息を殺して泣いていた。

「……ありがとう」

「え？」

「まなちゃんが俺を助けてくれたから……俺はここにいて、花ちゃんやまなちゃんを助けられたんだ」

「でも……ウチは…」

「それなら俺だってそうさ……まなちゃんよりも多く人を撃っちゃったしね」

「駿…ちゃん」

秋山は真夏の頭を撫でる。真夏は撫でられいく事に落ち着きを取り戻し始める。

「それに、あれは正当防衛だ。気にするなとは言えないけど、まな

ちゃんは俺達を助ける為に撃ったんだ……誰も責めやしない。ううん…誰にも責めさせない」

「うん…」

秋山は少しの間真夏を抱きしめたままで頭を撫で続ける。
真夏も落ち着いたのか涙はもう止まっていた。そして数分が立って
真夏は秋山から離れる。

「……決めたで」

「ん？何をだい？」

「ウチも行く」

「は？」

「駿ちゃんだけに行かせられへん。ウチも行くで！」

「い、いや！だから……」

「それに駿ちゃんやて銃もったんは昨日からやろ？ほんならウチが教えながら先生んとこまで行くやさかいそれに駿ちゃんの事が心配やねん」

「でも――――――」

秋山は真夏を連れ行く事を拒むが……

（――――――あれ？不安があるのになんでこんなに心強いんだ

？）

そりゃまあ真夏はガンスリンガー宜しくで銃の扱いは真島に教えて貰っているからだろう。
その指導を受ければ問題無く進める予感が秋山にはしていた。

「……危険だと思ったら直ぐにセレナに帰るんだよ？」

「それじゃ！」

「あ、秋山さん！？」

「花ちゃんゴメン、一人で残す事になっちゃうけど……」

秋山は申し訳なさそうにして花に話す、花もはぁぁとため息を吐いて……

「……もし安全な場所に出られたらまなちゃんをそこに置いて行ってくださいね？」

「分かった」

そう言って秋山は外へと出て真夏もその後に続いた。

「花ちゃん、直ぐに戻って来るわ！」

「秋山さんから絶対離れちゃダメだからね？」

「は～い！」

そう言って真夏はドアを閉めて鍵をかけてる。

「はあぁ……凄く心配だわ……」

花は横に寝て秋山達の無事の帰還を祈りながら瞳を閉じた。

「まずは柄本先生のところに行かないと……」

「そやね、またあないな人たちと戦う事になるんやな……」

「まなちゃん…やっぱり」

「平気や、これでもウチはおとんの娘や……支えるで駿ちゃん」

「っ――――――ぜったい無理だけはしないでね？」

「うん、約束や」

二人は前を向いて歩く、ここにガンスリンガーガールと金貸しの男と言う奇妙なタッグが組まれた。

八話や！「ウチは…人を……」（後書き）

秋山「まなちゃん…俺は……」

真夏「駿ちゃん言ったやん、正当防衛やって……それにウチも撃ったんや、駿ちゃんはウチ助けてくれはったんや…せやから責めんのはお門違いやしおあいこや♪」

秋山「まなちゃん…ありがとう」

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（前書き）

真夏「う～ん職業先は東城会……」
一夏「ま、まなちゃん！？」
千冬「私達は出番無いのだな…ＩＳ作品なのに…」
作者「結構後に原作は開始されますけどね……」

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」

ウチらは花ちゃんの風邪を直す為、解熱剤を持っている柄本先生の所に行く所や、
そんでウチらは花ちゃんを残してニューセレナ出た。

「鍵はちゃんと閉めた？」

「大丈夫やで、鍵はちゃんと閉めたしウチが持ってたもう一丁のハジキも花ちゃんに渡しといたわ」

「用意が良い事で……」

にゃはは……ちゃっかりしてる所がウチのええ所やで？

「それじゃーーーーーー」

「ほなーーーーーー」

ジャジャキンッ！

「行こうか！」
「行きましょか！」

ウチらは柄本先生がいる医院がある泰平通り西へ歩く、そしてニューセレナ裏から出て天下一通りに出ると……

「か、神室町が……」

「一体、どうなってるんだこれは……！？」

神室町のあちこちから火の手が上がり、破壊された町やった。

「どないしてこないな事に？」

「分からない……今は柄本医院に急ごう！」

「せやな……」

ウチらは道を阻むゾンビを避けては撃って天下一通りを進む、

「ムムッ！天下一通りの道が塞がれとるで……」

「この先には行けそうに無いな……」

ウチらがバリケードの前で悩んでいると駿ちゃんが壊れた建物を見ている。

「ーーーーーーーー、？、どしたん？」

「……この建物の奥から反対側に出られるかもしれない」

「え？ホンマ？」

「うん、言ってみよう」

ウチは駿ちゃんの後に続いて神室町西屋上上り口の中に入る、建物の中は所々損壊しており何時崩れても可笑しくは無い状態やった。

駿ちゃん勇気あるでぇ……

「まなちゃん気を付けて……粉じんで見えないけど、いるよ」

「了解や駿ちゃん、お互いバックアップを忘れんように、な？」

「分かってる、まなちゃんも俺から離れない様にね？」

「ｏｋ、や」

ウチらは粉じんで見えん敵を確実に排除しつつ上の階へ通じる階段を上って行く。

「良し、最上階だ……うわっ！？」

「駿ちゃん！？」

ウチらが上り終えると左からゾンビが現れ寄った。

「はいだら！」

パンッ！

「う”あ”……」

うめき声を上げてゾンビは倒れはった、危ないとこやったで……

「あ、ありがとう…」

「気い付けや駿ちゃん……行き成りドア破って出てくるんはゾンビの十八番や」

「……以後、気を付けます」

駿ちゃんは頭を下げてウチに謝る。もう……謝って済むんなら他の人やてゾンビにならへんで？

そう言いつつウチは階段の反対側にあるドアに見つけて扉の横に体を密着させる。

「扉の奥にいそうやな……」

「そうだね…お？窓がある」

駿ちゃんはドアの横にある窓を覗く、すると……

「うわ……結構いる」

「どんくらい？」

「二人じゃ対処に難しいぐらい」

「困ったもんや……」

ウチらがどう切り抜けるか考えていると駿ちゃんが何かを見つけた。

「！、あれは……ドラムカン？」

「使えるでソレ……何のドラムカンか分かる？」

「……何かの燃料だね」

「なら可燃性は十分ありや、駿ちゃん」

「わかった」

駿ちゃんは窓から銃でそれを狙い、

「当たれ！」

撃った、次の瞬間駿ちゃんの撃った弾はドラムカンに当たり爆ぜた。

「うひゃあ！」

「クッ！」

ウチの横の扉が吹き飛ぶ、あ、危なかったで…巻き込まれてたら死んでたわ……

ドラムカンの横で立っていたゾンビ達は上手に焼けていたんや……

うぷっ……

「まなちゃん平気？」

「な、何とか……大丈夫や」

大丈夫な筈やのに……やっぱりウチに荷が重かったんか？

……止めよう、今はクスリを取りにいかへんと……！

「平気や…いこ！」

「……うん」

ウチら進む、少し経ってからウチらは広い部屋へ着くと不気味な声が聞こえて来た。

「な、なんや！？」

「なんだ…この不気味な声は？」

ウチらが辺りを警戒すると、奥の廊下から……

「！、くるで！」

「勘弁してよ！」

ウチら構える数十人のゾンビを目前にして、

「！、駿ちゃん、銃よりもこれを！」

「！、これは！？」

ウチは駿ちゃんにある物を指差して気づかせる。

「これ、使えるで！」

そう、お馴染みの……

「鉄パイプ！」

「これで一掃や！」

駿ちゃんは鉄パイプを持って敵へ振りかぶり怒涛の如くなぎ倒す、
う～んやっぱり駿ちゃんは棒で戦った方が見栄えするで、
そんなこんで一掃してウチらは階段を下りるせやけど……

「ちょ！行き止まり！？」

「ん？後ろか！」

後ろからゾンビが現れる。まあ、数が少なかったんで早々と退場してもろおたけど、

「ん？この壁は……」

「どしたん？」

「壊せそうだ……あれを壊して外に出よう！」

そう言って駿ちゃんはウチが持ってた鉄パイプで叩いて壊し道を開けた。

「駿ちゃん……ここ高いで？」

「まなちゃん、俺に捕まって」

そう言って駿ちゃんはウチをお姫様だってして飛び降りる。
こ、これは！一度は女の子が憧れるシチュなんやないか！？

「もう駿ちゃんウチはまだ五才やで？困るわぁ……」

「ん?何が?」

「なんでもあらへんで♪」

「?」

駿ちゃんは首をかしげながらも飛び降りて着地する。その時コキッと駿ちゃんの腰のあたりから聞こえてきたのは黙っとこう。駿ちゃんも悲痛な顔しとったし……

「平気か?駿ちゃん」

「ど、どうってことない!」

そないな顔で言われても説得力無いで?
とりあえずウチを下ろして腰をトントンしとる駿ちゃん、
ホンマに歳は取りたくないもんや…あ、ウチはまだ五歳児やった。
第三公園を抜けてウチらは天下一通り裏路地を通り天下一通り表へと進んだんや、
その時にウチはたっちゃんがバイトしてはるコンビニを見つけたんや少し寄ってくと呻き声と一緒に違う声を聞こえはった。

「おいっ!しっかりしろ!」

「ううぅ……」

「今の声……駿ちゃん!」

「うん、彼だね」

ウチらは急いで半壊しているコンビニの中へ入る。
するとコンビニ定員の服を来てトンファーを持つタッちゃんとそのタッちゃんに守られる様に蹲っている知らん人がおったんや。

「真夏!?」

「タッちゃん!ってあれ?どないしてこっちのコンビニいんの?」

「こっちのコンビニ定員が欠落してな。呼ばれたんだ」

「さよか〜」

「龍也君!無事だったか」

「ああ、何とか…でもバイトの後輩が……」

「ううぅ……」

真夏は蹲っている男に近付いて状態を見てみる。

「ーーーーーー打撲やな、運がええで噛まれてたら助からへんかったで?」

「!、そうか、なら俺はコイツを連れて安全な場所へ避難する」

「一人で平気なん?」

「俺を誰だと思ってんだよ?それに後で沙紀と合流するから心配すんな」

タッちゃんはウチに笑いかけると男の人を担いで外に出ていきよった。

「タッちゃん……」

「まなちゃん、俺達も自分が出来る事をしよう」

「……うん」

ウチらは少し心配やったけど、とにかく花ちゃんを助けんと！
そうしてウチらは泰平通り西へ向かうとそこには……

「なんやの……これ？」

「……なんつーデカイ壁だ……」

ウチらの目の前には行く手を阻む巨大な壁が立ちはだかる。
茫然とウチが立つくしていると駿ちゃんが叫ぶ、

「おい！誰かいないか！？」

「お願い！返事してや！」

「おい！」

ドンッと駿ちゃんが壁を叩いて、ウチが呼んでいると後ろから誰かに声を掛けられる。

「無駄だぜ」

「へ？」

「！」

足音が近ずき、ウチらは後ろ向くと……

「誰も答えやしねえ」

「え、えっと……」

「……」チャキっ

「おっと」

駿ちゃんが話して来た人に銃を向けて警戒する。
この青い服来た人は手を上げる。でもその顔は何故かあまりビビッとらんかった。

「俺達は隔離されたんだ。見捨てられたんだよ」

そう言ってウチらそう告げた……
ウチらが黙って聞いていると青い服を着た人がまた喋る。

「あんたの事を知ってるぜ、スカイファイナンスの秋山社長だ」

「なんや駿ちゃんしっとるん？」

「いや…こっちはアンタを知らない」

「長濱ってケチな極道だ」

そう言って自己紹介をする長濱さんは手を下げてこっちに近付く、

「しかしなんだ？最近の金貸しや子供は……いや、子供の方は明らかに可笑しいか……」

「ウチがハジキ持ってたら変なんか？」

「……ノーコメで…昨夜あんたのご同業のを拾ったんだ」

「ならそいつはオレに寄こすのがスジってもんだ」

駿ちゃんはそれを聞いて鼻で笑う、

「本気で「ほい」てってまなちゃん！？」

「あ？」

ウチは長濱さんに自分の銃を渡す、

それを見て驚く駿ちゃんとポカーンとする長浜さん、なんや？ウチに何か間違ってん？

「おい、何の真似だ？」

「何のって…銃を返してるんやで？」

「ま、まなちゃん！何を言って－－－－－！」

「ウチのおとんは元極道や」

「……だから、なんだ？」

長濱さんはウチに視線を合わせて見る、ううぅ…ちょっと怖いかも……

「元極道でも…ウチは極道や無いけど…スジと言うんなら、それは通さなアカンねん…それが元極道でもウチはまだ極道にはなれへんけど、それでもスジだけは通したいんや」

「まなちゃん……」

駿ちゃんは心配そうにウチを見る。

堪忍や駿ちゃん……ウチはやっぱり血は繋がらへん親子やけど、元極道の娘なんよ。

「ウチはおとんに憧れて極道と触れあったんや、せやからスジを通したいんよ」

「……」

長濱さんが途中から目を見開いて驚いた表情した後に顔を上げて大笑いした。

「ははははははははっ！！」

「……」

ウチらはそれを黙って見ている。笑い終えた長濱さんはウチが渡した銃を押し返した。

「長濱さん？」

「気に行ったぜ嬢ちゃん、アンタ大きくなったら度胸のある良い別嬪さんになるぜ？」

「ウチは極道志望や」

「そうだったな、良い極道になる」

ウチと長濱さんは笑いあうと駿ちゃんがヤレヤレとした感じで頭を掻いていた。

「気に行ったついでに抜け道の案内をしてやるよ」

「え！ホンマに！？」

「極道に嘘はねえその代わりといっちゃあなんだが……」

「なんや？」

「ハジキ扱ってる店を知っているそこで俺の銃を調達してくるんだ」

「俺達が？二人で？」

「今ハジキ持ってんのはアンタと嬢ちゃんだけだ」

「ハジキ……確か劇場前通りの地下のＤＶＤ店に置いてあるって真島組の人が言うてたなぁ……」

なんでしってるの？と言う突っ込みがきはったけど、まあそれはお

いおい…な?

「しかし、極道がどうたらこうたら言ってたけど…まったく、それが極道の台詞かねぇ」

駿ちゃんは呆れる。しゃあないやん極道やてゾンビ相手の戦いなんてやった事ある訳ないじ、

「しょうがねえだろ、俺は……桐生一馬じゃねえんだ」

ピクッ

「フッ、伝説の極道、堂島の龍か」

「知ってんのか?」

「……で?ウチらはそのDVD店に行けばええんやな?」

「ああ…てなんだ?どうしてそんな睨ん目ぇしてんだ?嬢ちゃん」

「まなちゃん?」

「……何でもあらへん…はよいこ」

ウチは駿ちゃんの手を引っ張って行く。

「まなちゃん?」

「聞きたくない名前を聞いてもうたで……」

「え？」

「何でも無いんや…行くで」

そう言ってウチらは劇場前通りの地下にあるＤＶＤ店へと進む、
ホンマ……厄日や、ウチらが行こうとすると長濱さんが言う。

「ああ、あと店の前には奴らがウヨウヨいるから気を付けろよ！」

「あ、ああ！わかった！」

「……」

……泣けるで…

視点・「秋山駿」

俺達は途中長谷川と言う女に出会い、何故か不機嫌なまなちゃんと少～し一悶着あったが、まあとりあえずは依頼やら指令やらを承諾して何とかＤＶＤ店に辿り着いた。

「なんやあんまりいいひんかったなぁ」

「そうだね、でも都合がよかった」

俺達がＤＶＤ店にいると後ろから足音が聞こえる。

「っ！」

咄嗟に俺が銃を向けるとそこには長濱が立っていた。

「良い仕事するな、相棒…金貸しにしとくにゃ惜しいぜ」

「そりゃどうも……っ！」

後ろから人影が見えて俺は拳銃を構える。

「撃つなよ、こいつらは人間だ…敵じゃねえ」

「よおアンタら助かったぜ！銃が手に入りゃ怖えもん無しだ」

「ああ、ハジキの保管場所はこっちだ」

レザーを来た男はレジに近づいてボタンを押す、

「ここでバイトしてた事があってよ」

そう言いながらレジに入力し終えるとカウンターが地面に沈み壁から段差の様にせり出てきた。

「この通り、暗証番号も知ってるって訳だ」

そう言って男は得意そうな顔でいる。

「ここまで来たらもうＳＦやな……」

「まなちゃん今は突っ込みは禁止だよ……」

そう俺達が言ってると段差の台が一つ一つ裏返り、いろんな武器が出てくる。

「へえ……」

「ほわぁ……」

俺は拳銃で一番でかい銃を手に取りスライドを下げる。

ガシャンッ！

「……ゴツイねえ…」

俺はそれに夢中で色々と銃を見ていると、他の奴らも自分の銃を取って行く

「駿ちゃんそれにするん？」

「ん？まあね」

「秋山」

「ん？」

俺は長濱に呼ばれ振り向く、

「遠慮はいらねえ、アンタから好きなのえらんでくれ」

「…当たり前だろ」

そう言ってフッと笑うとしたからカチャカチャと音がする。

そして下を向こうとしたが長濱に着いてきた連中が唖然として俺の下を見ていた。

（なんだ？）

俺が首をかしげて下を見てみると……

ガチャ…チキチキ…カチャ……ジャキンッ！

「う～んサイティングも整備もちょっち不安やなぁ……」

そう言って標準装置や弾装を確認しているまなちゃん、え？なんで

ここまで詳しいの？

「ＳＷＳ２射撃銃……連射だとウチが使えへんからこれでええかな？」

そう言ってスリングを体に掛けて背中に背負うまなちゃん、

なんでだろう…全然違和感が無いや、真島さんの影響かな……？

「ゲイちゃんも、オマエハスナイパーダ！てっ言ってはったし」

ゲイちゃんって……

「なあ秋山……」

「……なんだ」

俺達が遠い目でまなちゃんを見つめていると長濱が……

「あの嬢ちゃん……ほんとになにもんなんだ？」

「……普段は…ほんとに極道達と戯れる可愛い女の子なんだけどね……」

「いや、極道と普通に話せる時点で普通じゃねえぞ？」

「ですよねー」

俺達は乾いた声で笑うしかなかった……

「この密造銃は取っといて損はせえへんな…あ、後予備の弾薬と調

整も…」

ホントに凄いよ……まなちゃん……

九話や！「ピコーン！ウチは新しい武器を手に入れた！」（後書き）

真夏「桐生…一馬…」

秋山「まなちゃん？桐生さんがどうかしたのかい？」

真夏「何でも無いんや……何でも…」

龍司「真夏……おめぇ…」

十話や！「やっと外に出れたでぇ……」（前書き）

感想まってますです。はい

真夏「……そんだけ？」

十話や！「やっと外に出れたでぇ……」

ウチらは準備を整えてＤＶＤ店から出てすっぽん通りにある出口へと向かう。
まず駿ちゃんと長濱さんが前衛をしてウチが後衛でスナイピングして援護する形や、
それのお陰か直ぐに地下から出れたで、

「地下から出たで」

「良し、直ぐにすっぽん通りに向かおう」

ウチらは迫りくるゾンビを撃って倒し、すっぽん通りの前までこれたんやけど……

「なんやこのデカルチャーは……」

「おいおい、なんだぁこいつは……」

「クソ、変なのまできやがって……！」

駿ちゃんがＤＶＤ店の武器でもう一丁見つけたマケドニアシューターで二丁撃ちで攻撃したんやけど、
全然効いてへん、

「な！効かない！？」

「どうなってんだ！？」

「効かんとなると……」

ウチはお揉むろに狙いを定め、弾丸を発射した。
そして撃ちだされた弾丸はまっすぐデカイ図体をした巨人の顔に当たり、低い呻き声と共に倒れ伏した。

「「……」」

「なんや結構簡単やな」

ウチはそれに続いて他にもいるゾンビを倒していき、やがてはすっぽん通りのゾンビは全て倒してん、

「よっしゃ、オールクリアや……ん？駿ちゃん？」

「ーーーーーーーーハッ！な、何かな？」

駿ちゃんは我に返ったようにウチの言葉に気づいて返事をする。

「もぉ～何かなやないで？駿ちゃん……ウチだけに任せんといて欲しいわ」

「ご、ごめん…」

「ホントにこいつぁ…なにもんなんだ？」

なんや長濱さんはえらく首をかしげてウチを見つめる。
ウチぃ何かしてはったか？

「と、とりあえず行こう……もう脅威は無い様だし……」

「俺にはこの嬢ちゃんが脅威に見えるぜ……」

二人はトボトボとゾンビの屍を越えてすっぽん通りの奥へと進む、
なんや?悪い事したんか!?
そうしている間にもウチらは巨大な壁に塞がれ、ガレキが誓っている前まで来た。
ウチらはとりあえず側に自衛隊の支給品らしき物を見つけて補充した。
そんとき長濱さんが手にバールを持ってしゃがみこむ、

「ここだ」

「準備が良いんだな?」

「せやなぁ」

「こんな所、さっさとおさらばしたいんでな」

長濱さんがそう言いながら蓋を開けて中に入る。
ウチらもそれに続いて入る、

「暗いわぁ……」

「大丈夫?まなちゃん」

「へ、平気や、どうって事無いで」

ウチらは下まで降りるとそこは闇の世界やった……

視点・「秋山駿」

「この先がバリケードの向こう側になっている。ここにも、連中がウジャウジャいるからな。気を抜くんじゃねぇぞ」

「はいはい。わかったよ」

「ほーい」

「それにしても暗いな……」

まあマンホールの地下なんだから当たり前か……

「心配すんな。あまり良い品では無いがコイツを使え」

長濱が渡してきたのはバリや傷、ヒビが入ったＬＥＤライトだった。

なんだか少し不安だが明りを付けて見る。

「お、結構明るくなったな」

「そやねぇ」

「今度は使うかもしれないからな。そいつはお前にやるよ……さあ、先へ進もう」

そうして俺達が進もうとすると急に後ろが明るくなった。

「な、なんだ？」

「お前も持ってたのか……」

「せや、ゲイちゃんがくれた軍用ライトや、確かＣ４テクノロジースーパーＬＥＤっていっとったなぁ…」

なんでそんな高級品持ってんの？

……まあ良いか、まなちゃんも持っているなら有効的に使わせて貰おう。

「それじゃあ行こう」

「了解や、ウチ地下のマンホールの中入るんは初めてや！」

冒険や探検も良いけど今は実戦だからね？

俺はまなちゃんにそう言って歩き出す、少し歩いて行くと暗い道にゾンビがいてまなちゃんが遠距離からの狙撃で対処したり直ぐ近くにいた奴とかは俺と長濱が担当した。

そして俺達が進んでいくと……

「……まぁた変なのがいるぞ……」

「なんやあの女の人……怯えてる？」

「どっちにしろゾンビだ。早く片付けちまおう」

そう言って長濱が銃を向ける瞬間、

「きゃあああああああああああああっ！！！！」

「！！」

「うひゃあ！？叫んだで！！」

「なんだアイツは！？」

俺達がうろたえていると何処からともなく……いや、そこらじゅうからゾンビが出てきたり這いあがったり落ちてきたりとその叫んだゾンビの近くに出てきた。

「駿ちゃん！」

「長濱！まなちゃんが遠くにいる敵を倒す！取りこぼした奴は俺達の担当だ！」

「任せろ！」

俺達は直ぐに銃を構え、まなちゃんは狙撃してゾンビを倒し俺と長濱は近づいてきた敵を倒して行く。

そして何とか倒し終え一息ついた所にまたあの女のゾンビが叫ぼう

とする。

「！、不味い！」

「駿ちゃん！これを！」

「！？、そいは！」

俺はまなちゃんが持っているスチール缶の様な物を握ってる事に気づく、それって……

「負けられへん！行くで！」

そう言ってまなちゃんは両手で持っ多数の手榴弾を思いっきりあの叫んだゾンビへと投げる。
俺は咄嗟に狙いを定め……

「そこだ！」

パアァンッ！

狭い地下内で銃声が響き、その放たれた弾丸はまなちゃんの投げた手榴弾に当たって……

ドオオオオオンッ！！！！！

「きゃあああぁ……」

女の悲鳴を上げたゾンビを吹っ飛ばされ、二度と立ち上がる事はなかった。

「ナイスや駿ちゃん」

「へっ、これぐらい朝飯前だよ」

「そうやなぁて、ウチらまだ朝ご飯食べてへん……」

まなちゃんのお腹が鳴る。まなちゃんは少し顔を赤くしてモジモジし、俺達はその腹の虫を聞いて少し笑った。そのさい笑われたまなちゃんにド突かれたが……

そんなこんなでマンホールの出口に着いて俺達はハシゴを上り上のマンホールを開けた。

秋山がマンホールを開けて外に出る。その時、通行人の人がマンホ

ールから出てくる秋山を見て不思議そうに見た後に通り過ぎる。真夏も長濱を出て来る。

「秋山」

「ん？」

「借りが出来たな」

「いいさ」

「お陰助かりました～」

「別にいいさ……それと、お前らはこれからどうするんだ？」

「医者に用がある」

「なんだと？まさかどこかやられたのか？」

「ちゃうって、駿ちゃんの秘書の子が熱出したんや」

「そう言う事」

真夏と秋山が説明すると、長濱は険しそうな顔をする。

「またあの中に入るのか？」

「付いて来てくれるのか？」

「まさか……俺は桐生一馬じゃあ無い」

「ふっ……そうだったな」

「……」

真夏はまた少し不機嫌な顔になった。二人は気づかないが、それから二人は長濱にモグリの武器屋がある事を聞いて、柄本医院に向かった。

その道を歩いていると太った男が話しかけてくる。

「や、やあ、秋山さんまなちゃん……久しぶりですね」

「おお、おおお。えっと……誰だっけ？」

「誰やったっけ？」

「か、上山ですよ。い、一年前に、会ってるです」

秋山はポンと手を叩き、思い出した様な素振りを見せる。

「あ、あー。思い出したよ、武器を改造してくれた……」

「おー見た事あるうぅ思うたら上山はんでしたわ」

「あ、そ、それ兄の方、です。お、俺は防具、担当でした」

「あ……えー、そう。ごめんごめん」

「か、堪忍や……」

とりあえず謝って気を取り直し長濱が言っていた事を聞く、

「そういえば……長濱って奴が言っていた銃を改造してくれる上山ってのはもしかしてそのお兄さんの事？」

「そ、そうです」

「そっか……なんだ、情報料支払わなくてよかったよ」

「せやなぁ」

「え？な、なんです？」

上山は秋山の言った事を疑問視した。
秋山は首を振って逸らす、

「あ、いや、こっちの話。そっかまだ改造屋やってたんだね」

「は、はい。い、いや、むしろこんな時こそお、俺達の出番です」

上山は何かを知っているらしい事を言う。

「……フッ。もうこの町に起きてる事分かってるようだね」

「え、ええ、まあ、ば、化物が出てま、町は無秩序になってるくらいは…な、なので、武器の改良はお、俺たちにお任せ下さい！い、今はトラックで、仕事してるです。こ、こ、こんな状況なので移動出来た方が、べ、便利」

「こりゃ……凄いね。ハハ」

「ホンマやなぁ……」

「あ、案内します。あ、兄もそこにいるんで」

そう言って秋山と真夏は上山に付いて行き、さっきの通りまで戻る。

「こ、ここです。ど、どうぞ」

そう言って後ろのトラックのドアを開けて中に入る三人、するとそこには……

「いっぱい銃が並んどるで……」

「へぇ、結構な設備だね……戦争でもするのかい？」

「お、俺は戦争に見たいなもんになると思ってます。あ、秋山さんなら、薄々分かってる、はず」

「……」

「……」

真夏は顔を伏せるその顔には少し悲しさが満ちていた。

「い、今は、このトラックも、お、大袈裟に見える、と思うけど、きっと役に立つ、です……あ、秋山さんは、む、昔からの幼馴染。う、ウチが色々お手伝いを、しますよ」

「……手伝い？」

「は、はい。今まで通り、ぶ、武器のチェーニングや装備品の販売、させてもらいます。そ、それだけじゃ無く、買い取りもさせてもらいます。い、いらなくなった物、何でも買い取りますよ」

「質屋見たいなもんかい？それは、便利だな」

「まんまガンショップやな」

「え、ええ。質屋じゃ買い取らない様な物でも改造に使えそうであればうう、ウチが、高額で引き取りますよ」

「ほんなら質屋で売った方がええのと、こっちで売った方がいいもんがあるっちゅう事か？」

「そ、そうですね。そ、そんな感じです」

「なるほどねぇ……」

秋山がフムフムとしていると服の裾を引っ張られる。

「ん？なんだいまなちゃん」

「駿ちゃんそろそろクスリ……」

「……あ！そうだった！」

秋山は今思い出し、慌てて外に出る。

「もう……ホントにしっかりしてや」

そう言って真夏は上山に別れを告げてトラックを出ようすると……

「ま、まなちゃん」

「ん？なんや」

「む、昔の約束、お、覚えてる？」

「約束ぅ？」

真夏は首を捻って思いだそうとする。だが中々出てこない。

「ふ、服の約束だよ。お、俺が用意した服を着てって約束」

「……おお！そないな約束した覚えがあったなぁ！」

「そ、それで、い、いいかな？」

「うん、ええよ～良い洋服を着れるんなら何でも着るでぇ♪」

「わ、わかったよ、そ、それじゃあ今の問題が終わったら何時でもき、来てね」

「分かったで～」

そう言ってトラックから出る真夏は秋山を追い、柄本医院へと向かう。

「……け、計画通り」

上山は厳重に箱詰めされた段ボールの蓋を開けて中身を見る。

「ら、ラブシャインなまなちゃんまであ、後少しだ……」

少し気持ちの悪い笑みを浮かべる上山、真夏自身に手を出さない自制心だけは褒めるべきか？

真夏が外に出てくるとそこには……

「なんやまた長谷川さんかいな……」

「なんだその言い草は……まあいい付いて来い」

「ほーい」

そう言って真夏は連れていかれ、長谷川から「神室の盾」と呼ばれる自警ボランティアをしている赤石と言う男を紹介され、隔離エリアの入り口、「フリー・ルート」の情報を秋山に教える様言われる。真夏は二つ返事で了承し、秋山の元へと向かう、だが……

「へ？」

「ダカラモウその人はクスリ持ッテイッチャッタヨ？」

「ええーとつまり……」

「ソレト伝言ネ」

「伝言？」

「ウン、…「外で待ってなさい。もしくは家に帰る様に」ッテ…マナチャン？」

「……ゃん」

「ン？」

「駿……ちゃんの」

「？？」

「駿ちゃんのアホーーーーーーーーー！！！！」

真夏は秋山に置いてかれた。それに腹を立てて叫ぶ真夏だった。
そして怒りながら外に出て怒った様な歩き方で徒歩を進める。

「まったく駿ちゃんも白状や…ウチを置いて行くなんて……！」

とにかく秋山に置いてかれた事を怒っている真夏はどうしようか悩む、

「どないしょう…ウチだけ行っても少し危ないやし……」

ホンマどないしようかなぁと思っていると……

「まなチャン！」

「ふえ？」

前から迷彩柄のズボンをはいた外国人が現れる。

「ゲイちゃん？どうしてこないな所に？」

「まなチャンが戦ッテイルと聞イテキタンダ。秋山さんモサッキマデ訓練ヲサセテタカラナ」

「駿ちゃんも！？」

「ソウダ、ダカラお前モ鍛エテヤル。付イテ来イ！」

「サーイエッサーや！」

そう言って真夏は元軍人ことゲイリー・バスターズに本格的な指導を施された。

どこまでかけ離れた幼稚園児…いや、もうすぐ小学生だから、どこまで行く気なんだこの小学生は……

「モット大キイ声を出セ！」

「サーイエッサー！！」

「良シ！行クゾ！」

そうして真夏はワンマンアーミー真夏へと成った……

オマケ・「その頃一夏は……」

「ここだ、私が通っている道場は」

「……神社？」

それもあると言って歩き始める千冬に一夏は追う、そして神社の横にある家のドアを叩く、

「織斑千冬です。弟を連れて来ました」

その声に応える様に中から声が聞こえてドアが開く、

「よく来たな千冬君」

「はい、それで弟の件なんですが……」

「構わないぞ門下生が増えるのは良い事だからな」

「助かります」

一夏は訳が分からず首をかしげるとそこにその男性の奥から一夏と同い年くらいの女の子が立っていた。
その女の子は一夏を見た後にプイッと顔を逸らして廊下の奥へと消えた。

『?、誰だろうあのポニーテールの女の子は……』

「ーーーーーー?、どうした一夏」

「えっと……さっきの女の子は……」

「ん?ああ、娘の事か」

「娘?」

「そうだ。君はここの門下生になるから後で自己紹介をして貰おう」

「え、えっと?門下生?」

「聞いていなかったのか?」

「はい、付いて来いと言われただけですので……」

「ふむ、まあいい」

え?いいの?と言う一夏の言葉はスルーされてとりあえず家にお邪魔し、道場の方へと向かう一夏であった。この出会いがきっかけで

あのツンデレ幼馴染が生まれたとさ……、

『千冬姉ちゃん、一言くらい言って欲しかったよ…』

そう思う一夏につゆ知らず、千冬は一夏を連れて男の後に付いて行き道場へ向かうのであった。

一夏はまだ、真夏が神室町で戦っている事をしらない……

十話や！「やっと外に出れたでぇ……」（後書き）

真夏「駿ちゃんのアホー！ウチを置いて行くなんて！ゾンビに噛まれてゾンビになってまえ！」

秋山「ちょ！？それ洒落にならない！」

束「束さんより箒ちゃんが出るなんて……」

箒「普通では？」

作者「少し早く出し過ぎたかな？」

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」（前書き）

真夏「なんでこないに遅かったんや？」
作者「新潟で用事がありまして……」
真夏「そうなんかぁ…結構高速道路込んでたやろ？」
作者「……吐いた」
真夏「……ご愁傷様や」

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」

秋山に置いてかれ、怒っていた真夏は今ゲイリーズ・ブートキャンプの訓練を終えて外に出てワークス上山にいた。

「ふう…やっと終わったで、ゲイちゃんホンマに激しすぎや…ウチの体が壊れてまう所やった…」

「は、はは激しく……こ、ここ壊れる……」

上山は息を荒くして真夏の声を聞いていた。真夏は少し心配そうに見る。

「秋山はんどうしたんや？なんや息が荒いで？」

「な、なななな何でも、な、なないよ」

「そか、ならええんやど……」

「そ，そそっそれより、ここ、これからどうするの？」

「う～ん…どうないしよう…」

真夏は置いてかれてしまった為、どうするべきか迷っていた。

「訓練もしたし武器は……」

真夏は自分が持ってきたライフルと拳銃を見る。

「ライフルは整備不良で、拳銃は密造やから心配やなぁ……」

う～んと唸なって考える真夏に上山は……

「ん、なら今こ、ここにある武器をも、もも持っていいよ？」

「え？ホンマに？」

「う、うん、これなんてど、どどう？」

上山は真夏の前に大きな物を差し出す、

「なんなんやこれ？でっかいコンセント？」

「ち、違うよ、こ、ここれはお、俺が開発した電気ショックガンだよ」

「電気？」

「そ、そう…名付けて、「ラブシャイン・スパーク」！！」

ドドーンッと効果音の様な物が聞こえた様な気がした真夏と自分で作った自身作を真夏に見せる上山、

「ラ、ラブシャインスパークぅ？」

「そ、そう文字通り、でで、電気ショックで相手をた、た倒す武器だよ」

上山は真夏に説明をする。

「こ、これは強力な電撃で攻撃する、ぶぶ、武器で。スタンガンと違って、ち、小さな電極を、とと飛ばして離れた相手にもで、でで電流を流す事が出来るんだ。でで電流は強力で、ぞ、ゾンビを感電死させる事も可能だよ」

「えっらく恐ろしい武器やな…これ」

真夏は上山にラブシャ…長いのでスパークショットを受け取り、構える。

「大きさはライフルとおんなじで、重さはライフルよりも軽めってとこかいな……」

真夏はとりあえずスパークショットを機動させて充電させる。ウィーンと音がした後、緑のランプが点灯している。

「じ、充電は、ももう完了してるから、い、何時でも撃てるよ」

「さよか」

そう言って真夏は電源を切り、肩に乗っける。

「あ、そや後ブローニングとかあったら貰えへん?」

「う、うん、はははいこれ」

「サンキューや」

真夏は上山からブローニング・ハイパワーを貰って腰に刺し、準備

は万端だ。

「お世話になったで、上山はん」

「う、ううん、お、俺にはこれくらいしか出来ないから、きき気を付けてね？」

「うん、ほな行ってくるで～」

そう言って真夏はスパークショット、「ラブシャイン・スパーク！！」を肩に掛けてトラックから出た。

視点・「郷田真夏」

ウチは上山はんからラブシャ、長いからスパークを貰ってトラックから出る。

「さて、駿ちゃん床に行かなぁ」

まったく、うら若き乙女を置いていくなんてどういう神経しとんねん、駿ちゃんは！

「ウチかて戦えるんや、駿ちゃんも見たはずやのに……ん？」

突然ウチの携帯が鳴っていて、ウチはそれに出る。

「もこもこもっこり～？皆のアイドル真夏やで？」

（切るぞ……）

「堪忍や～」

ウチの携帯に掛けて来たんわタッちゃんやった。

「どしたんや？タッちゃん、なんかあったんか？」

（ああ、実は……）

ウチはタッちゃんの要件を聞いた。

タッちゃんが言うには今隔離エリアの中にいて身動きの取れない後輩と沙紀ちゃんがおるんや、

そんでタッちゃんが一人じゃ無理そうやから誰かに助けて貰おう思うたんやって、

（じゃねえ沙紀が俺一人じゃ無理だと言って電話させたんだ）

「そやねータッちゃんなら一人でやろう思うてしまうもんなー」

（俺一人でどうにか出来る）

「そやけど一人より二人の方が何かと良いで？」

（ガキのお前に頼む時点で大人としてどうかと思うんだがな……）

まあガキっちゅうのは認めはるけど……

「安心しぃ…パワーアップしたウチの力見したる。んで何処にいるんや？」

（あ、ああ…俺が欠員で働いていたコンビニだ）

「コンビニ？さっきそこから逃げはったんやないの？」

（逃げた所も危なくなってきたからな…それでコンビニまで戻ったんだ）

「なるほどなぁ……」

ウチはとにかくタっちゃん達を助ける為に今一度あの地獄へ戻る事にした。

「よっしゃ！ウチが迎えにいくさかい、さっちゃん達は無事なんか？」

（ああ今となりにいる）

「さよか、とりあえず行くからまっててな～」

そう言って電話を切る、さてと……

カチ、キュイーン……

スイッチを入れてスパークショットの電源を入れる。
どんどん充電され、電気が溜まって行く、

「さて…ダチを助けに行きましょか」

そう言ってウチは肩にスパークショットを担いでマンホールの所まで歩く、
その足取りは力強かった。

ここは龍也達が逃げていた場所だった所……

「おらぁ！」

バキッ！

「あ”…」

龍也が鉄パイプでゾンビを殴って倒す、
沙紀達は襲ってくるゾンビ達から逃がす為に先に逃がしていてここにはいない。

「邪魔じゃボケェ！！」

龍也は殴っては蹴って倒して行くが切りが無い。
そうこうしている内に龍也の持っていた鉄パイプが……

ポキッ！

「はあぁ！？」

龍也は折れた鉄パイプを見つめて叫ぶ、
ゾンビ達がどんどん群がり、どんどん迫ってくる。

「畜生！ここまでか……！」

龍也が真夏が来る事を聞いてはいるがこの数に勝てるかどうかと言

えば……無理だ。

「噛まれてでもこいつらを減らさねえと……！」

龍也は覚悟を決めて突っ込もうとしたその時！

「伏せるんや！！」

「！！」

龍也はその声を聞いて伏せる。その時、龍也の頭上にレールガンの様な閃光が走り、周りのゾンビは電撃にやられ燃えた後に黒こげになって倒れた。

「なんじゃこりゃ……」

「危なかったなぁ、タッちゃん」

「あぁ？」

ゾンビの屍なんのその、それを跨いで龍也の側に近付く影、

「……真夏か」

「お呼ばれに従い参上、てな♪」

ハアァ…と地面に顔を伏せる龍也、それを見てケラケラ笑う真夏、とりあえず龍也は真夏に礼を言った。

「とりあえず助かった、ありがとな」

「気にせんでええで？ウチらの仲やん！」

「どういう仲かは気になるがな……」

フッと笑い、胡坐をかく龍也に真夏が近寄って顔を支える。

「ホントに大事無いん？怪我や噛まれたりしてへん？」

とたんに心配そうに顔を覗きこむ真夏、その顔と顔の近さにテンぱる龍也、

「だ、大丈夫だ！心配ねぇ！」

「さ、さよか？それならええんやけど……」

そう言って少し離れる真夏、そして二人が落ち着き真夏は状況を聞く、

「そんで…なんでタッちゃんだけなんや？サッちゃんや定員さんは？」

「先に逃がした、無事だといいんだが……」

「そやな、とりあえずタッちゃんは一旦戻らんと一一一一一一」

そう言おうとした時、

「ソノ話俺ニ任セロ！」

突然声がして二人は周りをキョロキョロしていると、

「此処ダ！」

その声を聞いて二人は上を見ると……

「なんだアレ？」

「エアボーンとは……ヤルやないかゲイちゃん」

ゲイちゃんことゲイリーがヘリからのエアボーンをしてこちらに下りてくる。

「フンッ！」

ゲイリーは着地の瞬間にパラシュートを切り離してゴロゴロ転がって目の前に止まる。

「コレヨリ…バーチャスミッションヲ…」

「もうええって」

ゴスッ！

真夏は何処からともなく取りだしたトンカチでゲイリーの頭を叩いた。

叩かれた場所からは血がドボドボと出ていたが龍也は黙っている事にした。

「マナチャン、行キ成リノ突ッ込ミハ酷イデス」

「今は緊急時や、ふざけるとる場合やないで？」

「ソウデスネ、トリアエズ……オイ、ソコノウ〇コ垂レ」

「ああぁ！？行き成り人をクソ呼ばわりたぁどういう了見だ！？」

龍也は行き成りそう呼ばれた事に腹を立てた。
その権幕を無視して話す、

「お、落ち着いてタッちゃん、この人の話し方はこれが普通なんや！」

「だからって許せるか！」

「ヒッ……」

「あ、いや、すまん…」

「マッタク、女ノ子を怯エサセルナンテ最低デスネ」

「うがー！コイツ殺す！」

殴りかかろうとする龍也を止めようとする真夏とそれ見て呆れるゲイリー、
とりあえずは収まり、ゲイリーは龍也をゲイリーズ・ブートキャンプへ袋詰めで運び、
それを苦笑いしながら一緒に行く真夏がいたとさ、

「フガフガー！（離しやがれー！）」

「暴レルナ、コノクソッタレ」

「あはははは…」

ある意味人さらいである……

十一話や！「新しい武器ってなんか興奮せえへんか？」（後書き）

龍也「あの野郎！人をさらいやがって！」
真夏「まあまあタッちゃん抑えて」
ゲイリー「怒リッポイ人ダナ」
龍也「テメェのせいだろがーーーーーー！」
真夏「ホンマの気にしたら負けやで？タッちゃん……」

十二話や！「タッちゃんはビックマグナム！」（前書き）

でけた…感想お願いします。

十二話や！「タッちゃんはビックマグナム！」

ここはゲイリーズ・ブートキャンプの射撃場……
そこでは龍也が真夏とゲイリーの猛特訓を受けていた。

「タッちゃんちゃうって！それじゃあ弾丸が下に行ってまう！」

「お、おう！」

「ナンダソノへっぴり腰ハ！モット肩ヲ上ゲロ！」

「テメーは黙ってろ！俺は真夏にやってもらってんだよ！」

と口うるさくも訓練に励む龍也は良い人である。
そして真夏とゲイリーの特訓が終刊に差し掛かった時、龍也の携帯が鳴る。

「あん？……！、沙紀からだ！」

「なんやと？」

龍也は急いで電話に出て話す、

「沙紀か！何処にいる！？無事か！？」

「ちょ、タッちゃん落ち着いて」

「戦場デ冷静サヲ失ッタラ死ヌゾ？」

「頼むから黙ってろ！」

そうして龍也は電話に集中する。

『龍也君……』

「沙紀！無事なのか！？」

『うん、平気…後輩君も無事よ…でも……』

「でも…なんだ？」

『そ、それが「ガシャンッ！」キャアァッ！？』

「！？、沙紀！」

『！、ーーーーいやあああぁ！！ーーーーー』

「沙紀！おい！……クソ！切れやがった！！」

達也は切れた電話を握りしめ放り投げかけたが、真夏がそっと龍也の手を両手で握って制した。

「タッちゃん落ち着いて…」

「……」

龍也が携帯を放り投げかけた腕をピタリと止め、下ろす、

それを見て真夏は安心してゲイリーに言う。

「そろそろ潮時やな……」

「ソウダナ……新兵」

「……俺の事か？」

「ソウニ決マッテル、コイツヲヤル」

ゲイリーは腰からバカでかいリボルバーを龍也に渡す、

「これは……」

「我ガ祖国アメリカガ誇ルマグナムリボルバー、トーラス・レイジングブルダ」

「ホンマか！？初めて見たわ…しかもそのタイプって…」

「５００S&Wマグナム……現時点デ最強ノマグナム弾ヲ撃チ出シ、防弾スラ貫通スルマグナムダ」

「これが……」

龍也はゲイリーから渡されてそれを掴む、

ズッシリくる重量感、シルバーに輝くガンダニウム…じゃなくてチタニウム合金の輝きが龍也の男心を擽る。龍也はそのグリップを握り感想を吐く、

「お、おめぇ……」

「そらそうや、重いに決まっとるわ……タッちゃん」

「なんだ？」

「それは人を撃つ銃やない」

「は？」

「”奴らを倒す銃や、そして……元は神室町の住人やった人達を撃つ銃や…」

「！！」

龍也はハッと思いだした、自分が沙紀達を守る為殴ったり蹴ったりした人達は元は何の罪の無い人だからだ。

「……」

「せやからタッちゃんにはその認識をちゃんと――――――」

「おい……」

真夏が喋ろうとした矢先、顔を伏せていた龍也がお揉むろ顔を上げて真夏を見る。
その顔は何処にも暗い感情がなかった。

「タッちゃん？」

「沙紀の為だ……覚悟は出来てる」

「タッちゃん……」

龍也は苦しそうでも真夏に見せる顔は苦笑いに似ていたが笑っていた。

「……ハハ…やっぱタッちゃんは強いんやなぁ…ウチなんて泣いてはったのに」

「バーカ、オメーはまだガキだろうが」

「そやったわ」

二人は何時も通りの調子を取り戻し、ゲイリーに向き直る。

「そろそろ行く、世話になった」

「ソウカ…気ヲ付ケロヨ？」

「ウチがおるから平気やで？」

「ソウダナ、新兵ノ子守…頼ンダゾマナチャン」

子守られるつもりはねえー！と叫んだ龍也、それを見て笑うゲイリーと真夏、

龍也はゲイリーから貰った腰に着ける皮のホルスターを貰い、トーラスを収め。真夏もブローニング・ハイパワーの皮のショルダーホルスターを貰い銃をセットして肩にスパークショットを肩に担ぐ、

「ほなーーーー」

「ああーーーーー」

「行ってくる！」
「行ってくるで！」

「オウ、死ヌナヨ二人トモ」

そう言ってゲイリーは二人を見送り、真夏達は地獄へと下った。

「……サテ、ソロソロ秋山サンモ相棒ヲ見ツケテイル頃ダナ」

そう言ってゲイリーは別の扉から出て自らも地獄へと下った……

ここは神社？道場？である篠ノ之家と言う家がある所、
そこに織斑姉弟がいた。千冬は篠ノ之家当主柳韻と話をしており一夏はその娘の箒と道場にいた。

「……」

「……あの」

「……なんだ？」

「あ…えっと…お、織斑一夏です」

「……しってる」

「そ、そうか……」

「……」

「……（か、会話が続かない！）」

一夏は極道少女真夏？との関係で普通？の女の子である箒とどう話せばいいか分からずにいた、
普通の男の子より大人の世界や事情を知って感覚がおかしくなったのがいけなかったらしい。

「え、えっと…剣道をやってるのか？」

「……見ればわかるだろ」

「そ、そうだな……」

「……」

「……（駄目だ…全然会話が続かない！どうすれば！？）」

「おい」

「な、なんだ？」

「お前も剣道をしに来たのだろう？」

「あ、ああ……」

「ならば竹刀を持って素振りでもしたらどうだ？父さんからお前に剣道のやり方を教えてやれと言われたからな」

「そ、そうかわかった、よろしく頼む」

「……行くぞ…」

「へ？」

一夏はポンっと投げ渡された竹刀を受け取った瞬間、箒が打ってきた。

「ちょ！まっ――――――！？」

パシィンッと打ってきた箒の一撃を何とか受け止めて後ろに跳び引く、

「やるではないか」

「行き成りなにすんだよ！？」

「教えるのは面相だ、体で覚えさせる！」

そう言ってまた打ってくる箒に何とか避けては受け流しながら耐える一夏、
それを何とか止めようとする一夏は箒に打たれながらも話かける。

「ちょ、ちょっと待て！ホント待て！行き成りは不味い！」

「ええい！ちょこまかと逃げるな！」

「無茶言うな！」

そうして一夏の初の剣道は過激な物になった。
一夏は剣道がこんな怖い物だと知って恐怖した。

「助けてくれまなちゃーん！」

「男が助けを請うな！」

「理不尽だ！」

一夏が真夏の戦いを知るのはあともう少しである……

オマケ・「真夏、ホストクラブに行く」

「さてと…たこ焼き屋のお仕事も終わった事やし、かず君とユウちゃんの店にでもいこか」

神室町にあるホストクラブ、スターダストに少女真夏がいた。
そして真夏は店前にいる客寄せにヒラヒラと手を振り、その客寄せは手慣れた手つきでお辞儀をして店の中へと入れた。

「ご指名は？」

「何時もの人でお願いしますわ」

「畏まりました」

そう言って客寄せの定員は奥の部屋へと入り、真夏は通らせた席へと座る。
少し立ってから白のスーツと紫の服を着た男二人が来る、

「まなちゃんまた来てくれたんですね」

「というか普通にいいのか？これ……」

「ええやんホストは客はえらばへんもんやんか」

「だからって五歳児がここに一一一一一」

「ユウヤ、お客様の前です」

「あ、す、すいません」

「ええって、ほな楽しみましょか！」

「はい、それでは注文は何時ものオレンジジュースとポッキーで？」

「おｋや」

そう言ってスターダストの店長一樹が定員を呼び、注文をする。

「頼んだよ」

「分かりました」

そう言って奥に消えてった定員を見送り、ユウヤと一樹は席に座る。

「今日も疲れたでぇ…店にくるお客さんが何時もぎょうさんなんや、なんでやろ？」

「それはまなちゃん目当てでくるからじゃないかな？」

「そうなん？」

「それはそうだろ、看板娘がいた方が売れ行きは良いに決まってるし」

「ふ～ん、ウチがねえ…」

「まなちゃんもたこ焼きを作ったりしてるんだよね?どお?調子は」

「まだまだやな…ひっくり返すタイミングがまだ甘いっておとんが言うとるし」

「そうかな?前にまなちゃんが持ってきてくれたたこ焼きは美味しかったけど?」

「それでもまだまだや、もっと腕上げてかず君やユウちゃんにむっちゃ美味しいたこ焼き食べさせて上げるわ」

「うん、楽しみにしてるよ」

「今度はチーズ入りがいいな…」

「わかったで、楽しみにしとってや!」

真夏はホステスクラブで一樹とユウヤと一緒に話したりポッキーゲームしたりと夜更かしをした。

その事で父、龍司や東城会の面々は怒るのを通り過ぎて呆れていたと言う。

まあ、あまり行かない様にと注意されるだけで終わった。階段だが真夏がホストクラブに入っているのを警察に目撃されてはいるがその度に谷村や伊達が関わっているとかいないとか……真夏の夜は続く…

「「「カンパ〜イ!」」」

十二話や！「タッちゃんはビックマグナム！」（後書き）

真夏「はぁ～楽しかったわ、またいこうかなぁ」
一夏「ホスト…か、俺も……」
千冬「頼むからお前が行くなよ？争奪戦になる」
一夏「え？なんで？」
千冬「なんでもだ」
龍司「親として怒るべきか…大人に成ったとして褒めるべきか…」

作者「いや、普通は怒らなきゃ……」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（前書き）

真夏「長らくお待たせしましたー！見たってや♪」

一夏「やと出番が来たよ……」

真島「わしの時代が来たでー！！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」

ゲイちゃんと別れ、ウチらは今神室町地獄の一丁目へと足を踏み入れていた……
まあホントは劇場前通りなんやけどな。

「吹き飛べやー！」

キュイィーンとスパークショットから機械音が鳴り響き、その瞬間
バチィッ！と音がした後、
ウチらの前にいたゾンビはカリカリ君へと変貌した。

「死ねやボケぇ！」

ズガァァンッ！

タッちゃんがそう言って両手で持ったマグナムをぶっ放し、近くにいた敵の頭を数体吹き飛ばした。
その際、タッちゃんは後ろにすっ転ぶ、

「うお！？」

「タッちゃん今つこうとるんわマグナム弾や、普通のパラベラムや無いんやから反動考えなぁ」

「わ、分かってる！だがこいつは強力過ぎだぞ！？」

そらそうや、近距離ならアンチマテリアル並みなんやから、戦車やて紙装甲やで？

タッちゃんは立ちあがっては反動で倒れ、その都度腰を痛めると言うなんともお間抜けな事になってたんや、コントやな……まあウチは倒れたタッちゃんに近付いてくるゾンビを倒して何度も難を逃れてんやけどなホンマ世話焼けるで……

「サッちゃんが逃げはった方向は分かるん？」

「いててて…ああ多分あのコンビニのはずだ」

ふむ……となるとすっぽん通りの横にあったあのポッポ店やな、ウチは変えのバッテリーを確認してラブスパ（注：ラブシャインスパークです）を再充電して歩く、

「タッちゃん行くでぇはよサッちゃん達を助けな！」

「お、おう！」

そうしてウチらは劇場前を走る、待っててや…サッちゃん！

一方一夏は篠ノ之箒による修練?を終えて帰宅しようとしていた。

「あ、そうだ…まなちゃんにも紹介しないと」

そう言って一夏は姉の千冬に真夏に箒を紹介したいと言って別れ、神室町に向かう。

「篠ノ之とまなちゃんを合わせて大丈夫かな?まったく正反対…いや案外似てる?」

箒と真夏はスジを通すと言う分野では一致している部分があり、仁義もある。
割と息が合いそうだと一夏は考える。

「早くまなちゃんに言ってあげよう!」

一夏は早足で神室町に向かう、そこが今ラクーンシティになっている事を知らず……
そして一夏は電車に乗り、少しあるいて神室町に到着したが……

「なんだあれ?警察に自衛隊…あ、消防隊員までいる。いったい何が起きたんだ?」

一夏は神室町が慌ただしくなっている事に気づき、警察の一人に聞いて見た。

「すいません」

「ん？何だい？僕」

「何かあったんですか？」

「ああ、それが……」

言いかけた警官が口をつぐみ苦虫を噛みしめた様な顔になった、
一夏はそれを不思議そうに見ていると警官が喋りだす、

「ゴメン、俺でも分からないんだ。それと今神室町は慌ただしくなっているから早く帰るんだ。いいね？」

「え？あ、はい……」

「良い子だ」

そう言って一夏の頭を撫でてもう一人の警共にその場を後にする、
一夏はこれは何かあると思い急いで公衆電話へと向かい、真夏に電話する。

「……早く出てくれ……」

少し焦らしながら待っていると真夏と繋がり一夏は話し出す、

「真夏か？平気か？」

『いっちゃんか？悪いんやけど今とりこみ中で一一一一あー！もう邪魔せんといて！』

「ま、まなちゃ「ドゴォンッ！」な、なんだぁ！？」

電話越しから爆音が響き、一夏は驚く、
真夏は焦る様に一夏に話しかける。

『いっちゃん！いいか！？神室町から離れるんや！ほとぼりが冷めるまでぜったいやで！』

「まなちゃん！？」

『今ーーー…神室町は－－－－危険－－……せやから！』

「ま、まなちゃんどうするんだよ！？」

『ウチらはサッちゃんをーーーー助けんと！』

電波が悪いのか、電話はじょじょに繋がりにくくて成って行き……

「まなちゃん！！」

『！－－－『真夏！早ーーーーくしーーーと！』！？……！－－－－！！』

「まなちゃん！！まなちゃん！！！」

一夏は必至に呼ぶが雑音だけしか聞こえずにいたその時、出た言葉で電話が切れた。

『まったく戦場は地獄やで！フハハハハハハ！！』

ブツッ…ツーツー……

「は？」

一夏は呆気に取られその場に固まる、数秒後再起動してどうするか考える。

『ま、まなちゃんは今危険な事に巻き込まれてる！？』

真が自分から危険に飛び込んだともしらず心配する一夏はある意味、いや普通の子より良い子である。

『俺一人じゃどうしようも……そうだ！真島さんなら！』

一夏は急いで真島の事務所がある神室町ヒルズへと急ぐ、今真島なら暇だと言ってそこでくつろいでいるはずだと、

「待ってろまなちゃん！直ぐに行くからな！」

一夏はひた走る。大事ないとこを守る為に……

またまたその頃、真夏の父親こと郷田龍司は家で寝そべりながら元弟分から渡されたメモを見ていた。

「何しようとしてるんや……テツ……」

ポツリとそう吐いて龍司は寝返り打ち、真夏の帰りを待っていた。
龍司はどこか寂しそうにして部屋を見渡す、

「……ハッ、ワシは何時から真夏依存症になったやんやたくっ……」

そう言って持っていたメモを胸ポケットに入れて胡坐をかく、
龍司は部屋に干された洗濯、綺麗に片付けられた部屋、
そして龍司と真夏が写っている写真と元はお皿の上にラッピングされていたおにぎりの皿を見る。

（今日は早く神室町へ行ってきます、せやからご飯はおにぎりや！堪忍な～）

「朝食作ってくれはるだけで感謝してるわい、バカたれ…」

そう言って龍司は起き上がりおにぎりが乗っていたお皿を流しへ持って行き洗う、
その後に洗濯物をカゴに入れた後に畳み、真夏と龍司のタンスに分けていれる。
そして部屋に掃除機をかけてホコリを吸い込んだ後、片付けをして

座った。

「……これを真夏が全部やっとったんやな…」

龍司は食事管理や部屋の整理とかの家の仕事をちゃんとこなす真夏に色々と感謝していた。
そして何よりも龍司が感謝しているのは何時も笑って家の出迎えをしてくれる事だった。

「……なんや…わしって駄目亭主やな…」

その事に気づいてガックリと肩を落とす龍司、今度の誕生日にはどこか連れて言ってやろうと誓う龍司だった。そしてふと気付く事があった。

「……真夏の奴が遅いなぁ…」

今真夏がある意味激戦区になっている事もつゆ知らず、
龍司は秋山の所に行くと聞いていたので安心はしていたのだが……

「もしや真夏によからぬ事を……」

親バカを炸裂させた龍司は、首を振りそんな事は無いだろうと考え寝転がる。
一息ついた所で目を瞑り真夏が帰ってくるのを待つ事にした。

「誕生日には何処連れて行こう…そや…真夏はキャンプに行きたい言うとったな…今度キャンプセット勝手こなぁ……」

そう言って龍司は眠り付く……龍司の戦いは、近い！

場所は戻り此処、ミレニアムタワーにたどり着いた一夏は中に入る。
そこでは受付の極道がいた。

「ーーーーお？織斑のぼっちゃんじゃねえか！どうした？」

「あ、あの！真島さんはいますか！？」

「ん？親父なら事務所にいるぞ？」

「ありがとうございます！」

「あ！おい！タワーの中では走るなよ！」

分かりましたー！と言って早歩きになる一夏、
その姿はどこか酷く焦っている様でその極道を不安にさせる。

「ぼっちゃん…なんか焦ってたな…大丈夫か？」

そう言ってるとその極道の前に帽子を被り、ところどころ穴や血が付いて不気味だった。

「は？だ…誰だテメェ！」

そう言って近づいて行くと野球帽の男は顔を上げる。その瞬間！

「な！？ぎゃあああああああっ！！！」

行き成り噛みつかれ悲鳴を上げる極道の男、男は倒れ伏し、野球帽の男はコホォ…と声を出してあたりを見回す、

「……甘美な…死を…」

そう言って野球帽の男は歩きだした。一夏は直ぐにエレベーターに乗っていてこの惨状は聞こえていなかった。そして噛まれた極道の男はビクッとした後、静かに起き上がりノロノロと歩きだす、

「あ”…あ”ー……」

ゾンビになってしまった元極道は他に噛まれた極道達を引き連れ階段へと向かい、あるきだしていった……そして一夏は真島の事務所に着いた。

「真島さん！」

「んおっ！？な、なんや一坊やないか…どしたんや？ワシは今ゾンビ映画見取ったんやけど……」

「す、すいません…じ、実は……」

一夏は真夏との電話の会話を話を言った。
そしてそれを聞いた真島は少し目を細めた後にニヤァと笑う。

「なんやぁ…真夏ちゃんおもろい事してはるなぁ…わしも混ぜて欲しいわぁ……」

「ま、真島さん……」

一夏は真島がそう言う性格を理解してはいるがやはりどこか不謹慎だと少し思ってしまう。

「キッヒヒヒッまあ一坊にはまだ早い感情や、もっとおもろい事を経験したら理解出来るって」

「そう言うもんなんでしょうか……」

「そう言うもんや」

真島はケラケラと笑う、一夏はとりあえずどうすべき聞く、

「真島さん……俺はどうすれば？」

「そやなぁ……」

真島はテレビに映ったゾンビ映画を見て笑う、

「キッヒヒヒ…やっぱたまらんなぁ」

「……はあ……」

一夏は肩を落とすすると一夏はテーブルにあった写真を見つける。

「……あれ？龍司さん？」

ここはある大部屋……そこに東城会の幹部がいた…

「一昨日、都内で撮られた物です」

「それが？」

「こっちのスーツの男ーーーーー」

「関西近江連合直参、二階堂哲雄」

それ聞く１０人の東城会幹部がソファーに座り、聞いていた。

「近江か…確かに気になるが、緊急で召集をかけるほどか？」

「ですが、こっちのハチマキの男は皆さんもよくご存知のはず……」

「……なんだまなちゃんの親父さんじゃねえか」

「元極道だって聞いたが有名な奴なのか？」

「この頃食ってねえなぁ…まなちゃんのたこ焼き……」

「あーそう言えばそうだな、今度食いに行くか」

「ついでに酒でも持って行こう、まなちゃんには世話になってるしな」

「……話を戻します…六代目、いかがで？」

話を振られ、問いを待つ、その問いかけられた人物は……

東城会六代目会長…「堂島大吾」ドドーンッ……

「近江連合、郷龍会会長ーーーーーーー」

「郷田龍司……」

大部屋にいる幹部達が大きくどよめく、

「な、なんだと？まなちゃんの親父さんって……」

「で、でもその男は死んだはずじゃ？」

「おい、安住、どないなっとんのや」

幹部達は安住どういう事か聞く、説明をしている安住は話を続ける。

「……五年前のウチと関西の抗争…ご存知の様にアレの糸を引いていたのがまなちゃんの父親の郷田です。その後、姿を消していたんですが……」

「キヒヒヒ…たこ焼き屋のおっちゃんになってたんやなぁ…気づかんかったわぁ」

いや気づけよ…と幹部の心がシンクロした。

「……何にしてもタイミングが良すぎる、二日後には神室町ヒルズの振興セレモニーです」

「東城会の幹部もまなちゃんはもちろんの事、全員が顔を揃えます」

「冴島は中国で商談中だろ？」

「そしたら…全員とちゃうなぁ」

「……ほぼ全員です」

「思い出したわ、その二階堂一一一一、今はイケイケやけど元はまなちゃんの父親の弟分やった男です。まなちゃんの父親が消えた途端、関西で頭角を現しおった男ですわ」

「問題は…何故今この二階堂が東京にいるのか……何か、臭いませんか？」

安住はそう言い幹部を見渡すが……

「いや、普通に元兄貴分に合いに来ただけじゃ？」

「いや、まなちゃん目当てかもしれないぞ？」

「待て待て、たこ焼き目当てかもしれへんぞ？あそこのたこ焼きはテレビでも出とったし」

幹部の全員が思う事を言って場はその話で盛り上がる。

安住は頭を抱えながら唸る。

（毎度毎度、まなちゃんの話になるとなんでこう盛り上がるんだ…）

安住が頭を抱えていると六代目が話しを進める。

「真島さん」

「んぁ？」

「ヒルズの振興セレモニーには、東城会の威信がかかっています……」

「ん…せやなぁ」

「他の組とも連携して警備の強化を……采配は、お任せします」

「…ハッ……」

「ヒッヒヒヒヒ……」

「あ、あの真島さん…早くしないとーーー」

すると突然部屋に組の一人が入って来た。

「お、親父ぃぃぃ！」

ドンと棚にぶつかり、棚に置いてあったＤＶＤが床に落ちる。

「こらボケぇ！何やっとんじゃ！？……ん？」

「え？」

真島と一夏はテレビとこちらにくるゾンビを交差に見る。

「……」

「……」

そしてまたこちらにくるゾンビとテレビのゾンビを交差に見る。

「……」

「……」

そして少し経つと真島が、

「ムホッ！やっぱホンマもんは迫力がちゃうなぁ」

「そうですねぇ」

二人は冷静に見ていると別の方向から飛びかかってきて真島を襲う、

「!?、真島さん!」

「ん?」

「があ”あ”あ”あ”!!」

ドンッ!!

唸り声を上げながら真島におい被さろうとするゾンビにショットガンの銃口を口に突っ込む、

「最高や」

「ま、真島さん…それ、どこから?」

真島はニヤリと笑いゾンビを見る。

「まさかゾンビとやりあえる日が……来るとはのう」

ニタァと笑った後、部屋に銃声が響きゾンビは頭を撃ち抜かれ倒れ伏した。

「へ……」

一夏は状況が分からず、ただ混乱するだけだった。

そしてまた組の者が現れ、二人に脱出を促す、

「親父！織斑のぼっちゃん！早く下へ脱出を！…う、うあああああっ！？」

「行くでぇ～」

ガシャンとショットガンに弾を送り込み肩に担いで立ち上がる真島、今ここに狂犬が唸りを上げて起きあがった。

「がっかりさせんなや！！」

十三話や！「狂犬と子犬ちゃんや！」（後書き）

真夏「ところで作者はん、他にウチの相棒って出るんか？」
作者「出そうと思います、はい」
真夏「さよか、で？誰や？」
作者「秘密です」
真夏「そんな殺生なぁ……」

十四話や！「パーチィーーーやなくてパーティの始まりや！」（前書き）

作者「二話連続辛い……」
真夏「よう頑張ったなぁ…千夏ちゃんトコもあるのに」
真夏「まだ見てくれる人がいますからねえ…頑張らないと！」
真夏「その意気や」

十四話や！「パーチィーーーやなくてパーティの始まりや！」

「ーーーーーーハッ!?今いっちゃんが組み合わせてはいけない人と一緒におる！」

「何言ってんだ?沙紀達も助けた事だしさっさとずらかるぞ」

ここはポッポ店前の路上、そこには頭や体が半分にされたゾンビ…
…それに無数のカリカリ君が横たわっていた。

「…そやねぇ、サッちゃん怪我無いか?」

「う、うん…まなちゃん凄いね…たった二人で数十人もいたのに物の数分で片付けちゃうなんて……」

「あははは、まあ慣れてはるからなぁ。タッちゃんも凄かったやろ?」

「……うん、凄く…カッコよかった」

「んな!?」

龍也は沙紀にカッコいいと言われ、顔をもの凄く赤くした。

「な、なななな何言ってやがる!?」

「ほほう?タッちゃん」ニヤニヤ

「龍也君……」クスクス

二人は顔をそろえた後にニンマリ笑い……

「「照れてますね？」」

「照れてねえええええええええええぇっ！！！！」

「「キャーー♪」」

二人は可愛い悲鳴を上げて龍也から逃げる。
それを龍也は片腕を振り上げながら追いかける。
怪我をした定員はほっといて……

「あはははは♪」

「ふふふふー♪」

「もう笑うんじゃねえよ！！」

そして追いかけていると龍也の前方のマンホールが開き、中から……

「マナチャン！新シイ仲間ヲ「待てやコラァ！！」ゴフッ！？」

マンホールから飛び出してきたのはゲイリーだったが、龍也がちょうどその上を走っていた為かマンホールをふんずけてゲイリーを押し込めた。ゲイリーはそのままマンホールの穴深く落ちて「アアアアアアァァァァァ……」と声を上げて闇に消えた。

「あん？なんか踏んだような……」

龍也は地面に不可解を覚えて下を見たが、マンホールがあるだけで何もなかった。

「……気のせいか」

「タッちゃんかわええなぁ♪」

「ほんとだね♪」

「もうからかうんじゃねえよ！？」

そして龍也は真夏と沙紀の追跡を開始、ゲイリーはその五分後別のマンホールから出て来て沙紀は真夏の相棒になった……

視点・「真島吾朗」

キッヒヒヒヒ、まさかゾンビが現実におるなんてなぁ！

「コイツが一棒の言っていた事かもしれへんなぁ」

まったく真夏ちゃんも人が悪いでぇ、こぉーんなおもろい事を黙っとくなんて、

「おっしゃ！いっちょ真夏ちゃんのとこにでも行こか！」

わしはそう言って部屋のゾンビを片付けた後に行こうとしたんやが……

「ーーーーん？、どしたんや一坊」

「あ……あ…」

一坊はあーあー言いながら口をあんぐり開けたまま固まっていたんや、どないしんやろ？

「一坊？どないしたんや、そんな鳩が豆鉄砲食らった様な顔は……」

「真島さん！」

行き成りワシに向かい名前を呼んで来よった。んんぅ？どしたんやいったい……

「こ、こここの人達って……」

「ん？ん～こいつらウチの組や神室町の住人に見えるなぁ……」

「え、えっと…この人達って……」

「……元は神室町の人間や無いのか？」

「だ、だったら何で躊躇なく撃ったんですか！？もしかしたらただの遊びで――――」

「一夏」

「！」

わしは一夏を待ったを掛ける、たく、無駄に正義感あるガキやなぁ。ま！そう言う一夏は嫌いや無いんやけどな！

「なら一夏、こいつらをそのままにして奴らに食われろっちゅうんか？」

「そ、そう言う意味では……」

「それにな、お遊びでもこれはリアル過ぎるで？」

「う……」

「確かに元わしの組のもんや神室町の住人を撃つのは……気が引けるで？」

「なんですか今の間は…それに何故疑問形？」

「細かい事は気にせんでええ、ウチが言いたいのは一夏が噛まれるかもしれへん事や」

「！、それ…は……」

一夏め、自分が食われるかもしれへん事を忘れておったな……

「もしお前が噛まれてゾンビにでもなってみぃ、わしはお前を多分撃てんでぇ、それにな……」

ワシは一呼吸して一夏の目を見る、五歳児の目はこんなにも汚れの無い純粋な目をしとったんやなぁ……おっと今はそこやないな。

「ん、んんん！……真夏ちゃんも、絶対ゾンビになったお前を撃てへんで？下手したら自分も一緒に……」

「そ、それはヤダ！！」

「そやろ？せやからワシはお前を守る為に銃を撃ったんや……」

「……え？楽しんでませんでした？」

「ドアホ！今わしがカッコいい事言っとんのにチャチャをいれんやない！」

「す、すいません……」

「……まあええ、せやからわし……まあ楽しんでるのは本音やせやけどそれよりも大事なんは一夏を守って無事に真夏ちゃんと合流させる事や」

「え？外に俺を出すんじゃ？」

「真夏ちゃんを助けにきたんやろ？なら一一一一」

わしは一夏の前でしゃがんだ体勢を解いて立ちあがり、ドアの前へと移動する。

「わしに着いて来ぃ、真夏ちゃんを助けに行くで！」

「……はい！」

ワシはドアを開けてミレニアムタワーの廊下へとでる。さあ…お楽しみの幕開けや！！

「ふう…無事に沙紀ちゃん達を届けたし、……あ、おとんに電話するのスッカリ忘れてたわ…」

テヘッと自分の頭をコツンと叩く真夏、龍也達は一旦後輩の定員を柄本の両院へと送った後にゲイリーズブートキャンプへと行った。

「はよ電話せな……」

そう言って五才の誕生日に堂島に買って貰った携帯で電話する。

「これって確かV○R○U社の携帯って言っとったなぁだいちゃん……」

どこかで聞いた事ある様な携帯で電話する真夏、だが電話はしたが一向に掛らない。

「……寝てるんかなぁおとん…」

そう言って携帯を切り、ポケットにしまう真夏、さてこれからどうしようと悩んでいるとある事に気づく、

「……そう言えばだいちゃんに誘われていたセレモニーの事すっかり忘れてたは……」

今から行けば間に合うかなと喫茶店アルプスでくつろぎながら考える。

そして真夏は会計を済ませて外に出て大吾達がいる神室町ヒルズへと向かった。

「そう言えばヒルズもなんや高い壁の裏にあったなぁ……どうやって入ろう?」

悩んでいると後ろから声を掛けられる。真夏は振り向くとそこには長濱がいた。

「よう、まだこんなところでウロチョロしてたのか」

「長濱さんもどないしてここに？」

「俺は…まあ金稼ぎだ」

「へぇーそうなんか、とそうや長濱さん」

「ん？なんだ？」

「また壁の向こう側へ行きたいんやけど、どうやったらいけますぅ？」

「はあ？何死にに行く様な事言ってんだ？」

「大丈夫やウチにはコイツがあるで」

そう言って肩に担いでいでいる布に巻かれたラブシャをとりだして長濱に見せる。

「……五歳児が持つ武器じゃねえよこれ……」

「へへへ…まあええやないですか、そんで……」

「あ、ああ壁の向こう側への行き方だな？それなら赤石って奴に頼んでみろ」

「赤石ぃ？」

「神室の盾ってつうボランティア団体を組織している奴だ、奴なら中への入り方を知っているはずだぜ。聞いてみな」

「ホンマか？おおきに♪」

そう言って真夏は長濱に礼を言って去る。

「奴らはあのデカイ壁にいるから話掛けろよ！」

「おおきに～！」

真夏は長濱に手を振って歩き出す、一夏との再開は……近い！……かも？

オマケ・「ダチはカメラマン！」

「なんでレゾナンスにこないにいっぱいおんねん！」

そう言って真夏（注：この真夏は１３歳です）は銃砲店から拝借し

たショットガンを撃つ、

「しょうがねえだろ！ショッピングモールなんだから！」

そう言ってバールを振り上げゾンビの頭をカチ割る一夏（注：未来の一夏、１３歳です）、

「はよリッちゃん迎えにいかんと！あの子泣いてる！」

「弾も早く見つけねえと何するか分からないからな……」

友達の心配をよそに敵であるゾンビ達は一夏と真夏を目指して進軍する。

「くっそう、ラブ亜門レールガンがあれば一発やのに！」

「無茶言うな！あんなもん何時でもどこでも持ち歩けるか！」

二人は喋りながらもゾンビを倒していくとその時！

ドゴォーンッ！！

「！？、なんや！！」

「次はなんだよ！？」

そう言ってゾンビの遥か後方から爆発と共にゾンビが粉砕されていく、

「生存者かいな!?」

「だがこの状況だとありがたい!」

そう言って二人は倒しながらゾンビを蹴散らし、爆発があった方向へと走ってゆくと爆煙の中から人があるいてくる。

「だ、誰や?」

「生存者…だよな?」

一夏と真夏はお互いの武器をその人影の向けながら警戒する、そして煙幕は晴れてその人物が見えた。

「ーーーーーはい?」

「なん……だと……?」

二人は信じられない者を見た……

「結構苦戦してるな?一夏、真夏」

そこには二人の良く知る人物だった。
一夏と真夏は別人であって欲しいと願ったがたやすく打ち砕かれた。
そう、そこには……

「……弾ちゃん?」

「おう、無事で何よりだ二人とも」

「ほ、本当に…弾…なのか？」

「当たり前だろ？親友の顔を忘れたか？」

二人は唖然としていたそれは何故か？

「「へ……」」

「ん？」

そう……弾の格好は今……

「変態やーーーーーーー！！」

「変態だーーーーーーー！！」

女性物の服を着て頭には馬キャップ、そして首にはカメラをぶら下げた弾がいたからだ。

「ちょ！おま！変態って！？」

「い、いやあぁ！？近づかんといて！」

「だ、弾！い、いくら親友でもま、まなちゃんに近付くとゆ、許さないぞ！？」

真夏は腰を抜かしてへたり込み、一夏はそれを守ろうとしているが足が震えていた。

「お前ら何やってんだ？」

「「それはこっちのセリフだ！、や！」」

弾は未来、最強のゾンビハンターになっていた……オワレ、

十四話や！「パーチィーーーやなくてパーティの始まりや！」（後書き）

真夏「未来で弾ちゃんが……嘘や…」
一夏「俺だって夢だと思いたい……」
弾「何がいけないんだ？」
一夏「お前の格好だ！」
真夏「アンタの格好や！」

作者「あのファッションって誰が思いついたんだろ？」

十五話や！「なんでウチが？」（前書き）

早々十五話目！感想待ってます！

十五話や！「なんでウチが？」

ここはミレニアムタワーの出口前、そこではショットガンを肩に担いで堂々と歩く真島と拳銃を持ちながらオドオドしながら真島の服にしがみ付きながら歩く一夏がいた。

「キヒヒヒ！いや～あないにぶっ放したんは初めてやぁ！爽快やで！」

「……」キョロキョロ

「ダイジョーブや一坊！そないにキョロキョロせんでも平気や、わしが付いとる」

「は、はい……」

とは言っているがタワー内では一夏そっちのけでゾンビを狩りまくり、一夏を涙目にさせていた。
それもあってか、一夏は真島から離れようとしない。

「一坊、そろそろ離れんか？男やろ？」

「で、でもぉ……」

「せやけどなぁ……ん？」

真島が一夏と話していると近くから悲鳴が聞こえる。
そして真島と一夏の前を逃げていく人達が走ってゆく、
その一人が真島達を見つけて声をかける。

「おいアンタ達逃げろ！とんでもねえ化物が来るぞ！」

そう言ってまた再び逃げて行った。

一夏は不思議そうにして真島に聞く、

「化物って…？」

「しわんわい、せやけど……なんや、ゾンビとちゃうのがおるんかい」

そうして二人は歩き出し、道路に出ると近くからまた悲鳴が上がっていた。

「ま、また悲鳴……」

「あそこの車からや」

真島が指差す方向を見てみると白いワゴン車が止まっていた。前の座席にいる人はエンジンをかけようとしている。エンストした見たいだ。だがその指差した方向にいたのはそれだけじゃなかった。

「な、なんだあれ！？」

「……なんやゴリラの一種か？」

真島達がそう言ってるとその巨大なゴリラらしき化物が悲鳴上がるワゴン車を両手で掴んだ。

「た、助けて！助けて！」

「ま、真島さん！」

「こりゃどえらい楽しめそうや……」

そうこうしている内に巨大ゴリラは車を持ち上げてあろうことか真島達の方へと……

「え！？」

「おほっ！」

分投げた、真島は一夏の首根っこを掴みステップして避けた。
そして投げられたワゴン車の中にいた人たちはもがきながらも外に出ようとする。
だが投げた巨大ゴリラはそれ良しとせず、こっちに走ってきた。
隣にあった戦車を殴ってふっ飛ばしながら……だがこちらもそれを良しとせずにいる男がいた。

「ドアホ！お前は……」

真島は一夏を離し、化物の前へと出る。
一夏はそれを止めようとしたが……

「わしの獲物や！」

バキッ！！

「……うそ…だろ…」

一夏は信じられないの物を見た、あの巨体を誇る巨大ゴリラを真島はゴリラの顔を殴り、静止させたのだ。ゴリラは目をまん丸くして真島を見ていた。

「キッヒッヒッヒッ！」

その笑い声が癇に障ったのか、ゴリラは顔を怒りに変えて雄叫びを上げる。

「せや！そうこなアカン！」

「……まなちゃんゴメン……俺帰りたい」

ガクッと項垂れて現実逃避をする一夏であった……

視点。「郷田真夏」

「ーーーーーーーーーーハッ！？いっちゃんが別の意味で危ない！？」

「まなちゃん！こっちの応援頼む！正面のゾンビの猛攻が激しくて！」

「！、了解や！」

ウチは今何とかヒルズに辿り着いたんやけどそこもやっぱりゾンビがいて東城会の幹部が襲われておったんや……ウチは東城会幹部の人達と共にヒルズに来店していたお客さんと非戦闘員の幹部の部下達を避難させてる所や。

「非戦闘幹部はお客の避難を！安住組は他の組と連携してゾンビを店内に入れんなや！」

「ウッス！」

「ライフルを持ってる人は上からの狙撃を！間違ってもダチに当てんや！」

「合点だ！」

「それからーーーー！、ダイちゃん何やっとるや！？下がっといて！」

「い、いや俺も戦わないと！」

「アホ言うなや！総大将が前に出てどうすんねん！！」

まったくいっちゃんと同じで正義感強いわぁ、まあそこがダイちゃんのええ所なんやけど……

「クッ！熊谷はん！安住さん！」

「おう！」

「どうした？」

「ダイちゃんの警護を！前に出ようもんならフンじばっても止めといて！」

「わかったぜまなちゃん！」

「任せろ」

「お、おい！お前ら！」

ダイちゃんは熊谷はんと安住さんに両脇をガッチリ拘束されて避難している人達と共に連れて行かれる。

「六代目、すんません…まなちゃんのお願いですので…」

「六代目が死んだら東城会は終わりですからね」

「だ、だからってなんでまなちゃんのお願いが優先されるんだ！？」

「「まなちゃんだから」」

「どんな理由だそれは！？」

「安住さんはよお願いしますぅ、ウチは他の組引っ張って奴らを殲滅せんといけまへんから」

「わかった…行くぞ熊谷！」

「おう！六代目、失礼します！」

「ま、待て！ホントに待ってくれ！」

まなちゃーん！と声を上げながら奥へと消えるダイちゃん、まったく、総大将が前に出る戦なんて無いで？

「まなちゃん！ゾンビ共が防衛線を突破！至急救援を！」

「！？、思ったより早い…非戦闘幹部はそのままお客を店の奥に……真島組！！」

ウチが呼ぶと直ぐに声が来てウチの前に数十人の真島組の親衛隊が来た。

流石はごーちゃんの組や、まだ誰も掛けてへん。流石はレンジャー連隊にも引けを取らない強さや……

ちなみに、何故かウチの親衛隊なんやけどな。

「及びで？」

「親衛隊はありったけの武器を持って最終防衛ラインを死守！後残ったもんはウチと一緒に前戦行くでぇ、ウチに着いて来ぃ！」

「「「「オウッ！！」」」」

ウチは極道の人達にお願いして幹部達を連れてゾンビ共を迎え撃つ、

「こりゃホンマ物の戦場よりもたちが悪いで……」

ウチはラブスパを持って最前戦へと走る。もうウチのダチは殺させへん！！

場所を代わりここは神室町に向かう電車の中、そこに白いコートを着ている厳ついオッサンがいた……

「……」

郷田龍司である、

龍司はコートのポケットから携帯を取り出して電話をかける、

掛けた先は真夏である。

「……やっぱり繋がらへんなぁ」

そう言ってポケットに携帯をしまう龍司、何故龍司が神室町へと向かっているかと言うと……

「真夏が行った神室町ではけったいな封鎖がされているとテレビで言うとったが、真夏は巻き込まれておらんだろうなぁ……」

龍司の心配もむなしく東城会の指揮官してバリバリ巻き込まれている真夏であった。

神室町まで電車で後四十分、龍司にはそれが長く感じていた。

「真夏……無事でいろや…」

そう言ってまだ遠くに見える黒煙を出している神室町を龍司は険しい目で見ていた……

ここはミレニアムタワー最上階、そこに椅子に座る二階堂とＤＤと言われる日系アメリカ人がいた。

「真夏ちゃんと言う郷田の娘の誘拐には失敗したね」

「ああ…まさか東城会六代目が助けにくるなんてな……」

二階堂にとっては予想外の伏兵だった事は言うまでも無い。

「……あの男を使うかい？」

「……林か……」

ＤＤは二階堂に元兄貴分に当たる林を使い、真夏を誘拐させようと提案した。

「彼はまだちゃんと命令に従って動いてくれるし、適任じゃあないかな？」

「……そうやな…奴を使おう」

二階堂の了承を得た後、ＤＤは携帯を取り出しどこかに掛ける。

「……ああ僕だよ、指示通り真夏ちゃんをここに連れて来てくれ」

そう言った後携帯を切りしまうＤＤ、

「そうだ、さっき映像で見たけど彼女の戦いには驚かされるね」

「……流石は兄貴の娘や、一筋縄ではいかんっちゅう事やな」

真夏見たいな子供がいっぱいいたらバトルロワイヤル宜しく、大人達に宣戦布告しかねない。

「次いでにヒルズにアラハバキを送っといたから、連れてくるのはたやすくなると思うよ？」

「アレを送ってもあんまり心配しないのはなんでや？」

「君の兄貴の子だからじゃないかい？」

「……否定はできひんな」

二階堂は溜息を吐き、とりあえず林や送ったハラハバキの心配しか思い着かなかった二階堂とＤＤであった。

オマケ・「悪霊山脈の悪夢！」

「いっちゃん走って！」

「フルスロットルで走ってる！」

真夏と一夏（注：１４歳です）は悪霊が住むと言われるアークレーーーでは無く悪霊山脈にいた、
絶賛肉の剥げた犬共に追われているが……

「なんで犬に追われなあかんねん！？」

「しるか！てか追っかけてくる犬ってアレもう普通の犬じゃねえよ！」

とにかく走る真夏と一夏、少し走っていると遠くに建物の様な物が見えてくる。

「いっちゃん建物や！あそこに入るで！」

「お、おう！」

二人は全速力でゾンビ犬との距離は離して走り、何とか建物内へと逃げ込んだ。

「はあ…はあ……はあ」

「ぜえ…ぜえ……ぜえ」

二人は息を切らして建物の中であるエントランスに寝転がる。

「はあ…はあ……はあぁぁぁぁ…こないな事になるなら探検なんてするんやなかった……」

「ぜえ…ぜえ……あぁぁぁぁぁ…悪霊に興味を持ったまなちゃんがいけないんだろ？」

「そらそうやけど…いっちゃんだって探検って聞いて目ぇキラキラさせとったやん」

「そ、それは……」

悲しいかな、男の探検心を借り立たせたばかりにこの様な眼に合う真夏達であった。

「まぁええわ…とりあえずこの旅館？見たいな所に住んでる人に事情を説明して泊めてもらわな…」

「同感だ…とりあえず人を探さないと…」

「せやな」

そう言っては二人は立ちあがり、旅館のエントランスを見渡す。

「……ここって…旅館…やよな？」

「だと思うんだが…人がいない？」

ここが旅館ならいるはずの受付嬢や接客する旅館人が何時までたっても来ない事に疑問を抱く二人、

「まさかここって廃館なんじゃ……」

「でも電気は通ってるぜ？しかも廃館ならここまで綺麗じゃ無いだろ」

「確かにそうやなぁ……ん？なんやこれ」

真夏は足元に転がっていた金属の丸い物を見つける。

「これって……」

「薬莢…だよなぁ？」

「せや…9ミリ弾…パラベラムの薬莢や、せやけどどうしてこんなところに？」

二人はこれを見てやな予感がした。

「……いっちゃん、手分けしてこの旅館を散策するんや」

「お、おい！いくらなんでも危険だぞ！？」

「わかってる…せやけどここで留まっても何も得られへん。ウチは向こうのドアに行くからいっちゃんは反対側を…」

「……わかった、気を付けてな？」

「誰に言ってるんや？」

「そうだったな」

二人は手分けして旅館を散策する事にした。これから訪れる悪霊よりもたちが悪い相手にして……

続く！……かも、

十五話や！「なんでウチが？」（後書き）

真夏「ウチらってもしかして……」

一夏「うん、とんでもない旅館に来てしまった見たいだ……」

作者「自分、ゾンビ物大好物です！ＰＳＰで新作出してくれませんかねぇ……」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（前書き）

真夏「ええなぁ…ごーちゃん、あないな化けモンと戦って…」
一夏「え？普通怖がらない？」
真夏「怒ったおとんの方が怖いわ」

作者「地震、雷、火事、親父……て言いますもんねぇ」

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」

「キヒヒヒヒヒ！ええでぇ！岩ゴリラァ！もっともぉーと突っ込んでこんかい！」

「ヒィィィィ！？お助けー！！！」

一夏と真島は岩ゴリラことオンラキと死の鬼ゴッコをしていた。
真島は一夏の首根っこを掴んで背中に背負いながら後ろから追いかけてくるオンラキにショットガンをぶっ放す、

ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！ドンッ！

「うひゃひゃひゃひゃひゃあ！楽しいなぁ！」

「ヒ、ヒィィィィ！？う、後ろから！後ろが見えるから余計怖い！？」

「じゃかしぃわぁ一坊！そんな情けない所を真夏ちゃんに見られたら嫌われるでぇ！」

「まなちゃんだって絶対怖がります！」

「アホ抜かせ！まなちゃんならわしと同じでこの状況を楽しむに決まっとるわぁ！」

「なんで俺は極道少女に惚れたんだーーーー！」

と今更後悔はするが真夏への想いは諦めない一夏はある意味凄いと思う……

「たく、コイツはぁーーーーん？一坊！！」

「は、はいぃ？……へ？うわあああああああーーー！？」

真島は行き成り一夏を戦車の上にブン投げた、一夏は放物線を描きながら戦車の上に落ちてへブッ！と言う情けない声を上げて悶絶していた。

「い、痛い…ふぇ…」

「泣いてる暇はないでぇ一坊！ソイツを使ってコイツの岩剥がすんや！」

五歳児に酷な事を言う真島だった。

「ふえぇぇぇん…まなちゃ～ん…」

「だー！もう！まなちゃんに泣きいれんなや！男になるチャンスやで！？」

「ううぅ……？男に？」

真島は追いかけられ、撃ちながらも一夏に言う。

「真夏ちゃんに一坊の武勇伝聞かせて惚れさせるんや！」

「ほ、惚れさせる？」

「せや！今がこの時や！」

真島に言われ一夏は泣いてグチャグチャになった顔を引き締める。

「……グスッ…ズズゥー！、真島さん、俺…やるよ！」

「その意気や一夏ぁ！ぶっ放したりぃ！」

一夏は覚悟を決めて戦車の砲主に乗り込む、真島は時間を稼ぐ為一人でオンラキと対等する。

「さぁーてぇ…岩ゴリラァ！わし一人でヤッたるけど堪忍なぁ！？」

そう言いながらも心底楽しそうに顔をほころばせる真島、

一夏は急いで大砲の操作を覚える。

「……よかった！戦車の設計はゲイリーさんに乗せて貰ったエイブラムスと類している。これなら！」

一夏は素早く操縦をし、砲身をオンラキへと向ける。

「真島さん！行きます！」

「いいでぇ！食らわしたりぃ！」

そして一夏はトリガーを引く、そして砲身から……

ドオォォォンッ！！！！

砲身から弾が発射されてオンラキに直撃する。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡッ！！？？」

「一夏ぁ！！」

「はい！第二弾装填！」

一夏は戦車を捜査して弾を排出、弾丸を再装填した。

「目標ぅ！。岩ゴリラ！」

「発射！」

ドオォォォンッ！！！

また弾丸が発射され、オンラキの体にまとわり付いていた岩が砕かれ徐々に剥がれて行った。

「ええでぇ！一棒！次や次ぃ！！」

「はい！……あ、あれ？」

「ん？どしたんや？」

「……弾切れです」

「なんやとぉ！？」

一夏が乗っている自衛隊の戦車の大砲の弾が弾切れを起こしていた。

「しゃあない……わしがフィニッシュ決めたる！」

「真島さん！？」

「行くでぇ！！」

真島は走り出し、オンラキそれに気づいて腕を振り上げ横薙ぎに振り下ろすが……

「これがヴァンキッシュや！！！！」

真島はギリギリで滑り込み、それを回避した後に……

「雑魚ボスの弱点はお決まりやさかいな！」

そう言って真島はオンラキの腸あたりにある光るコアに銃身を押し付ける。

「そこや！！」

ドオォォォォォォォンッ……

手に持つショットガンが火を噴き、コアを破壊オンラキは声にならない悲鳴を上げながら仰向けに倒れた。真島はそれを見届け、立ち上がり一夏に笑い掛ける。

「ナイスファイトや…一夏ぁ……」

「……あ、ありがとうございます……」

ふぅ～と息を吐きながら砲主席にヘタレる一夏、真島は今の戦いを思い出して高笑いしていた。

「にしてもコイツはいったい……ん?」

真島は岩の剥がれたオンラキを見て気になる物を見つける。
一夏も何事かと思い、戦車から下りて近くで見に行く。

「……真島さん、これって……」

「ああ……これは、どないな設定やねん。マニアックなゾンビやなぁ」

二人はオンラキの右肩に付いている人工物を見て疑問に思っていた。

「さて、これどうし……ん?」

真島は自分の携帯がなっている事に気づき、その電話を取ってみると……

「真夏ちゃんからか…」

「え!?まなちゃん!?」

真島は電話を取り、電話に出た……

「やっとバリケードと中に入ったゾンビを一掃出来た……ふうぅ…」

真夏はスパークショットを地面に置いてよっこらせっと言って腰を下ろす、実に爺臭い。

「さて……安住組!被害報告よろ」

「ウッス!と言っても被害が多すぎて……推測ですが、かなりやられたかと…」

「さよか…真島組の被害は?」

「ありません、皆生き残りました。真島組とまなちゃんがいなければこの倍は……」

「いわんでええ…どっちにしても、ウチは守れんかった……」

そう言って肩を落とし両手で膝を抱える真夏に組の幹部は慌てふためく、

「い、いえ！まなちゃんがいなければ俺だって生きていたか！それに六代目だって危なかったと思います！」

「せやけどなぁ……」

「そうそう、そう落ち込む事は無いと思うぜぇ？まなちゃん」

「う～んそうなんかなぁ……ん？」

真夏は隣で腰を下ろす人物を見て驚く、

「うひゃあああ！？なんでここにまー君が！？」

「んな！？マッポが何時の間にここにいやがる！？」

幹部と真夏は驚き、警察のである谷村が何故かいた。

「そりゃあ俺がここの調査に来たからさ」

「ち、調査ぁ？」

「そ、調査、東城会が経営するって言う神室町ヒルズなんだから警察が警戒するのは当たり前だろ？」

「ま、まあ確かに…せやけどなんでここにまー君が？」

「俺がここに派遣されたんだよめんどくさいけどさぼれそうだし、まなちゃんと暇出来そうだしな」

「あ、あははは…まー君ホンマに自由人や……」

「こんなのが警察で喜んでいいのか悪いのか……」

幹部と真夏は複雑な心境だった。

とりあえずヒルズの防衛は終わり、一休みした後に大吾の所に戻ろうとすると、

「あ、俺も言っていいか？」

「ああ！？駄目に一一一一」

「ん？ええでぇウチがダイちゃんに話しとくわ」

「まなちゃん！？」

「おー助かるぅ」

二人は店の奥に向かい、ポツンと残された幹部は唖然としたまま立ち尽くしていた。

「俺が…俺が可笑しいと言うのか！？」

そんな悲痛な叫びは誰にも聞こえなかった……

ここはヒルズの店の一角、そこに大勢の生存者が避難していた。
そこにいた安住に声を掛ける真夏、

「アズにゃーんお客一名来たでー」

「……アズにゃんは止めてくれ」

「えー？カワエエのに……」

「はあ…ん？その男は？」

「どうも」

そう言って頭を下げて挨拶をする谷村に安住は首をかしげる。

「ソイツは一体……」

「マッポのまー君」

「なんかその言い方警察のマスコットキャラになってないか？」

「別に間違ってへんやろ？」

二人が話していると店の奥から大吾が現れる。

「まなちゃん！無事だったんだね！？」

「ちょっち疲れたけど、怪我はしてへんから安心しぃ」

「そうか……ん？君は……」

「マッポの谷村っす、以後良しなに……」

「ああ、確かまなちゃんが言ってた麻雀仲間の……」

「せや、警察の人なんやけど……アカンかな？」

「いや今の状況じゃあ警察も何も関係ないからね、こっちは人手が増えて助かるよ」

「だそうや」

「はあ…やっぱ働くんだ…」

「当たり前や、マッポなんやから、それに今回はマジでしゃきっとせな……死ぬで？」

「……わかってる…ちゃんとやらないとあの世の上司に怒られちまうからな…」

「うふふ…頑張ってな、まー君♪」

真夏はケラケラ笑い、堂島も釣られる様に笑って場を和ます。と真夏はある事に気づく、

「そう言えば…ごーちゃんは？」

「真島さんはここにはいないよ」

「たく…あの人は…」

堂島と安住は困った様な顔をする。

「……サボり、か…」

「サボりだねぇ…」

「忘れているだけだと思うよ？」

「アイツ、何様のつもりだ。まったく……」

「まあええわ、ウチが電話を掛けて見ます」

そう言って真夏は携帯を手に取り、電話を掛けて見る。

「……あ、ごーちゃん？ウチやウチィ」

「ウチウチ詐欺？」

「…うん…うん…え？一夏も一緒なん？」

「一夏君も一緒なのか……」

「真島さんに付いていたとは…運が無い」

「まああの人振り回されたら命がいくつあっても足りないねえ」

人のいない所で好き勝手言う幹部とマッポ、

「……え！？マジで！？や～んごーちゃんズルイ！ウチもいっちゃん見たいにぶっ放しかったで！」

「ぶっ放す？」

「真島さん一夏と何をやったんだ？」

「とりあえずは過激な事で間違い無いねぇ」

またも人のいない所で勝手な事を……いや事実か…

「うん…そっかそか、それじゃあ直ぐにこっちに来てなぁ。あ、いっちゃんに代わってくれへん？」

「お、一夏君に代わるみたいだ」

「よく無事だったもんだ」

「一夏もついてるねえ」

一夏の無事を喜ぶ一同だった。

「いっちゃん？…え？な、なんやいっちゃん泣いてるん！？どうしたんいっちゃん…ん、ふむ…そかそか、そりゃあ可愛そうに…うん…うん…もう大丈夫やで、ウチがごーちゃんとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩするから…変わってくれへん？」

「！？（な、なんだ！？急にまなちゃんの周りの温度が下がった！？）」

「ま、まな…ちゃん？（こ、これは一体！？）」

（あ～あ…怒らせちゃった…）

三人は真夏の急な温度差にビビっていた。そして…真島に代わり、真夏が喋りだす、

「……真島さん」

「！、まなちゃんが名前で！？」

「こ、これは…死んだか真島！？」

（骨は拾っときますよ……）

「なーんでいっちゃんを泣かせたんかなぁ？いっちゃんを戦わせんでも一人でやれる筈やったやろ？いっちゃんはまだ五才やで？銃も持つ歳でも戦車乗る歳でも、ましてや化物とヤリ合う歳や無いんや…そこんところ分かってるやろ？」

（こ、これは……）

（な、なんて……）

（……骨も残らないかもなぁ）

（（（マジで怖い！！））））

三人は真夏の低い声とハイライトの消えた目に恐怖し、真島の心は絶望的だと悟った。

「……ウチはどうなんやと？今ウチはいっちゃんの話をしとるんやで？話を変えんで欲しいんやけど？……それでええんや、そんで…返答は？……まあええやろ、何時までも怒ってもしかへん、早くいっちゃんを戦わせず、安全に、エスコートしてやねごーちゃん♪」

ピッと携帯を切り、ふうと息を吐き三人はやっと重空気から解放された。

「まったく、ごーちゃんはなんでこう加減を覚えてくれへんのやろ。困った子や……」

「……安住」

「はい……」

「……よし」

「「「まなちゃんを絶対に怒らせないようにしないと」」」

三人は固く決意したのだった……

「……まー君」

「な、なんだ!?」

「とりあえずまー君を隔離エリアから出して、警察にこの場所を教えて欲しいんや」

「お、おう」

「そんで、その護衛にウチが行くからまー君は武器持ってる?」

「い、いや…俺の銃は弾切れで……」

「さよか」

真夏は腰から自分のブローニング・ハイパワーを谷村の前に出す、

「これを使って、ウチはこっちがあるからそれじゃあいこか」

「い、いまから?」

「早い方がええ、お客さんも心身ともにまいって来てる……反乱を

起るのは防がなぁ」

「わ、わかった…」

谷村は真夏から銃を受け取り、腰に収める。

「ほな行くで」

「え、えっと…真島さん達は待たなくて？」

「まー君送ったらウチは直ぐ戻るから平気や、いっちゃんは泣いてはったけど根は強い子や」

そう言って谷村に笑いかけながら歩く真夏、それにオドオドついて行く谷村……真夏の暗黒面は誰だろうとビビらせる迫力があった。

「この事件終わったらごーちゃんとお話せな♪」

「真島さん…生き残ってくれ」

その後、真夏達がヒルズを離れ、その入れ替わりに真島達が到着。真島は入って来た直後斜め四十五度の綺麗なお辞儀に似た謝罪が店に響いたのを真夏達は知らない……

オマケ２・「旅館検索」

真夏は一夏と別れ反対側の部屋へと進んでいた。

「こにゃにゃちわ～……誰かいませんか～？」

真夏（注：１３歳）は呼んでも返事が無い、そしてさらに進むと大きな部屋に辿り着く。

「ここは…食堂か？」

そこには大きなシャンデリアと横にのびるテーブルに椅子が沢山ある部屋だった。

奥に進むと暖炉がありそこに近づく。

「……これは…？」

暖炉のそばには赤い染みといくつもの薬莢が転がっていた。そしてもう一は……

「物騒やなぁ…拳銃が落ちてるで」

真夏はそれを拾い上げ、確認する。

「……弾切れかぁ…お、マガジンがある」

真夏はマガジンも拾い上げ、拳銃の空弾奏を抜いて弾の入ったマガジンを挿入する。

「なんやろなーこれ、結構カスタムされてるし…このグリップの星のマークはなんやろ?」

真夏は拳銃のカスタム化されてる事に疑問を抱いていたが、とりあえずはスライドを引いて初弾を装填する。

「弾は12発…ちょっと心細いけど、何とかなるやろ後で見つかりそうやし」

そう言って真夏は拳銃の具合を確かめた後、床に飛び散っている赤い染みを確認する。

「……血…やよね、これって…アカン、ホンマに危ないかも、この旅館……」

真夏は一夏にこの事を知らせようとしたが、

「まだ奥に部屋が残ってる…少し奥に行ってから報告しよ……」

そう言って真夏は立ち上がり歩き出す、そこで捕食者に出会うとはしらずに……

「ここは廊下やな…明りが少な「グチャ…」ん?」

真夏は奇妙な物音に気付き、音の発生現と思われる廊下の一番奥に向かう。

「人か？」

真夏はゆっくり近づいていき、確かめる。
そして真夏は床に寝ている人とそれを支える様に側にいる人を見つける。

「あの…ここの人ですか？」

真夏は呼びかけたが、一向に返事が無い、そして真夏が近づいてゆくと……

ブシュ！ゴロン……

行きよいよく床に赤い液体が流れ床を染め上げる。
そしてその後にゴロンと転がってくる物体があった。

「へ？……ひぃ！？」

真夏は瞬時に飛び引いた。なぜならそれは……

「な、なな生首！？」

真夏の大声に気づいた人物はゆっくりと真夏の方へと顔を向ける。
その顔は口は血で汚れ、目は生者の目をしていなかった……

十六話や！「何とかヒルズは守ったで……」（後書き）

真夏「うふふ…ホンマごーちゃんはオイタが過ぎるわぁ……」

一夏（まなちゃん…目が怖い！！）

作者「真夏と一夏のバイオ編……初代のアレの振り向き様の演出はホントに印象に残りますね……自分、小さい頃父親に抱きつきながら一緒にプレイしました……」

十七話や！「トラの狩りが始まるでぇ！」（前書き）

あの方の出番が決まりました！見てください！

十七話や！「トラの狩りが始まるでぇ！」

ウチはまー君を警察署では無く、突然現れたゲイちゃんによってまー君はゲイリーズ・ブートキャンプに拉致られ、ウチは一人神室町の隔離エリアの外にいた。

「まさかゲイちゃんが待ち構えていたとは……まー君もご愁傷様や…」

離せー！俺はまなちゃんとサボるんだー！と言って引きずられながら連れてかれたし……
ゲイちゃんも積極的やなぁ……

「……アッー！な展開にならなきゃええけど……さて、ウチもヒルズに戻るかいっちゃんやごーちやんがまってるはずやし」

ウチはとりあえず必要な物を買う為にドン・キホーテと無事な方のポッポ店に向かう。
お金はちょっちゾンビから拝借したからお財布はパンパンや……追い剥ぎとか盗人とかやないで？ヒルズの人達の為に使うんや、ゾンビになった人達も許してくれるはず！……多分。

視点・「？？？」

「どないなっとんねん……これは」

わしは中国の商談が早く終わって神室町についたんやけど……

「なんやエライ騒ぎやなぁ…テロでもおこったんかい？」

商談相手が真夏ちゃんの知り合いで商売が滞りなく進んだんわええんやけど、
まさか外国にも真夏ちゃんの知り合いがおるとは……

「確か、上山とか言う奴から聞いてそれで知り合ったとか言うとったな……」

商売相手はなんや派手な衣装を着た人形を頬ずりしてはったし正直気味が悪かったわ……

（しかもその人形が真夏ちゃんに似てた様な似て無い様な……）

まあええわ、それよりもどうやって開催セレモニーがやっている神室町ヒルズに行くかやな、
六代目や兄弟もおるはずやし、

「真夏ちゃんもきっといるはずや」

「ウチがどないしたん？」

「うぉ！？」

「ちょ！どないしたんやトラちゃん？そんな大声上げて……」

わしが喋っている途中で後ろから声を掛けられてビックリしたんけど…真夏ちゃんかい…

「ま、真夏ちゃん？」

「そやでーてトラちゃんは小龍はんと商売の話で中国行ってはったんやろ？終わったん？」

「あ、ああ真夏ちゃんのお陰で商売は上手く行ったで？」

「さよか、そりゃよかったわ小龍はんも話の分かる人やなぁ」

「ああ、こんなに上手く行ったのは初めてや」

「そかそか、あ！そういえばその人に中国に来て見んかって話があったんよ」

「そないな話が？」

「せやで、なんやこっちに来てご奉仕せえへんか？って来たんや」

ご、ご奉仕やと！？ま、真夏ちゃん！それって！！

「トラちゃん……」

「な、なんや？」

「ご奉仕ってなんや？」

ズドンッ！！

わしは頭からまっさかさまにずっこけた。イッテェ……

「トラちゃん？」

「……え、ええか真夏ちゃん、絶対中国に行ったらアカン！」

「？、なんでぇ？」

グッ！この純粋な瞳が汚される所やった！危なかったで……

「ええか真夏ちゃん、これはウチとの約束やご奉仕っちゅうもんをまだ教えられへんけど何時かは真夏ちゃんにも知る時がある。せやけどなぁそれは心に決めた人にだけするもんや」

「心に決めた人？」

「せやいるやろ？その…す、好きな人とか…」

「うん、いるで」

「ど、誰や？」

「トラちゃん」

「は？」

な、なんやと？わ、わしが！？

「トラちゃんは優しくて、時々見せるお茶目な所がカワエエんや」

「……」

「そんでもって腕っ節が強くてカッコよくて……」

「……」顔真っ赤

「ウチの大事な……」

「だ、大事な？」

「友達や！」

ドオォォォンッ！！

わしは地面を陥没させる勢いでドたまを打ちつけた。

「トラちゃんだけやないでダイちゃんもごーちゃんも駿ちゃんもまー君もタッちゃんもサッちゃんもたっちゃんや伊達はんやサイの河原の人達と東城会の幹部の皆、そしておとんやちー姉ちゃんといっちゃんも大好きやで」

まなちゃんは指で数えながら神室町の人達の名前を言う。

「は、ははははは…さ、さよか」

「うん！」

アホかわしは…何を五歳児に期待しとんねん…これじゃあ真夏ちゃんを襲ってきたロリコンと一緒やないか……

「……はあ、とにかく中国に行きたい時はまずわしと兄弟と後これば六代目や親衛隊が連れていきぃ……（てか中国マフィアってなんで真夏ちゃんを欲しがるんや？）」

「？？？、トラちゃんが言うんならそうするわ」

よし、とりあえず拉致監禁は防いだで、六代目に言ったら中国との商談を即効で破棄しようやし……

「わしの苦労が水の泡になりそうやしな……」

「トラちゃん？」

「なんでもないんや気にせんでええ」

そう言ってわしは真夏ちゃんの頭を撫でる、少し驚いていたが直ぐにされるがままに撫でられいる。
ホンマに可愛いやっちゃ……

「さて…そろそろヒルズにいかなぁ」

「あ、そやったわ…ゴソゴソ…はい！トラちゃん」

「ん？なんや？」

真夏ちゃんはお揉むろに後ろの腰から……て拳銃！？

「ま、真夏ちゃん！？それは！！」

「ヒルズに行く途中は危険やからこれ貸したるわ」

おいおい…いくら神室町が危ないからって拳銃はいらんやろ……

「いらんと思うで？真夏ちゃん」

「絶対必要やって…それに撃てないんならウチがやるし」

「な、何言ってるんや！真夏ちゃん！？」

真夏ちゃんがわしの代わりに撃つやと？人を撃つ怖さしらんのかい！……いや知る訳ないかこんな五歳児に……

「真夏ちゃんあのな――――」

「トラちゃんはよいこ！皆が待ってるで！」

真夏ちゃんはそのままわしに拳銃を押し付けて手を引っ張る。

「神室の盾に頼めば入れてくれる筈や、はよういかな！」

「お、おい真夏ちゃん！！」

わしは引っ張られるまま真夏ちゃんについて行く、わしはこの時しらんかった……

真夏ちゃん言う拳銃が必要な意味を……

視点・「織斑一夏」

「弾幕薄いでえ！何やってんや！！」

「は、はい！」

俺は群がるゾンビをヒルズの二階からスナイパーライフルで狙い撃つ、

「クソ！クソ！なんで神室町の人達を撃たなきゃいけないんだ！」

「今はゾンビや、ためらうんやない！今は後ろにいる奴らを守る事だけ考えい！」

「っ――――……はい！」

俺は撃つ、後ろにいる人達を守る為に銃を握り、狙いを定め、引き金を引く……

まなちゃんが守った人達を守るんだ！絶対に突破させない！

パアァーンッ！

「助かったで一坊！」

「あまり前に出ないでください真島さん！」

「わしが前に出んで誰が出るんや！」

「真島さんがゾンビになったら誰が倒せるんですか！！」

「うひゃひゃひゃひゃ！そうやったわ！」

ホントに楽しそうにゾンビにショットガンをぶちまける真島さん、まなちゃんが出て言った後にそれを狙った様にまたゾンビの群れが押し寄せてくる。

（真島さんが奮闘してくれたお陰で前線が保たれているけど……このままじゃもたない！）

俺の他にも幹部の人達が援護しているけど、ほとんどが銃をあまり扱って無い人だから戦力は俺と真島さんの部下のまなちゃん親衛隊だけだ…後どのくらい持つか……

「親父！」

「！、不味い！」

真島さんがゾンビ達に囲まれている！助けないと！
俺はスコープを覗き、真島さんに群がるゾンビを撃とうとするが……

「駄目だ…俺の腕じゃ真島さんに当たる！」

「畜生！どうすれば！？」

こんな時にまなちゃんがいれば……！
その時、キュイーンやバチバチッと音が聞こえた。

「な、なんだこの音？」

「こ、この音は！」

そう言った瞬間ゾンビの群れの一部が吹っ飛び体を炎に包まれながら沈黙した。
真島さんの前に退路が広がった。

「なんだよ…これ？」

俺がゾンビを一瞬で半分まで減らした電撃に驚いていると、
聞きなれた声が聞こえる。

「だぁかぁらぁ！銃は必要やって言うたやん！」

「わかったわかった真夏ちゃんの言う通りやったって」

「わかりゃあええんや、ほないこか」

そう言ってゾンビが焼けで出来た煙から小さい影と大きな影が見えた。

「あ、あれって！」

「まなちゃん！冴島さんもいるぞぉ！！」

幹部の人達は歓喜の声を上げる、俺もいとこが無事でホッと胸を撫で下ろす。

「よお兄弟！なんや楽しんでるやないか！」

「キッヒヒヒヒヒ、まあなぁゾンビを撃てるなんて夢の様や！」

「まあ、夢だったらよかったんやけどな……」

「せやねぇ……ごーちゃん」

「んんぅ？なんや？」

「さっきの電話でした話……続きがあるからこいつらカタァつけたら……分かってはるな？」

「……はい」

こ、こえ～…一瞬まなちゃんの周りの空気が凍ったぞ！？何故かゾンビもまなちゃんから後ずさりしてるし……

「いっちゃ～ん！」

だが直ぐに顔を笑顔にして俺に向けて手をふるまなちゃん、癒されるぅ……

「一坊！無事やったんやなぁ！」

「はい！お陰さまで！冴島さんもお帰りなさい！無事で何よりです！」

「おおきになー！」

お礼を言って手を振ってる冴島さん、中国の商談が終わったんだ…
…あれ？早すぎじゃないか？

「……ま、まなちゃん！兄弟！再開は後にしい！こいつらを片付けるでえ！」

「そうやった、真夏ちゃん！やるで！」

「了解や！」

まなちゃんは巨大なコンセント見たいな銃をゾンビに向けてバチバチッと音が鳴った後、雷撃が放たれる。冴島さんは拳銃を撃って的確に頭を撃ち抜いて行く。真島さんは相変わらずショットガンをぶ

っ放していた。

「凄い…圧倒的だ！」

「親父ぃ！」

「いいぞー！」

幹部の人達も応援する中、まなちゃん達の戦いは一方的な戦いで終わった。

オマケ・「フルメタルジャケットとホローポイント……どっちで撃たれたいん？」

「はいはいいっちゃん怖かったなーもう大丈夫やでーウチがいるから安心しぃ……」

「うん……」

ウチとトラちゃんとごーちゃんでヒルズの外にいるゾンビを倒してヒルズに入り東城会の幹部の人達に喜ばれながらウチらがあるいているといっちゃんがウチの前に現れて泣きそうな顔でウチに抱きついてきたんや、少し驚きはったけどいっちゃんが少し泣いてはったからウチはいっちゃんの背中をポンポン叩いてあやしてるところや。

「外のゾンビはウチらが片付けたからもう安心や、せやからもう大丈夫やで？」

「……うん」

ウチはいっちゃんの頭を撫でて落ち着かせる。
やーん今のいっちゃんカワエエなぁ。

「一坊も苦労したんやなぁ……」

「せやねぇ……」ナデナデ

そんなウチらの光景を見ている幹部の人達もどこかほんわかな雰囲気になっていたんや。
そんな中、ケツを上げて倒れている人が約一名おった。

「……」チーン……

「お、親父…大丈夫ですか？」

「だ、駄目や…完全に落ちてる」

「こりゃ…復活するのに時間掛るんじゃねえか？」

「そりゃそうだろ、だって……」

ごーちゃんの部下の人達はごーちゃんの状態を声をそろえて言う。

「「「「ケツにネギをぶち込まれたらなぁ……」」」」

お尻を抑えながら部下の人達は言う、ごーちゃんがいっちゃんを泣かせたお仕置きでウチが服ひん剥いて刺した結果がこれや、ちなみにネギの先にはタバスコを付けてたのは内緒や。

「兄弟……哀れやなぁ…」

「確かネギをお尻に刺す治療法があった様な…」

「六代目、それは嘘ですから……」

ダイちゃんやトラちゃん、あずニャンもそう言いながらお尻を痛そうに擦る。

「いっちゃん…もう平気やから泣きやんで？な？」

「うん……」

ちなみに弾丸で言うならネギにタバスコを塗る方がホローポイント、ネギを奥深く突き刺すんわフルメタルジャケットや。アーマーピアッシングは……分かってるやろ？

十七話や！「トラの狩りが始まるでぇ！」（後書き）

真夏「いっちゃんが風邪ひいたらごーちゃんにやった治療法で治したるね♪」

一夏「い、いやいい！普通で頼む！」

大吾「あの治療法って為した事があるのか？」

冴島「確か…真夏ちゃんのお父さんに為したとか……」

安住「……ご愁傷様」

真島「ケツが……ケツが……」

作者「真島さん…お悔やみ…申し上げます」

十八話や！「東城会はホンマにええなぁ！」（前書き）

感想待ってま～す。

十八話や！「東城会はホンマにええなぁ！」

俺は金村興業若頭の城戸武だ。前は若衆だったんだが兄貴がムショに入って後また出て来て兄貴が組長に就任、俺が若頭として金村興業を動かしている。俺もムショに入っていたんだが何故か脱ｇ…出所して神室町にいる。
よくわからないが須藤とまなちゃんのお陰らしい……どうやって俺を出したんだ？
ちなみに兄貴の方は最初は出るのを断ったらしい、スジは通すって奴だな俺だって最初は断ったんだぜ？でもまなちゃんが……

『金村興業を守るんは二人しか出来へんで？たけちゃんと新井はんだからこその金村興業や♪』

俺はその願いを聞き入れて俺は若頭になった。まなちゃん…俺、頑張るよ……
まあそんな事があってここにいるんだが今の状況が最優先だ。俺は今まったく動けない状況にある。

「……（なんなんだよあの赤い目をしたゾンビは！？それに人食ってたしよ～……）」

と言う状況に陥っている、俺は興業の仕事が終わって神室町を歩いていたんだが突然周りから悲鳴が上がって人でごった返している神室町がさらに逃げる人で埋め尽くされて俺はもみくちゃにされたんだ。
そして人がいなくなった神室町になったいや……”人ならざる者”なら残っていた……

（何時までもドラムカンの中に隠れていられねえ……どうすれば…）

俺はすぐに隠れられる物に隠れ、状況を把握して逃げだそうと試みたがまわりにいるゾンビ？達が一向に消えねえから出るに出れなくなっている。くそ…早くどっか行ってくれ！

（なんで神室町にゾンビがいるんだよ、こんなのまなちゃんが見せてくれたゾンビ映画で沢山だ！）

そう愚痴って今の状況を打破すべく頭を使う、だがどうにもこんな状況がくるとは思わなくてまるで考えがつかない。ヤクザやチンピラ相手なら手立てはあるんだがこいつらは人間じゃねえ人を襲う可笑しな連中だ、さっき見たがあいつらに掴まれた人間は暴れて振りほどこうとして全然振りほどけなかったところを見ると奴らは相当の腕力があるらしい、その掴まれた奴は首を噛まれて奴らの仲間入りになっちまった。

（くそう…こんな時まなちゃんがいれば！）

癒され…じゃなくて何か思いつくんだが、てか五歳児に頼る俺って……

と、とにかく！ここから出て安全な所にいかねえと！

俺は意を決してドラムカンから出ようとしたが運悪く足が滑ってドラムカンの中に逆戻りして尻を打ちつけ角に鼻を強打したのち悶絶した。

「いってえええええっ！！！！」

声を上げて俺は痛みに耐える、その声に気づいたのか数人のゾンビがこちらにやってきた。

不味い！今の声を聞かれて寄ってきやがった！？早く逃げねえと奴らの仲間入りしちまう！

急いでドラムカンの中から出ようとしたが、アホか俺は……また足を滑らせてドラム缶に逆戻りしまたケツを打ちつけその拍子にドラムカンが倒れて目の前にゾンビ達があ”ー”あ”ー言いながら近づいてくる。

「よ、よるなショッカー！ぶっ飛ばすぞ！」

奴らにそう言っても聞かず、俺に近付き血だらけの口を大きく開けて迫ってくる、お、俺を食っても美味しく無いぞ！！てそんな事言ってる場合じゃない！どうするよ俺！？絶体絶命だぞ！？俺はドラムカンの中でもがいているとギシギシ音を立てていたドラムカンが動き出した。

ゴロッ

「へ？」

ゴロゴロッ！

「ちょ！うわ！待てって！！」

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！

「マジかよーーーーーーーーーーーー！！」

俺はドラムカンと共転がりだした、事もあろうにゾンビの方へとだ。

まてまてまてまて！！俺はまだ死にたくない！まだやり残したことがあるんだ！興業の事とかまなちゃんの事やまなちゃんの事やまなちゃんの事やまなちゃんの事やってまなちゃんしか思いつかねぇ！？と、とにかくまなちゃんにムショを出して貰った御礼がまだーーーーーー

「アッーーーーーーーーーーーーーー！！？？」

「あ”～～～～～～～～～～～～……」

俺とドラムカンは一直線にゾンビへと突撃し、食われるかと思ったがそうでもなかった。

ドラムカンはかなりの速度で転がっていたのか俺たちにぶつかったゾンビは車にはねられたよ様に吹っ飛び地面へと堕ちて動かなくなった、あれ？俺って助かったのか？ドラムカンと俺はそのままの速度を維持して次々とゾンビ達を引いては吹っ飛ばして沈黙させていった。そして最後に残ったゾンビを吹っ飛ばして俺の周りにいたゾンビ達はドラムカンと俺によって一掃された。俺は転がりながら考える。

「……た、助かった？」

ゾンビ達はいなくなり俺は生還した、こ、これがドラムカンの力か！！

す、すげぇ！何時も投げるか殴るしか使えないと思ってたのにこんな使い方があったなんて。

これなら今の神室町から脱出できる、俺はそう思い未だに転がるドラムカンの中で歓喜の声を上げる。

「ははははははっ！こいつは良い！これなら脱出も出来「ガンッ！」ぶべっ！？」

俺が喜んでいるとドラムカンがあろう事か壁にぶつかり俺はタイミング良く顔を壁に強打して動けないドラムカンの中で鼻血を垂らしながらまた悶絶する。いってぇ……ちくしょう一緒に回るから前が一瞬しか見えねえ…早くUターンしてここあらオサラバしねえと、そう言って俺は体を揺らしてドラムカンを動かして移動するだが目の前に待ち構えていたのかゾンビの群れがやって来た。

「あ”あ”あ”……」

「うあ”あ”あ”～…」

「あ”ー……」

「……へっ上等！」

今の俺とドラムカンに怖い物はねえ！行くぞ！！

「おらおらぁ！ドラムカンのお通りだ！！」

ドカドカドカドカドカッ！

「あ”ーーーーーー」

「い”ーーーーー」
「う”ーーーーー」
「え”ーーーーー」
「お”ーーーーー」

俺達の突進でゾンビ達はボウリングのピン見たいに跳ね飛ばされて行った。
何人こようが俺達の敵じゃねえ！どんどんこいやー！

ところ変わってここは神室町ヒルズ……そこで東城会四代目堂島大悟と安住、そして…なんとか復活した真島達が話していた。

「真島さん……今更だがアンタ、今まで何やってたんです？」

「あ”～尻がまだ……ん？なんや…また、お前かいな……安住」

「あんた警備担当だろうが！何人死んだと思ってんだ」

安住が怒鳴りながら真島に問い詰める、だが真島はどこ吹く風で。

「あ？わしのせい、言うんか？ドアホ、そら、お門違いやで」

「じゃ誰のせいだって言うんだ？あ？」

「そら、お前、ゾンビを送り込んで来た奴らやろ」

「てめぇ……おちょくってんのか！」

安住が真島に掴みかかろうとしたが真夏と六代目が仲裁に入る。

「よせ……そんな事してる場合か」

「あずニャン落ち着いてなぁ」

「し、しかし……」

「あ、安住さん、俺たちもここに来る途中ゾンビ達の襲撃にあって……」

「な、なに！？」

一夏はここまでの経緯を話す、それを聞いた安住はどうやらそっち

もそっちで大変だった事を知った。
安住はどこか腑に落ちない顔をする。

「ま、そう言うこっちゃ」

「そんな大事な事、どうしてあの時の電話で言わなかったんだ！？」

「あずニャン落ち着いて…今はごーちゃんといっちゃんの無事を喜んでほしいんや…ダメ？」

真夏は目をウルウルさせ安住を見る、安住はその目に耐えられないのか目をそらしながら言う。

「わ、わかった、わかったからそんな目で見ないでくれ……」

「おおきに♪あずにゃん！」

「だからあずニャンは止めてくれ…」

「……いろんな意味で、ご無事で何よりでした、真島さん」

「……六代目もや」

真島は尻を擦りながら言う、安住と六代目はあの時の光景を思い出したのかまた同じように尻をさすっていた。

「この一見で古参の幹部も半数近くやられました。まなちゃんのお陰で生き残りは大幅に増えましたが、今の東城会……いや、神室町その物が崩壊寸前です」

「見たいやなぁ……」

「それと、一つ気になる話が……」

「ん？」

「神室町中にある東城会系の組事務所、今回の襲撃はそこが発端になったようなんです」

「そういや…ウチが初めてゾンビにおうた時も、確かあそこの二階って組事務所やったなぁ……」

驚いて気づかなかったわぁと言ってうんうんと首を振る真夏、六代目は話を続ける。

「つまり……誰かが意図的に東城会を狙ったと」

「ああ、さっき二階堂とか言う小僧が挨拶にしてきたわ」

「俺も会いました」

真島と一夏が二階堂と言う男の話を聞いて安住は言う。

「決まりだ。今回の事件の首謀者は二階堂…。それにもしかしたら、誰かが奴のバックについてる可能性が高い…」

「しかし……狙いがウチとして、こいつはもう極道の抗争なんかじゃない。近江がここまでやるとは……」

「そんな悠長な事言ってられんでしょうが！」

安住が大きな声で言う。その言葉に皆が安住へと視線を集中する。

「すぐに報復の準備をするんです！」

「あずニャン……」

「安住さん……」

「極道が舐められたら、それこそ……！」

安住が喋っている途中で間島が安住の顎を掴み、喋れなくする。

「あがぁ！？」

「よう動く舌やなあ…どないな作りになっとんねん？、あぁ？」

「あ…あが！…あぐあぁ！」

安住は必死に離そうとするが真島の腕力に勝てずされつがままになっていた。

「もうすぐ夜やで…次のパーティの話はまだ早すぎとちゃうか？」

「……せやな…あずニャン、報復とか簡単に言うけどな…これはもう極道同士の抗争なんて簡単な話とちゃうねんで？これは…神室町全体を巻き込んだ、一大バイオテロや！」

真夏がそう言った後、真島は安住の顎から手を離して解放し店の窓際へと移動する。

「おう、お前ら！」

真島が大きな声でお客や避難してきた人達に聞こえる様に叫ぶ、

「死にとうなかったら店の棚を窓に寄せるんや！女子供は奥！食いもんと水は数揃えて配給制や！」

「あ！お年寄りは一番安全な場所に移ってや！元気な人は歩けん人を助けて上げて！」

真夏も指示をするだが避難してきた人はボーと立っているだけで何もしない。

「あ、あれ？」

「……さっさと動けやボケ！」

「「「「は、はい！」」」」

真島に怒鳴られ避難してきた人達が慌ただしく動く女性と子供は奥に、男達は水と食料を運んでくる。

「さすがやな、ごーちゃん」

「ハッ！当たり前や」

真島はそう言って窓の外へと視線を向ける、外はもう夕方になっていた。

「ウチはちょっとダイちゃんと話をしてくるやさかい、後は任せたで～」

「おう」

そう言って真島の元を離れ六代目の方へ走る真夏、この後真島は真夏意外の女の子と話して調子を狂わせらるのはまた別の話……

視点・「郷田真夏」

「ーーーーーーーーハッ！？いまさらやけど今たけちゃんが無双してるビジョンが！」

「うぅん……まなちゃん？」

「ああ！ゴメンないっちゃん、起こしてもうた？」

「ううん起きてたから平気だよ」

「さよか、ならもう夜やし寝ててや」

「まなちゃんは？」

「ウチはいっちゃんが寝たら寝るから、早よ寝なさい」

「うん……」

いっちゃんはまた瞳を閉じてウチの膝枕で寝る、今日はいっちゃんにかなり負担を掛けてもうたしなぁ……まあ五才のいっちゃんが経験する事やないんやけど…ウチらはヒルズに立てこもってから数時間、外は夜でいろいろダイちゃんやあずニャンのお願い聞いたりごーちゃんの猛烈な謝罪を聞いたりとちょっちウチも疲れてもうたしなぁ中に入ったゾンビを駆逐する為にウチといっちゃんがカップル役をやってゾンビをおびき寄せたりして大変やったわ…せやけどいっちゃんウチとカップル役をやってけれとダイちゃんに頼まれた時モロむっちゃ顔を赤くしてはったけど……どうかしたんかな？もしかして嫌やったんかなぁ……

「まあ…ゾンビをおびき寄せる餌になんて好き好んでやる人なんておらんわな……」

ウチは寝ているいっちゃんの頭を撫でて寝付かせる、ホンマ…お疲れ様や、いっちゃん……

撫でているといっちゃんから寝息が聞こえて来た。どうやらいっちゃんは寝てくれはった様や。

ほならウチもそろそろ寝るとしましょか、こことん所ゾンビ相手に立ちまわって疲れてもうたしお客や避難してきた人達のアフターケアに急がしはったからもう眠くて眠くて……

「ふあぁ…むにゅぅ…お休みいっちゃん…」

そう言ってウチはいっちゃんの耳に騒音防止様の耳せんを入れて膝枕したまま眠りに着いた、明日からまた忙しくなるでぇ……とそうは問屋が卸さへんのが世界の残酷なとこやなぁ…

「な、なんだありゃ!?」

「!」

「世界は何時やってこんな筈じゃ無い事ばかりや……」

外から車のクラクションが鳴る、ウチはいっちゃんの頭をそっと膝からどけて起こさん様に立ち上がり外を見る。外にはゾンビをふっ飛ばしながら二台のトラックがヒルズめがけて突っ込んでくる様子が覗えたんやてちょ!!あないなスピードで突っ込んだらヒルズのシャッターが!!

ドガーーーンッ!!!!

トラック二台はヒルズのシャッターに衝突、そしてトラックの荷台から東城会の極道と思われる人達が回りに集まって来たゾンビ達に一斉射撃を食らわせる。

「会長!ご無事で!?」

「もう大丈夫です!!」

トラックに乗って来た極道達はそう言ってはるが…アカン！射撃が下手すぎや！

「なんじゃこいつら！？」

「死ねぇ！！」

「バカな……これじゃ奴らが入って来ちまう」

あずにゃんがそう言って深刻そうに言う、トラックの衝撃でひしゃげシャッターに大穴があいてゾンビ達が入ってくる。

「おい不味いぞ！入って来ちまってる！」

「……仕事増やしてどうすんねん」

「真島さん……！」

「ククククッ…やっぱ東城会はアホばっかりや……大好きやで」

ごーちゃんはホンマに荒行大好きっ子やなあ…まあそこがごーちゃんらしいんやけど、

「同感です」ジャキッ！

「せやな」

ま！ウチらもそうなんやけど！ダイちゃんは散弾銃片手に一階へと下りて行った、ウチも続いて拳銃を持って行く。

「ん?真夏ちゃんあれはどうしたんや?」

「あれって?」

「ほら…なんやったかなぁ、あのビリビリやのうて…スタンガン見たいな奴」

「ああ~あれは今充電中で使えのや、せやからこれつこうてやらなあアカン。まあこれだけでもやれへん事は無いんやけどな」

「さよか」

ウチはごーちゃんと話終えて下に行く、クッ!もうしたは占領されてるんか!!しゃあない…的確にドたま撃ち抜いたるわ!

「悪いんやけどもういっぺん死んどけ!!」

ヒルズでの第二回攻防戦が始まりよった……

オマケ・天啓（テンケイ）・「サンドコンボの極み」

ウチ（今は十五歳♪）は神室町を歩いているとバイクに乗って騒いでいるカップルを見つける。

「ん？あれは……」

「マサ！早く行こうよ！」

「おう！飛ばして行くぜ！」

バイクを唸らせ、走ろうとした矢先、

ツルッ

「あ」

運転手の男の指がバイクのブレーキから滑らせ、バイクは急発進する。

「のおおおおおおっ！！？？」

「きゃあああああああっ！！？？」

そしてバイクは前輪を上げて持ち上がり、二人とバイクは一回転し

た後……
男は地面と後ろにしがみ付いていたヘルメットの女性に挟まれる様にノーヘルの男の頭部に直撃し……

「ガハッ！」

男は落ちた。

「……！、ヒラメイカ！」

真夏は木のまな板を取り出し、そこに、

「フンッ！！」

ドンッ！と粘土を乗せてこねる。

「フッ！ホッ！ヤアッ！」

粘土を捏ねてどんどん形を作り上げる。そして！

『天啓が－－－－－！』

ラブシャインの粘土が出来上がった。

「……むうっアカ～ン」

ポイッとその粘土模型を投げ捨てる真夏、天啓失敗！

テイク２

「閃いた！」

またまな板と粘土を取り出してこねあげる真夏、

「……我、天啓を得るや！」

そう言って天高く出来あがった技の粘土模型を掲げる真夏、思いついた天啓は……

相手に突撃し、頭を掴んで膝打ちをした後にそのまま後ろに落とし地面へと相手の頭を膝で叩きつけるサンドコンボの極みが生まれた。

「……あれ？ウチは誰にこの技を使えばええんや？」

神室町のアイドルになっている真夏に、チンピラや極道達は喧嘩売りにくるどころか普通にアイドル目当てで近づいてくるだけであり喧嘩に発展しないのである。

「意味無いやん！！」

天啓、ある意味失敗！！

十八話や！「東城会はホンマにええなぁ！」（後書き）

真夏「アカン…ウチ天啓得ても誰に使えば……」

一夏「そ、そのうち見つかるよ（願わくば、一生出てこないでくれ！）」

真夏「実際やって見たいんやけどなぁ……」チラッと一夏を見る

一夏「へ！？お、俺は無理だよ！？」

真夏「えぇ～……ケチ」

一夏「ケチの問題じゃないよ……」

作者「なんて言うか…皆さんの技ってえげつない物ばかりですよね…なんででしょう？」

十九話「ごーちゃんばっかりズルイ！」（前書き）

真夏「ゆーちゃんの小説まだかなぁ…早よ見たいわぁ…」
一夏「そう直ぐにアイディアが出る訳無いだろ？」
ＤＤ「作者の最新速度が異常なだけだよ」
二階堂「せやな」
作者「ここぞって時に出ますね…お二人さん」

十九話「ごーちゃんばっかりズルイ！」

「どうなってんじゃこりゃあ？」

わしは真夏ちゃんに頼まれて近くのポッポ店へと足りない物を調達しに行ってたんやけど……

「なんで真夏ちゃんと兄弟が戦ってんねん？」

「おー！トラちゃんお帰り！」

「よお兄弟！もうパーティーは始まってるでえ！」

パーティーって…んな呑気な事言っとる場合か！

わしは両手に持ったポッポ店のビニール袋を捨てて拳銃（六代目から貸して貰ったんや）を取り出し兄弟達に加勢する。

「真夏ちゃん、ヒルズにいる人達は無事なんか？」

「平気や、下の奴らはウチが片付けたしいっちゃんも今頃寝てるはずや後はこいつらの注意を引いてバリケード作りの形成の時間を稼ぐだけや」

「さよか」

ほんなら…こいつらを成仏させなアカンな、

わしはまた人殺さなアカンのか……

その時不意に手に柔らかい感触が伝わりわしは下を向くと、

「真夏ちゃん？」

「トラちゃん平気か？」

真夏ちゃんがわしの手を握って心配そうな顔を浮かべる、

……ふう、五歳児に心配されるとは、わしも年を取ったかのお。

「平気や真夏ちゃん」

「でも……」

「今回は多くの命が掛っとる…せやから、わしらが皆を守らなアカン」

「トラちゃん……」

そや、今わしは命を守る為に銃を握っとる。六代目、幹部達、兄弟、そして真夏ちゃん、

「迷わへんよ、笹井の親父から仁義と覚悟をもろうてるからな」

「……さよか、なら…派手に行くでぇ！！」

真夏ちゃんは掛け出し近くにいるゾンビを確実に倒して行く、真夏ちゃんってホンマに五歳児なん？

と言うかなんでこないにいんねん？まさか奴らはワシらの匂いや音を感じてこっちに来たんやろか……

「アカン…考えても答えが出えへん」

今は考えてる暇はなさそうやな…とにかくヒルズの周りのゾンビ共を蹴散らさなあ。
わしは再度拳銃を奴らに向けて撃つ、二十六年前の事件を思い出しそうになりそうやけど…今のわしにはへでもあらへん！

「守るもんが多すぎるからのう！」

「うひゃひゃひゃひゃ！ええのう、兄弟と背中合わせて戦えるなんて夢の様や！！」

わしは兄弟と背中を合わせゾンビ達を一掃する。今度は後悔の残らない戦いにする！絶対や！！

視点・「織斑千冬」

「遅い……」

一夏はいったい何をやっているのだ！姉を心配させて！真夏のところに行くと言ったきり帰ってこない。
私は心配になって電話をかけてみたが一向に繋がらず、真夏にも電話はして見たが圏外だった。
まったく、この頃の子供はキャバクラやホストクラブに出入りしすぎだ！
だが私が怒っても一夏が帰ってる訳でも無くとりあえず真夏の父親である龍司さんに携帯を掛けた。

「……もしもし、織斑です」

『千冬嬢ちゃんか』

うむ、龍司さんには繋がった様だ。よかった……私は一夏がそっちに行って無いかを聞く、

「龍司さん、一夏がそっちに行ってませんか？」

『なんや帰っとらんのか？』

「はい、そちらで遊んでいるかと思いまして……」

『こっちには来てへんなぁ…わしも真夏を探しに神室町へ来とるんやけど…なんや警察の検問やとかで行けへんのや』

「検問？」

神室町で何かあったと言う事か…また真夏と一緒に厄事に巻き込まれなきゃいいが……

『よう分からんけど、神室町にゾンビが現れたっちゅう話や』

「ぞ、ゾンビ？」

『せや、ゾンビや』

龍司さん、からかっているのだろうか？……いやあの人がからかうとか想像出来ない、というよりかしないと思う。それじゃあ本当なのだろうか？まああのウサビッチならゾンビを作れそうだが……

（アイツがそんな事はしない…一体誰がゾンビを？」

『どうかしたんか？嬢ちゃん』

「ああいえ、なんでもありません…それで、検問で神室町に行けないと？」

『そうなんや、しかたあらへんからコイツつこう思うてんのやけど……』

電話越しからキュイーンとかガシャガシャと何かが変形する音がする……まさか！！

「り、龍司さん！いくらなんでもそれは……」

『でものう…真夏や一坊が向こうにいるかもしれへんし…』

「わ、私も向かいますからそこで待っていただけますか？」

『嬢ちゃんもくるんか？』

「はい、一夏が心配ですので」

『わかったで待っとるわ』

「お願いします」

そう言って私は携帯を切り、急いで仕度をする。とりあえず木刀とかを持っていこう後両親に――――

「……いやこの頃帰って来てないから言う必要はないか」

私と一夏の両親は家にはあまり帰ってこない、音信不通も珍しくは無いのだ。

「頼りになるのは私だけか……」

大事な時に両親は一体何を！

だが私は、この後両親が二度と帰ってこないとは思いもしなかった……

「ううん…あれ？まなちゃん」

寝ていた一夏は起き上がり、周りを見渡すと避難してきた人は皆窓際へと移動していた。

「？、何かあったのか？」

一夏は起き上がり皆が見ている物を確認する為、窓の外を見て見ると……」

ピンッ！ポイッ……ドゴオオオンッ！！！

「んな！？」

真夏と真島、そしていつの間にか帰って来た冴島がゾンビ達と戦っていた。

ちなみに今の手榴弾を投げたのは真夏である。

「ど、どういう事だ？どうしてまなちゃん達が！？」

一夏は混乱していた、少したってやっと正気を取り戻しライフルを担ぎ急いで一階へと下りる。

「まなちゃんどうして起こしてくれなかったんだ！」

走りながらも愚痴る一夏、そして一階に着き出口へと向かうと東城会の幹部らが急いでバリケードを築きあげていた。

「大吾さん！」

「！、一夏君、起きたのか」

「はい、これはいったい？」

「悪いね…仲間がはしゃぎすぎちゃって」

「……あ～、納得です」

一夏は苦笑いする、六代目と話していると幹部の一人が叫ぶ、

「六代目！バリケードが完成しました！」

「御苦労！皆はバリケードを守ってくれ、私はまなちゃん達の所に行く」

「で、でも！ゾンビの数が多すぎて……」

「心配するな、生きて帰る」

「六代目……お気をつけて！」

そう言って幹部は頭を下げ部下を連れてバリケードの道を開ける。

「大吾さん、お供します！」

「一夏君？」

「まなちゃん達が戦ってるんです！一人だけ何もしないのは嫌なんです！」

「……俺の側から離れるなよ？」

「はい！」

一夏は六代目と共にバリケードを越え、戦場へと向かった……

視点・「真島吾朗」

「クソが！」

わしは噛んできた老ゾンビの頭を殴り吹き飛ばす、クソ！噛まれて

しもうた！

「どないしたごーちゃん！？」

「！、な、なんでもあらへん！気にすんなや！」

「で、でも……」

「！、真夏ちゃん後ろや！！」

「へ！？」

真夏ちゃんが振り向いた時には遅かった、ゾンビはもう真夏の目と鼻の先まで飛び込んでいてわしのショットガンじゃ真夏ちゃんまで吹き飛ばしてまう、とその時じゃった。

ズガンッ！！

銃声が響き、真夏ちゃんの目と鼻の先にいたゾンビは頭を撃ち抜かれて吹き飛ばされおった。こいつは……

「兄弟後ろじゃ！！」

「！？」

わしが考えているとわしの後ろからも飛びかかってくるゾンビが現れるじゃがその時も誰かがゾンビを撃って危機は回避されたんじゃ、

「真島さん、三人でおいしいとこ持っていく気で？」

「まなちゃん平気！？」

そう言ってこちらに来たのは六代目と一坊やった、へっ！このぐらい朝飯前や！いや今は夜やから夜飯前か？

「ハッ！なんや今頃気づいたたんかい？」

六代目はわしの背中に回りバリケードの形成は完了した言った、ほならこれぐらいでお開きにしよか……

「六代目死なわけにはいかへんしなぁ…真夏ちゃん！兄弟！六代目と一坊を連れて離脱するでえ！」

「「おう！」」

「！、あれって……」

一坊が何かに気づく、それはゾンビの奥のマンホールからライトの光をわしらに当てて何かを合図している様やった。

「真島さん」

「ああ…野郎ども着いてきい！」

わしは六代目と兄弟、そして真夏ちゃんと一坊を連れて光を当ててくるマンホールの男の元に走るが……

「な、なんだコイツ！？」

「い、今見えなくなったで！？」

「光の屈折を利用して消えてる？いや反射を利用してはるんかな？」

なんや消えたり出てきたりする奴がわしらの前に出て来よったわ、なんやアレって真夏ちゃんに貸してもろうたゲームの化けモンに似とるなぁ。確か…リッコーとか言うたか？なんや女の名前見たいな名前やな、まあええわおもろい奴がまぁた出寄ったんやから！

「ええでええでぇ、ちょうど食い足りんかったんや」

「俺もそう思ったてたところです」

「上に同じくや」

「わしもや」

「もう勘弁して……」

一坊は根性が無いのう、まあしゃあないか…さてコイツの相手は……

「六代目、兄弟、真夏ちゃん、一坊！ザコどもは任せたでぇ！」

「真島さん、また良いとこどりだ！」

「ホンマずりぃわ！」

「貸し一つやで！」

「またこんな人数を相手に!?」

わしはザコども六代目達に押し付けて化けモンを対峙する、ガッカリさせんでくれや?行くで!

オマケ・「使いたくないわぁ…この極み…の巻!」

「ん?あれは……」

ウチの向こうにヤクザがひ弱そうな青年を追い詰めていた。

「おいこら…ぶつかっといて詫びも無しかああ!?」

「ひいぃ!?す、すいません!!」

青年は必至にヤクザに謝まっとるが、ヤクザは許そうとはせず青年を壁際で挟むあないに謝っとるのになんて血も涙も無いやっちゃ!

「どうやら痛め付けねえと反省しねえようだなぁ……」

「ご、ごめんなさい！許してくださいぃ！！」

そしてヤクザが殴りかかる。

「ひ、ヒイイイイィッ！！？？」

青年は頭を抱えて伏せた後ヤクザの拳は空を切りそのまま拳を壁に打ち付けてるぅ。

「イッテエッ！？」

そして痛がるヤクザに急にヤクザの悲鳴が聞こえた青年は顔を上げて驚いくとちょうどその頭が……察してなぁ……まあヤクザの息子に当たったんよお、

「ハウッ！？」

ヤクザはその痛さに飛び上がり上に設置してあった店の看板に……

「ひでぶっ！！」

頭をぶつけ、気を失った。

「……！、閃いた！」

またウチはまな板を取り出しそこに粘土を置いて捏ねて造形する。

「んしょっ…んしょっ……」

そしてどんどん形作られはった。

『天啓が……来た！』

そして出来あがった模型を片手に持ち天高く掲げ満足する、う～んええ感じや！

ウチが編み出した天啓……それは相手をしかけさせ来た所で腹に一発与えた後に……息子を掴みそのまま持ち上げて天井か上に設置されとる看板へと叩き上げる天上頭突きの極み、我、天啓を得るや！

「……ウチぃ…掴めるんかなぁ…」

お、おとんのは見た事あるんやけど…む、難しいで……

「あんま使いたく無いわぁ……」

自分で作っといてなんやけど……

オマケ・「真夏のオリジナル古技流」

「死にさらせえぇ！！！！」

レディースの一人が真夏に木刀を上から下へと振り下げ真夏へと切りかかる、そして真夏は二つの警棒でそれ下へと受け流し木刀を地面へと突き刺せた後その木刀に乗りレディースの後ろへ飛ぶと、

「はああっ！！」

真夏は飛ぶ力を利用し警棒で身を回転させながら連続打ちをする。

「グハァァッ！！？？」

レディースの女は回転の乗った連続打撃で背中を強打され地面へと沈む、

これぞ相手の攻撃を防ぎ後ろに飛び回り回転切りを放つ技、自速天回切り！

十九話「ごーちゃんばっかりズルイ！」（後書き）

真夏「ごーちゃんはホンマに良い所取りやなぁ…お仕置きや必要かもしれへん」

真島「！！？？」

大吾「あ、あの真島さんが！？」

冴島「ごっつ震えとる！？（兄弟…そないに怖いんか…）」

千冬「私は龍司さんと行動するのか？」

作者「どうでしょう？ストーリーの進行状無理かｎ、あ、待って千冬さん！古技流は止めｔ「ズバッ！！！」……」

龍司「死によったな…アレは…」

二十話や！「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」（前書き）

遅くなりました。すんません！

二十話や！「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」

「全然減らへんなぁ…神室町に人ってこんなんおったっけ？」

そう言いながら大吾から受け取ったグレネードランチャー（火炎弾）を再装填し、ゾンビが密集している辺りに発射してゾンビの大軍を焼き払う真夏と。

「昨日は開催セレモニーとかでお客や見学者が多かったからな、他の町から来た人達とかが多いんだろう」

真夏に話しかけながらワンショットでゾンビをツーキルする一夏、

「食らえぇ！！」

冴島は雄叫びを上げながらバイクを振り回してゾンビを蹴散らして行き、

「こんな大事な日に大事件が起こるなんて！！」

散弾銃をぶちまけながら愚痴る堂島、この四人は真島が化物アラハバキを倒すまでの時間稼ぎをしていた。

「う～んもうそろそろごーちゃんが片付け終わってるはずなんやけど……」

真夏はチラッと苦戦しているであろう真島が戦っているだろう場所に目を移す、

「キッヒヒヒヒヒヒッ！！また消えたで！ホンマおもろいやっちゃ！！」

案外、いや逆にイキイキと化物と戦っていた、真夏は羨ましそうに溜息をつく。

「あっちに入りたかったわぁ……」

「あんなのと戦うなんて洒落にならないからな？まなちゃん」

「とりあえずこっちを片付けないと……」

「死にさらせえぇ！！！！」

冴島の投げたバイクがゾンビ共を蹴散らし、その衝撃でバイクに引火して大爆発を起こす。

「豪快やなあトラちゃん」

「ホントだな、てどんどん増えて無ないか！？」

「外のシャッターが壊れたままなんだ。だからいくら倒しても湧いてくるってことか」

「そうらしいなぁ……「ギシャアアアアアアアアアアッ！！！！」ん？」

真夏は甲高い音を聞いて真島が戦っている方へと視線を向けると…

「なんやもう終わりかいな…あっけないやっちゃ」

真島が化物を倒し、つまんなそうにして倒れている化物を見ていた。
大吾もそれに気づき真夏達にさっきマンホールからライトを照らしていた人物の方へと向かうよう指示する。

「皆！真島さんが奴を倒した！向かうぞ！！」

「はい！」

「はいなー！トラちゃ～ん終わりやで～！」

「おう！」

大吾は皆を連れてマンホールへと向かう途中真島と合流してマンホールへと向かうのだが……

「グ、グルルルル……」

「！？、コイツまだ生きて――――――」

一夏が気づいてライフルを向けるがそれより先に真島に飛びかかろうとするアラハバキが真島に強襲した。

「死んだふりかいな！」

「兄弟！！」

「真島さん」

皆が銃を向けるが真島とアラハバキの距離はもうほとんど無く、真島はアラハバキに銃口を向けるが間に合わない。その時……

「させへんで！！」

あろうことか真夏がアラハバキの背中に飛びかかりそれに驚いたアラハバキは急停止した後背中にひっついている真夏を体をゆすって振り落とそうとする。

「まなちゃん！！」

「なんちゅう無茶を！！」

「まなちゃん！！」

「くそ！わしの銃じゃ真夏ちゃんも撃ってまう！」

真夏は必死に離さんし、アラハバキは飛び跳ねてヒルズの外へと向かってしまう。

一夏達は撃てないままアラハバキと真夏が外に出て行くのを黙って見ているしかなかった。

「まなちゃん！！」

一夏は追いかけようとするが真島がそれと止め、一夏を腰で抱きかかえながらマンホールへと向かう。

「離してください！！」

「ドアホ！今の状況じゃあわしらも危ないんじゃ！」

「この人数を相手に戦えない！一旦引かなくては！」

「でも！！」

「一坊！真夏ちゃんならまだ生きとる！今はここから逃げるんだ！！」

そう言って大吾達は一夏をおぶってマンホールの穴の中に入り難を逃れた、一夏は真夏の名前をアラハバキと外に飛び出した空へと呼び続けた……

視点・「郷田真夏」

「ちょ！？これきつい！！」

ウチはごーちゃんを守る為にアラハバキに飛びかかり守ったはええんやけど今は化物でロデオをしてるところや。

「うお！ちょ！暴れ！ん！なぁ！！」

背中に乗っとるウチを振りおとそうとする化物にウチは沸々といらつく。

「ああもう！！大人しくせい！！」クルクルチャキッ！

ウチは腰からバタフライナイフを出して化物の頭めがけて……

「チェストローイ！！」

サクッ

「！？、ギシャアアアアアアアアアッ！！！！」

化物のドたまにナイフを突き立て化物を苦しむ、どや！ゲイちゃんに教えてもろうたナイフ裁きを！

そして化物は前のめりに倒れ、ウチは投げ出される様に地面を転がる。

「プギャッ！？……いっつぅ…」

う～…膝擦り剥いてもうた…もう暴れん坊は将軍だけで結構や！

ウチは立ち上がり化物が息絶えた確認した後にナイフを抜いて腰にしまう。

「ヒルズから出てもうたなぁ…今戻っても皆おらへんやろうし、どないしよう？」

ウチはとりあえず化物が七福パークまで来てもうたからこのまま隔離エリアから出る事にした。

「ついてないでぇ…ホンマ」

そう言ってもしかたあらへんけど、ウチは隔離エリアから出て行った。

「はあ…外は平和やなぁ…さて、ホンマにどないしよう」

ヒルズの戻っても中に立てこもってる人しかおらへんし、戻ろう思うてもあの数のゾンビを相手にするんわきっついで……

「……そや！さっきマンホールから顔を出していた人って賽の河原のホームレスの人やん！」

それやったら確かいっちゃんとよく昼間遊ぶ児童公園から行けるはずや！

ウチは直ぐに目的地に向かう為、走り出す。

「確か合言葉いらへん言うてたなサイのおっちゃん」

なんでウチだけいらへんのやろ？もしかして子供だから覚えられへん思うたんかな……

（むう…なんや子供扱いされた気分や…）

ま、ウチはまだ子供なんやけどな！

ウチは千両通り北から泰平通り東に行き、その後ピンク通り北へ進

んで七福通り東を抜ける。

「空は真っ暗やなぁ…早よいかな！」

七福通り西に辿りついたウチは児童公園へ足を運ぶ、

「このマンホールやったな……」

ウチは公園にあるマンホールへ近づきノックする。
少したってからマンホールから声が聞こえた。

「誰だ？」

「ウチやウチ、真夏やで」

「ん？まなちゃんか……ちょっと待ってろ」

そう言ってマンホールの蓋が開けられ、中からホームレスの男の人が出て来た。

「福山さんか、中に入ってええか？」

「ああいいぞ旦那もまなちゃんを心配してたぜ？」

「心配かけてえろうすんませんなぁ…」

「いいってほら、早く入った入った」

「お邪魔しま～す」

ウチは中に手招きをされ中に入り、蓋を閉めた。
賽の河原へ行くのは久しぶりやなぁ、ディーラーやったんは何時ごろやろ？

視点・「織斑一夏」

俺は大吾さん達に連れられここ賽の河原に着いた、道の途中でかなりのゾンビ達がいたけど何とか切り抜けてここまで辿りついた。だけど俺は……

「まなちゃん……」

「一夏君……」

「一坊…」

「……」

冴島さんと大吾さんが床で項垂れている俺を元気づけようとしてくれているけど、俺はまなちゃんを置いて逃げてしまった事を酷く悔んでいた。

「おい、一坊何時までもクヨクヨせんとらんとしゃきっとせなあ」

「でも……」

「真島さん、一夏君はまだ子供です…」

「兄弟…一坊にはまだショッキングな出来事やったんや、そないに急がんでもええんやないか？」

「せやけどなぁ……」

「……いかなきゃ」

俺は立てかけてあったライフルを手に取り立ち上がる。

「一夏君？」

「一坊？」

「どないしたんや？」

「……まなちゃんを迎えに行きます」

俺は歩きだし、来た道を戻る。

「い、一坊!?向かえにって、アホか!一人で行く気か!?」

「はい」

「無茶や!」

「一夏君!止めるんだ!」

「だからってここで悔んでても無意味です…それに」

「それに?」

「まなちゃんを守るって約束したんです!!」

「一夏君……冴島さん」

「な、なんですか?」

「一夏君の護衛を…お願いします」

「六代目……」

「大吾さん?」

大吾さんはふうぅと息を吐き仕方ないと言う表情で俺に言う。

「もし一夏君にもしもの事があったらまなちゃんに顔向けできないからね……」

「大吾さん……」

「フッ…せやな」

「そやなぁ…」

皆もそれもそうだなって顔をしている、そして冴島さんが俺に近付いてきて。

「ほな、いこか？一坊」

「……はい！」

俺と冴島さんは歩き出す、まなちゃんを救う為に……

「行きおったな……」

「ええ…まったく、強い子です。一夏君は……」

真島と大吾は一夏達の後ろ姿を見ながら感想を吹く、

「せやなぁ…もう見えへんとこまで走って行ってもうたわ…」

「そうですねぇ…」

「せやなぁ……」

「「……んぅ？」」

真島と大吾は声が聞こえた後ろ下を見ると……

「……な、なんでここにおんねん…」

「なんでって…ここに皆いるう思うてきたんやけど？」

「ぶ、無事だったのかい？」

「当たり前や、ウチが死ぬう思うたんか？」

真夏はさも当然と言うよう感じでその場にいた、大吾と真島はこればかりは驚く。

「……そうだね」

「全然想像も出来へんわ……」

あの化物と一緒に外に飛び出したのに平気な顔してそこにいるのだ

からもう異常である。
そして大吾が急に思いだした様に声を出す。

「そ、そうだ！一夏君！一夏君達を呼び戻さないと！」

「せ、せやけど、もう外の入り口近くまで来てる頃やで？」

「？、なんやなんか買い物に行ったんやないの？」

「君を向かえにいったんだよ！！」
「お前を迎えにいったんや！！」

と突っ込みを入れる真島と大吾であった……

オマケ・「その頃城戸ちゃんは……」

「気持ちワリィ……」

城戸はドラムカンで無双し続けること早三十分……冴島とやり合った男でも高速回転し続けるドラムカンでも限界があったようだ。

「クソッ…もういいっての！ドラムカンの凄さは分かったから早く抜けてくれ！」

そう言ってモゾモゾ動くか全然抜ける気配が無い事にイラつき、暴れても見るもビクともしない。

「この！抜けろ！抜けてくれ！抜けろやこら！」

さらに体を揺さぶるが抜けない、どうしようかと考えていると声を掛けられる。

「何してるんだ？お前……」

「あぁ？…て、兄貴！？」

「おう」

そこには金村興業の組長、新井がいた。

「お前町中で何ドラムカンに入って遊んでいるんだ？」

「え、え～と…ゾンビがいて…」

「ゾンビ？何処にいるんだ…」

「い、いや直ぐそこに…あれ？」

城戸は辺りを見回すと見慣れた平和な神室町が映る。

「あ、あれ？ゾンビは？破壊されてる筈じゃ……」

「何を寝ぼけているんだお前は…行くぞ仕事だ」

そう言って新井は城戸の首根っこを持ち上げてドラムカン事引きずる。

「ちょ！？あ、兄貴！止めてくれ！そのまま引きずらないで！上半身と下半身がお別れしちまう！」

「こっちは忙しいんだ、遊んでいる暇はないぞ？」

「い、行きます！行きますからは、離し！あ…アッーーーーーーー！！！」

城戸は新井に引きづられ、ドラムカンには下半身を持っていかれそうになりながら金村興業に向かったとさ……

二十話や！「サイのおっちゃんってどこからネタ仕入れてんやろ？」（後書き）

千冬「これがすれ違いか……」

龍司「一夏も運がないのう」

作者「千冬の姉さんも運が無い様に思えます……」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（前書き）

真夏「オーズさんのゆーちゃん女装、めっちゃよかったわ！やっぱケッk「バキッ！」ごふぅ！」

箒「しつこい！」

一夏「……」

龍也「まあ…頑張れ」ぽんぽんと手を肩に乗せる。

作者「男の娘は正義です。はい！」

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」

一夏と冴島が賽の河原を出て行ってから数分が経った頃に真夏が無事帰還、
冴島と大吾が一夏達に連絡を取ろうとするも県外であり真夏の無事を伝える事が出来なかった。

「しゃあない、とりあえず今は花屋に会いに行こうや」

「そうですね……」

「なんかホンマすんません…」

いいってと言いながら大吾達は歩を進める、そして一番大きい屋敷に入っていった。

「花屋のおっちゃんの家ってホンマデカイわぁ…」

「せやなぁ…無駄にするんわ脂肪だけにしてほしいわ」

「真島さん…」

三人が話しながら扉を開けるとお辞儀をしている女性が目の前に現れる。
大吾はその女性を見て驚く、

「！あなたは、確か峯の秘書だった…」

「片瀬のおばちゃん！！」

ズルッと片瀬と言う女性はズッコケた。
気のせいだろうかこめかみに青筋が出来ている。

「わ、私はまだ――――！」

「あー、そう言うんは後にしてくれへんか？だーれもアンタの年齢聞いとらんし、さっさと花屋に案内してや」

「っ――――、わかり、ました……」

片瀬はプルプル震えながらも仕事を全うしようとおしこらえた、そして真夏は大吾に耳打ちする。

『あのおばちゃん、ここで働いてたんやな。しらんかったわ」

『よく出入りしてたんじゃ？』

『何時もおっちゃんが一人で会いに来てくれはったから気づかんかったわ』

『そうなんだ…それとまなちゃん』

『？、なんや』

『あの人はまだ若いと思うからおばちゃんは不味いと思うよ？』

『どういうこっちゃ？』

『……とりあえずそれは禁句ね？おばちゃんに見えても言っちゃダ

メだよ？』

大吾がそう言った瞬間、前から強烈な殺気を感じ大吾は背筋を凍らせる。

よく見ると片瀬が血走った目で大吾を見ていた。大吾は命の危険を感じ目をそらした。

「地獄耳やな」

「そ、そうですね……」

大吾は小さくなった、そして立派な机があるところまで案内されると突然大吾達と共に床が下がっていく。

「これぞ秘密基地、やな」

「ホンマに手が込んでるで……」

「あははは…」

そして下に着くと大吾の目に複数のモニターが見える。

「こいつは……」

そうして驚いていると真島と真夏は椅子に座ってモニターを見ている男に話しかける。

「久しぶりやな……花屋」

そう言うと椅子に座っている男がフンッと鼻を鳴らす、

「お久しぶりです花屋さん…ゆっくり挨拶したいところですが……」

「そうも言ってられん状況ですな」

そう言って花屋は振り向く、その時真夏が走り出し。

「おっちゃ～ん！」

ボヨヨ～ンッ

「おっと」

花屋のお腹に抱きついた。

「お久しぶりや！」

「ああ、真夏も無事だったか」

花屋は自分の腹に乗って来た真夏の頭を撫でる。

「えへへ～♪」

「……」ピキピキッ

「ま、真島さん、こらえて……」

花屋は一通り真夏の頭を撫でると真剣な顔をして大吾に話す、

「さて、真夏…少し六代目と話があるから席を外してくれ」

「え〜？ウチ抜きでー？」

「すぐに終わる、ホームレスの奴らに無事な姿を見せてやれ」

「はぁ〜い」

そう言われた真夏は花屋の腹から下りて上の階へと行った。

視点・「郷田真夏」

「ホームレスの皆はんは無事かな？」

そう言いながら外に出ようとすると後ろから呼びとめられた。

「まなちゃん」

「んあ？」

ウチの名前を呼ばれて振りむくと……

「駿ちゃん？」

「無事だったんだね？よかった…」

駿ちゃんがそこにいた。え？なんでここに？いやそれよりも！

「し、駿ちゃ～ん！無事やったんやな～！」

そう言ってウチは駿ちゃん目がけて走りだす、駿ちゃんは両手を広げて笑顔で待っている駿ちゃんを……

「死にさらせえええええええぇ！！」

「え”……」

ドゴオオオオンッ！！

「ごふあああああああっ！！？？」

ウチはしゃがんだ体勢の駿ちゃんの顔面にとび蹴りを炸裂させた。

蹴られた駿ちゃんは何回かバウンドした後に大の字になって地面とキスした。

「なんでウチを置いてったぁ!?」

「おおおおおおぉ……」

駿ちゃんは蹴られた顔面と打った体の激痛で喋れへん様やった、せやけどウチはまくしたてる。

「応えんかい!!」

「む…むちゃくちゃだ…」

「あ”あ”!?ウチは駿ちゃんの心配聞いとるんや無いんや!なんでウチをおいてったんや!?」

「そ、それは危ないからで……」

「ウチを心配してくれはるんわかるけど、だからって勝手はいやや!」

「ご、ごめん……」

駿ちゃんは鼻血を出しながら謝る、う~ん…ちょっちやりすぎてもうたなぁ…

「あ~血ぃ出てもうた?堪忍や…」

ウチはポケットからハンカチを取り出して駿ちゃんの鼻に当てる、あ、アカン!直ぐにハンカチがバラ色に!

「ど、どないしよう、止まってくれへん！」

「だ、大丈夫だよ、直ぐに止まるから」

「で、でもぉ…」

ウチは涙目になりながら駿ちゃんの鼻血を懸命に止めようとするも、全然止まってくれへん……

「直ぐに収まるさ、だから平気だよ」

「ううぅ…ホンマにゴメンな？駿ちゃん」

「！、だ、大丈夫だって！な？」

「…うん…」

「……そ、そうだ！お詫びにバッティングセンターに連れてってあげるよ！」

「バッティングセンターに？」

「そ、後で真島さんも誘おうと思うんだけど、いいかな？」

「うん、ええよでもなんで急に？」

「う～んちょっと面白い事がありそうだから、かな？」

「ふ～んわかったで！それで何時行くんや？」

「真島さんが来たら直ぐに」

「わかったえ」

駿ちゃんは立ち上がりスーツを整える、せやけど……

「駿ちゃん……」

「ん？なんだい」

「スーツ…血だらけに…」

ウチが顔面蹴ったせいで鼻血を拭きながら倒れたせいでスプラッターな格好になってもうた。

「……まあ、平気さ」

「見る人は平気や無いって……」

ところ変わってここはヒルズ内の避難している人達がいる所……

「俺と同じくらいの女の子見ませんでしたか！？」

「い、いや見て無いな」

「そう、ですか……」

「一坊…真夏ちゃんは大丈夫なんやないか？あの子の事やからひょっこり帰ってくるんやないのか？」

「で、でも……」

一夏は真夏が心配らしく、まだ探していた。真夏の使っていた武器は見つかったが真夏本人は見つかってはいなかった。ちなみに一夏が真夏の武器を預かっている。

冴島はかなりの時間ヒルズの周りや中を見回って少し疲れていた。

「とりあえず今は帰ろうや、兄弟や六代目も心配してる筈や」

「……はい」

一夏はガックリと肩を落として帰る事にしたが……

「……別の隔離エリアにいるかもしれない」

「なんやと？」

「冴島さん！俺、向こうの隔離エリアに行ってきます！！」

そう言って一夏は走り出し、外へと行ってしまった。

「ちょ！い、一坊！……行ってもうた。はあ…まったくアイツの真夏ちゃんへの想いは負けるでぇ…」

冴島はやれやれと言いながら一夏を追いかけて行った。

オマケ・「真夏の交流奥義」

「クッ！コイツ中々やるで……」

真夏（注：十五歳）は口から出た血を袖で拭き取り相手を睨む、相手は相当の格闘家の様で真夏も苦戦していた。

「行くわよ！」

そう言って相手は真夏に接近する、すると横から真夏に声を掛けられる。

「真夏！！」

「ほえ？」

そこにいたのはポッポ店のアルバイト達也が真夏に向かって何かを投げる。

パシッ受け取ったそれは……ワインボトルだった。真夏はそれを思いっきり相手の頭に振りかぶり、

「おりゃあ！！」

バキャアンッ！！

「ぐはぁ！！」

相手はボトルで殴られ、割れた拍子に目に入ったワインに染みて苦しんだ後真夏はボトルの口で後ろを向いた相手にの……

「チェストー！」

「ギィヤアアアアアアアッ！？」

以下省略、を突き刺し、相手はたまらず飛び上がった後に地面に沈んだ。

「どや！」

ちなみに、バリエーションは秋山と同じです。

二十一話や！「鼻折ってなきゃええんやけど……」（後書き）

真夏「は、鼻が…ウチの鼻が折れた…」ポタポタと鼻血が出る。
秋山「ありゃりゃ…大丈夫かい？」
真夏「ずずずー！大丈夫や！あ、それと昴ちゃん！ウチとは友達やのうて今から親友や！」

作者「ウチの真夏ちゃんをよろしくお願いします。昴さん」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（前書き）

遅くなっちゃった…風邪引いちゃったし…続けられるかなぁ…

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」

ここは神室町の児童公園、そのマンホールから出てくる子供がいた……

「はあ…無事なのはわかったけど、無事なら連絡くらいくれよ。まなちゃん……」

「わしらとんだ骨折り損やな……」

一夏と冴島は真夏を探しに別の隔離エリアへ行った後、賽の河原へ戻り真夏の安否を確認出来た。
何故分かったかと言うと真夏と仲のいいホームレスがさっきまで此処にいたと言っていたからだ。

「まなちゃ～ん……」

（一途やな…）

と呆れながら思う冴島であった。
とりあえず真夏が無事だと言う事が分かり、ここで待っていれば会えるだろう思い冴島は待つ事にした。

「まなちゃぁ～ん……」

「……ホンマ疲れたわ…（歳かのお…）」

「なんや…えっらい店内はピリピリしとんなあ……」

「せやな」

真夏、真島、秋山はバッティングセンターに来て見るとそこには定員どころか客と呼べる人はおらず、黒服の男数人しかいなかった。

「おう、ご苦労さんやなあ」

「……」

真島がそう声を掛けるが男はこちらに視線を移すだけで喋らない。

「……二階堂、どこや？」

（二階堂？確かおとんに会いにきた人も二階堂やった様な……？）

男はクイッと顎を上げてバッティング場の方へと向ける、そこには男が二人いた。

真島と秋山はバッティング場へと足を運ぶ、そして二階堂も気づき三人に声を掛けた。

「よう此処が分かりましたなあ！真島さん」

「アンタのごっつい体臭のお陰や！直ぐにわかったでぇ！」

手をヒラヒラさせながら臭そうに歩く、真島。

（体臭って……そないな匂いしてたかなぁ？）

と可愛く首をかしげる真夏、

（うわぁ…これはこの後嫌な予感が……）

やれやれと言った感じガックリする秋山であった。

「……せっかく来ていただいたんですがねえ…アンタを相手にしとる程ヒマやないんですわ」

「連れへんのう…ノリの悪い関西人やなあ…」

「……二階堂はん」

「……真夏のお嬢ちゃん…」

真夏は前に出て二階堂に話す、

「二階堂はん…なして神室町をこないなヒドイ事をするんや？」

「……」

「神室町の人達が何かしたんか？」

「……」

「神室町の皆が、二階堂はんが来ないな事をするぐらいヒドイ事をしたんか？」

「……」

「二階堂はんがどうしてこないな事をするのは分からへん……東城会や、近江連合とかの事だとゆうんわ分かる…せやけどこれはやり過ぎや！」

「……」

「そりゃ…神室町の人達の中には悪い人もおる…せやけど…せやけど！」

「皆生きとんねん！！」

「真夏ちゃん……」

「まなちゃん……」

真夏は泣きそうで、それでいて悲しそうな顔で二階堂に言う。

「二階堂はん……どないしてこないなするんや!?答えて!!」

「……それはお嬢ちゃんには関係ない話や」

「関係無くなんかあらへん!!神室町の皆は友達や!」

「友達…ねえ…」

「ポッポ店のタッちゃんやさっちゃんも、金貸しの駿ちゃんも…マッポのまー君も…そして東城会の皆も!」

「……」

「皆友達なんや!!この事件のせいで警察や自衛隊…東城会の幹部もごっつ悲しい思いをしたんやで…家族とも呼べる人を……人を…どないしてそんな簡単に奪えるんや?!」

「……わしには関係あらへん話や」

「なんやとぉ!?」

「どれだけ俺の客が死ん…人達が死んだと思ってるんだ!アンタは

！」

秋山が何か言いかけた気がしたが気にしない、ちなみに秋山の金を貸した客の多くが神室町にいた為未だ未返還だったりする。

「……そろそろ話はしまいですわ…」

そう言って二階堂は真夏達の後ろ上を見る、つられて秋山がその視線の先に目をやると……

「！、まなちゃん！真島さん！」

ドスウゥンッ！！！！

「うひゃ！？」

「！？」

上からまるでカマキリの様な六本の腕を持つ巨大な化物が真夏達の後ろに現れた。

「そいつがお相手しますよって、堪忍してください」

「……」

真夏は固まり、真島と秋山は銃を構え臨戦態勢に入る。その隙に二階堂と隣にいた男は姿を消した。

「ビビっとんのか？」

「は、ははは……びびってなんか、いないっすよ？」

「ええ心がけや……」

真島はショットガンの弾を薬室に送る。

「行くでぇ！！」

「おっしゃあ！！」

そう意気込んだが、真夏は未だに固まったままだった……

「ーーーーーーん？どしたんや真夏ちゃん」

「まなちゃん…？」

「ーーーーーい」

「？」

「いや……」

「まな…ちゃん？」

真夏は化物を見た瞬間プルプルと震えだし目に涙が溜まっていく、

そして真夏は何かに耐えられなくなり……

「いやあああああああああああああーーーーーー！！！！

虫いややあああああああああああ！！！！」

真夏は真島の足にしがみ付き顔を埋めてへばり付く。

「ま、真夏ちゃん!?どしたんや!?」

「ハッ!?思い出した!そういえば俺がカマキリを取ってまなちゃんの見せたら大泣きして全力で花ちゃんにしがみ付いてたんだ!」

「どないしてそんな大事な事を黙ってたんや!?」

「いやだって人の弱みを言いふらすと駄目かと思いまして……」

「ええい!どないするんや!?わしは足にしがみ付かれて動きにくいで!」

「ふ、ふえ…む、虫…虫いややぁ…」

「ど、どうしよう……」

「と、とにかくや!わしが真夏ちゃんを担ぐからお前は前に出ろや!」

「えええ!?そんな無茶な!!」

「文句言っとらんで早いけえ!」

「ゴフッ!」

秋山は真島に蹴られ、化物の目に出される。

「あ……」

「グルルルルル……」

化物は秋山を見る、そして秋山も化物を見るその間数十秒。

「……」

「……」プイッ

「え？」

秋山は化物が自分から視線を外した事を呆気に取られた、そして化物はカサカサと移動するその移動場所は……

「なんでこっちにくるんや！？」

「びえ”え”え”え”ぇ～～～～ん”！！お”と”ん”だずげでえ”え”え”～～～！！！」

大泣きする真夏を抱きかかえた真島達に迫ってきた。

「んな！？俺は眼中に無いって言うのかよ……！！」

秋山は直ぐ後を追い化物の前に出た、

「おい！お前の相手は俺…だ…」

秋山は気づいた、気づいてしまった……化物が誰を見て追っていたかを…

「こ、コイツ、もしかして……」

秋山は化物の顔部分と思われる部分を見て絶句した。

「グルルルル……ポッ」

「えええええええええ!?まなちゃん目当て!?」

秋山はまたも絶句する、まさかこの化物にそんな感情があるとは誰も思わない。

（まなちゃん…君はフェロモンでも出しているのかい？）

はあっ…と疲れた目で化物を見る秋山、秋山の言った事は案外間違いではない……かも、

オマケ・「天啓って何人でやってもええんかな？」

真夏は今一夏と弾と組んでチンピラとケンカしていた。

「おらあぁ！！」

チンピラが一夏に殴りかかり、一夏はそれをかわして腕を持ちそのまま後ろに押し返す、

「はあぁっ！」

押し返されたチンピラは弾の所まで来て弾に後ろから手を回されてはがいじめにされた後チンピラの腕を背中に回し腕の骨を外す、

「おりゃ！！」

そしてチンピラを離して真夏に押し付ける様に渡すと真夏はチンピラの頭を鷲掴みにし、そのまま持ちあげた後思いっきり地面へと叩きつける。

「ハッ！」

ズドンと地面に叩きつけた後に真夏はチンピラの顔を上げて一夏がチンピラ目がけて走りだし……

「行っくぞぉっ！！」

一夏はチンピラの頭を思いっきり蹴りあげ、チンピラは宙に浮き放物線を描きながら地面へと堕ちた。これぞ三位一体の極み！

オマケ2・「ペンは銃よりも強し…や！」

「ん？あれは……」

真夏（注；15歳や？）が神室町を夜歩きしてるとまだ小学生と思われる子供達が輪ゴム銃で遊んでいた。

「へっへー！次はコイツを飛ばすぞ！」

「な、なあ、それは流石に危ないんじゃ……」

ガキ大将と思われる子供が輪ゴム銃の上にペンを置いて飛ばそうとしていた。

「大丈夫だって！」

「や、やっぱ危ないって！」

そう言ってもう一人の子供が止めさせようと手を出して二人は言い争う、

「大丈夫だって言ってるだろ！？離せよ！」

「駄目だって！」

二人が輪ゴム銃を取り合っていると偶然ガキ大将の人差し指にトリガーが掛り……

バシュ！ズボッ！

「フガッ！？」

「うおっ！？」

見事にガキ大将の鼻の穴にペンが刺さり、子供は驚いて手を離すとバランスの崩れたガキ大将はそのままのけ反る様にブリッジ状態になった後……

ゴンッ！

「がはぁ！！」

「う、うわあ！！た、大変だ！！」

ガキ大将は頭を冷たいコンクリの地面に強打し、ピクピク痙攣しながら意識を落とした。

「ふむ……」

真夏は考える……

1「危ない遊びはご法度やなぁ…人の事言えへんけど……」

2「見事なブリッジやなぁ…タッちゃんの技思い出したで…」

3「ちょ！鼻の穴にペンって（笑」

「……！、閃いた！」

真夏は何処からともなく板と粘土を取り出してこねあげた。

「天啓が……来た！！」

真夏の考えた天啓……それは手に二つのペンを指の隙間に挟む様にして持った後、相手の鼻の穴へと入る様にアッパーを炸裂させる技……名付けて、ペンの極み！

「これはいったいでぇ…鼻血は絶対吹かすはな」

二十二話や！「ウチかて…苦手なモンはある！前半」（後書き）

真夏「虫いやぁ……」
一夏「お、落ち着いてまなちゃん」
龍也「アイツでも苦手なもんがあるんだな……」
沙紀「だからってそれで虐めちゃダメだよ？龍也君」
龍也「バッ！？虐めるわけねえだろ！！」

作者「皆さんには苦手な物ってあります？ちなみに、自分は頭使うです」↑駄目人間

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（前書き）

真夏「作者の調子が戻った気が！！」
作者「まだ戻ってませんって……」
龍司「バカは風引かん筈なんやけどなぁ…」
作者「バカじゃないもん！！」
真島「じゃあアホか？」
龍也「マヌケか？」
沙紀「おたんこなす？」

作者「皆ヒドス……」

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」

真夏達は二階堂の刺客、ツチグモと戦っていたのだが……

「秋山、パス！！」

「喜んで！」

「ウチはラグビーボールやなあああああああああ！！！！！」

今現在、バッティングセンターで真島と秋山はクチグモから逃げながら真夏をラグビーボール宜しくで華麗なパス連をしていた。バッティングセンターでラグビーするとはこれいかに、

「ごーちゃん駿ちゃん覚えとけえええええええええええ！！！！」

「しゃあないやん！！おぶりつづけたら体力持たんわ！！」

「ごめんね？まなちゃんが重くーーーーーーー」

「その先言うたらシバきまあああああああああああ！！！！！」

真夏は投げなられながらも文句を言うのはあの化物に少し慣れたかもしれない、苦手な事に変わりはないが……走り続けながら真夏を投げ回していると突然クチグモが静止した。

「！、とまった？」

「ど、どうしたんだ？」

「はあ……はあ…はあ……駿ちゃん、さっき言いかけた事に付いてちょいお話ーーーーーーー」

真夏が言いかけた時ツチグモが体を丸め始める、秋山と真島はこの先の展開を予想し顔を苦ませる。

「秋山！作戦変更や！」

「了解！！」

「ちょ！人の話をーーーーーーー！」

そしてクチグモは体を丸めたまま動き出し、真島達に向かって転がり始めた。

「アカン！転がり始めよったで！？」

「逃げましょう！！」

「ひいぃぃぃぃぃ！？また来たあ！！！」

真夏は恐怖で秋山に抱きつき、真島はショットガンを構える。

「走れぇ！秋山ぁ！」

「はい！」

「ウチまた投げられるんかーーーーーーーーーーーー！！」

真夏は投げられまいと必死にしがみ付くだが秋山は真夏を脇の下に抱えがっしりと固定する。

「ふえ！？」

そして秋山は走りだした、それを追う様にツチグモも秋山と真夏を追いかけ始める、そして真島が叫ぶ。

「バッティング場を一一一一一一ねじ伏せろ！！！」

金貸しバットゴースト発動、秋山は赤い風になる。

「ひゃっはあ！！」

「キャラ違ああああああああああ！！！！」

秋山は若かりし頃の走りを思い出し、その風に真夏は顔が歪むぐらいの風圧で走り抜ける。
そして秋山は真夏を抱えたままUターンしてツチグモに突っ込む、

「ちょ！？逃げへんの！？」

「逃げてたって現実からは逃げられない！逆風に向かって突っ込む事こそ活路さ！」

「カッコいい事言いながらウチを巻き込まんといてえええええええええ！！！！！」

そして真夏は半場強制で秋山とタッチダウンした。
その後真島が横からショットガンを乱射し、ツチグモは体勢を崩してひっくり変える。

「ギシャ！？」

「よし今や！！」

「はい！」

「きゅうううぅ……」

真島と秋山は銃を構え、ひっくり返ったツチグモに攻撃し真夏はやっと下ろされ、目を回していた。

「ちぃ！固いで！」

「俺達の銃じゃ歯が立たない！？」

「ギシャアアアアアアア！！！！」

ツチグモは怒ったのか体を大きく揺さぶり体を起こした。

「アカン、元に戻りよった！」

「このままじゃジリ戦っすよ！！」

「ギシャアアアアアアアア！！！！！！！」

真島と秋山は覚悟を決め、二人でツチグモと対峙しようとしたが…

……

「ーーーーーーーーふ、ふふふふふ……」

「！」

「ま、まなちゃん？」

「ギシャ？」

突然聞こえた笑い声に二人と一匹は声を発した人物へと視線を向ける。そこにはリングに出てくる様な呪の女が立っていた。顔はボサボサになった髪で見えず周りの空気が凍った気がした。

「……おどれらぁ」

「お、おおおお……」サァーと顔を青くする。

「あ、あは、あはははは……」やり過ぎたと思い、顔を汗でダラダラと流す。

「ギ、ギシャァ……」ガクガクブルブル

「ウチを散々ボール扱いしようてぇ…覚悟は出来てるんやろうなぁ……？」

「そ、それは……」

「だねぇ……」

「ギ、ギシャ！ギギシャ！！」

自分は関係無いと言わんばかりに首と手を振るツチグモ、

「あ！キタねえ！自分だけ逃げる気かいな！」

「そうだ！元はと言えばお前がまなちゃんを襲わなければ！」

「ギシャーーーーーーーー！？」

真島と秋山から責任を問われ怒るツチグモ、だが真夏はそれを良しとしなかった……

「アンタら全員……」

「ん？」

「へ？」

「ギシャ？」

「同罪やボケえええええええええええええ！！！

真島の打った手榴弾はまっすぐツチグモの……

「グモッ！？」

口に入り……

「ングッ」ゴクリ

飲み込んだ、そして……

ドゴーンッ！！

「よっしゃあ！！」

「ぐほっ！？」マトリックスをやって頭をぶつけた。

「ほえ？」

三人の息のあったコンビネーションでツチグモは撃波された。

「よくやったで真夏ちゃ～ん！」

「え？あ、ええ？ウチは今まで何を……」

「……今ので我に返ったか……」

秋山は元の真夏に戻った様で心底安心した様でそこにどっかりと大の字になって呼吸を整えて寝転がった。

（てかあの化物よりまなちゃんが怖いってどうよ……）

その時、後ろから複数の足音が聞こえた。

「「「「「あ”あ”あ”……」」」」」

「はあ…はあ…あ、あれれ？」

「はあ…はあ…なんやまだいるんかいな」

「う～！なんやしらんけどせっかくあの化物もやっつけたのこりゃないでぇ……」

真夏はウンザリそうにして腰から銃を構える、だが真夏はそれを取りこぼしてしまい銃を落とした。

「あ、あれ？なんで？」

それどころか立っているのもままならずそのまま経たりこんでしまった。

「まなちゃん！」

「ど、どうしたんや！？」

「わ、わからへん…急に力が入らへんのや」

実は真夏は連日に続く戦いで体が限界に達していた、五歳児が普通此処まで戦える筈が無いだが真夏は戦ってきた。此処まで戦えたのはひと思いに友達や自分が愛した神室町を守りたいと言う信念だけで体にムチ打って戦ってきたからだ。

「た、戦わなあ…神室町を…皆を…」

「まなちゃん！もういい、後は俺達が……（クソ！考えてみればまなちゃんはろくに休んじゃいない！？なんで気づかなかったんだ俺は！！）

「真夏ちゃん……（こないな子供にまで…わしらは何をやっとったんじゃ、クソ……）

自分たちの軽率な行動で真夏を追いこんでた事に苦虫を噛む思いの二人だった。

「真島さん、まなちゃんをここから脱出させないと！」

「言われんでもわぁーとるわ……せやけど」

真夏達の前に群がるゾンビの数が異常でとてもじゃないが二人だけで、ましてや真夏を抱えて切りぬけるのは不可能だった。

「……！、クソ……」

真島は噛まれた腕からしたたり落ちる血と痛みに耐える、だがゾンビはお構いなく真夏達を襲う。

「あ”あ”あ”あ”あ”！！」

「クソッ！？」

「まなちゃん！」

「駿ちゃん！？」

真島はショットガンを目の前のゾンビに構え、秋山は真夏と守る様に抱きしめる。その時だった……

ドゴォンッ！！

「「「「！？」」」」

突然目の前に横から降って来たゾンビにゾンビ達はドミノ倒しの様に倒れ、ゾンビ達は一斉に静止する。
何事かと思いその飛んで来た方向に目を向けると二人の人物が立っていた。

「な、なんやと？」

「……あ」

真島が驚き、真夏が声を上げる。その先にいたのは……

「真島さん、あの人達……」

「そや……関西の龍、真夏ちゃんの親父のーーーーーーーーーーー」

「郷田龍司や……」

「と千冬ちゃん？」

「私はついでですか！？」

オマケ「ゴミはゴミ箱に捨てるのがマナーやで？」

「おらぁ！！」

真夏（注：ウチは十五歳♪）は行き成り問答無用で男に殴り掛けられた。

「ちょ！？ひゃあ！？」

真夏は間一髪避けて難を逃れる。

「行き成り何するんや！？」

「黙れ！この悪女め！」

「あ、悪女ぉ～？」

「隠しても無駄だ！俺の女を病院送りにしやがって！」

「な、何の事や……」

「昨日、俺の女をボッコボコにしたじゃねえか！」

「……ああ！そう言えば金出せってカツアゲしてきた女がおった様な……」

「そうだ！」

「完璧あっちが悪いやん…」

「やかましい！とにかく倒させてもらうぞ狸女！」

「カッチーンッ！誰が狸や！！この世紀末モヒカンハープ！！」

「んだとこらぁ！！」

東城会七代目代行　ＶＳ　チンピラ

郷田真夏

「アンタ覚悟しいや！」

「おおおおおお！！！」

男は殴りかかり真夏はそれを避ける。

「くそっ！」

「悪いんやけど即効でカタぁ付けさせてもらうで？」

真夏はそこらへんに落ちていたビール瓶を拾い構える。

「それで殴ろうってか！？」

「そんなヒドイ事はせえへんって～♪」

「嘘つけ！」

男は再度殴りかかろうとするが真夏は男の伸ばした腕を掴みもう片方の手に持っていたビール瓶を……

「おりゃ！」

「ふごっ！？」

相手の口に突っ込んだ後右腕を下に下ろして……

「空やけどウチのおごりや？」

バキャアァンッ！！

思いっきり振り上げた真夏の拳は男の顎をとらえビール瓶と共砕いた。

「ぎゃあああああああああっ！！！！！」

男は顎と口を押さえながら倒れ、血塗れのままその場でのたうち回る。

そして真夏は砕けたビール瓶の口の部分をゴミ箱の中に捨てた。

「女の仇見つける前にその女の罪を見つけるんやな？」

真夏はそう言い残しさって行く……これぞ空き瓶を使って相手の顎と口を粉砕する『空き瓶の極み』！！

「ゴミはちゃあんと捨てなアカンで～♪」

二十三話や！「ウチかて…苦手なモンはある！後篇」（後書き）

一夏「真夏ちゃん……」
大吾「無理をさせ過ぎちゃったね……」
冴島「わしら大人何をしとったんじゃ！？」
作者「そうですね～……」←元凶

此処んとこ真夏ちゃんの天啓がエグイ方向に……読者の皆様の考えた天啓…もっと見てみたいですねぇ…（チラリ

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング！？」（前書き）

真夏「次はデンドロビウムが出そうな予感」
一夏「そんなの出したら直ぐに終わってるよ……」

作者「真夏ちゃんのＩＳも考えないと……」

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング！？」

「おとん…ちー姉ちゃん…」

真夏は秋山に抱かれながら小さく吐く、その声はどこか安心感を得た様な声だった。
そして標的を龍司へと変えたゾンビ達が龍司に襲いかかる。

「ふんっ！……」

そして龍司はあろうことか右手を出してゾンビの噛みつき攻撃を受けた。

「！？、お、おい！！」

「大丈夫や、駿ちゃん……」

「え？」

真夏の言った言葉に首をかしげた、そして龍司は不敵に笑みをこぼして噛みついたゾンビを他のゾンビへぶつけて振りほどき、

「うおりゃあっ！！！！」

そして噛みついたゾンビと共コートの袖が破れその噛まれた腕が露わになる。

「……鋼の…義手（オートメイル）？」

「唯の手やない……あれは――――――」

キュイィーンと龍司の右腕の義手が唸り始め、そして龍司が手を握ると同時に腕が変形し始めた。

「鋼鉄の竜砲――――――」

そして龍司の腕が変形し終わった。

「黒金丸や……」

大型のガトリング砲が姿を現した。

「なんだぁ!?」

「あれがおとんの腕や（あれ？教えてへんかったっけ？）」

その変形が終わると次に動きだしたのが千冬だった、ゾンビ達も動きだし千冬にも襲いかかろうとする。

「千冬の嬢ちゃん!!」

「千冬ちゃん!!」

危険と判断し真島と秋山が叫んだが……

「ふんっ!!」

千冬は背中に掛けてあったデカイ袋を振りましてゾンビ共をなぎ倒した後袋を掴みビリビリと破って中の物を取り出す、

「私は射撃が苦手でな？これで我慢してくれ」

そう言って千冬が取り出した物は……

「……マジかいな」

「うそーん…」

「下手な銃も数撃ちゃ当たるっちゅう事か、でもそれは規格外やで…ちー姉ちゃん…」

龍司とは違うが、千冬が持っていたのは金色に輝くガトリング砲…カグツチだった……

「久しぶりや……」

「ゾンビでは役不足だが……」

「暴れさせてもらうで！」

「暴れさせてもらうぞ！」

多銃身の砲火がこの場に響いた……

所変わって此処神室町隔離エリア内劇場前通り、そこに一夏はいた。

「う～ん…まなちゃんの事だから隔離エリアでゾンビ狩りしてると思ったんだけど……」

真夏を訪ねて神室町……一夏は真夏を探し続けていた、一緒にいた冴島は六代目の護衛をする。残っている。

「ここにはいないか……う～んどうしよう」

一夏は頭をひねり真夏の行きそうな場所を考える。

「スターダスト？いやこんな時に行くわけ……行くよな、まなちゃんなら……ボーリング？いやまだ解放してないし……ドン・キ・ホーテか？う～ん、どこだろう……」

一夏が考えていると近くから悲鳴が聞こえた。

「！、悲鳴？……女性の声……まさか！？」

一夏は悲鳴が聞こえた方へと走る、

（無事でいてくれ、まなちゃん！！）

一夏は掛け出し、悲鳴の聞こえたポッポ店近くのでデカマッチョに迫られている少女を見つける。

「まなちゃん！！」

一夏は急いで肩に掛けていたライフルを構え、弾丸を放つそして弾はデカマッチョの背中に当たる。

「グオオオオオオッ！！！！」

「ヒ……」

「クソ！やっぱかてぇ！」

デカマッチョは少女から一夏へと標的を変えて迫ってくる、だが一夏は焦らずにライフルの標準を合わせる。

（まなちゃんの言ってた通りに……引き金は引くんじゃ無く絞る様に狙う……！）

ズガンッ！と一夏が放った弾丸が放たれ吸い込まれる様にデカマッチョの急所である顔に当たり……

「グオオオオオオオォ……」

ズドンッ言う地響きと共に倒れ伏した。

「……プハァ！…はあ…はあ…」

一夏はライフルを構えている間、息を止めていたのか荒い息でライフルを下ろす。

「……ふぅ…撃つ感覚は何時まで慣れない物だ……」

そう言って一夏はライフルを肩に掛け直し、少女に近付くそして一夏はある事に気づく。

「あれ？」

一夏はどんどん近づいてゆくとその人物は真夏と思っていた者が違う者であったと言う事に気が付いた。

「誰？」

「あ……え、えっと……」

その少女は青い髪をした同年代と思われる短髪でミニツインテイルの女の子だった。

「……まなちゃんじゃなかった？」

「え、えっと……まなちゃん……て？」

はぁ～と息を吐いて肩を落とす一夏、少女を助けたのはいいが探していた人とは違う事に落胆する一夏であった。

「……落胆してでもしかたねえか…」

「あ、あの……」

「とりあえず、この子を隔離エリアの外に連れていかないと」

「え？あ、あの私……」

「怪我してねえか？歩けるか？」

「あ……う、うん…大丈夫…」

「そうか、なら行こう」

そう言って一夏は少女に手を差し出す、少女はおずおずと一夏から差しのべられた手を握り立たせて貰った。

「ふう…まあこっちに来てよかったよ、俺がこなかったらどうなっていた事か」

一夏は笑い、少女は一夏の笑顔を見て顔を赤らめる。

「あ……え、えっと…あの…あ、ありがー――――」

「おっとそろそろ行かねえと、銃声でゾンビが集まってくる」

「！？、ぞ、ゾンビ……！」

少女はさっきの事を思い出したのか一夏にしがみ付き震える。

「あ～えっと…大丈夫だ心配するな」

「……」フルフル

「……怖かったよな」

「……え…」

一夏は少女の頭をポンと撫でる。

「よく生き残ってくれたよ、ホント…助けられなかったら、まなちゃんに顔を合わせられなかったよ」

「あ……うん…」

一夏はあやす様に少女の頭を撫で続ける、撫で続けられた少女はじょじょに顔を赤らめて行く。

「さて！もう大丈夫か？」

「え？……」

「もう怖く無いか？」

「あ……」

何時の間にか少女は自分の恐怖心が消えた事に気づき驚く、

「大丈夫そうだな……それじゃあ脱出しよう何。安心しろ……俺が安全な場所まで一直線に連れてってやるから」

「……うん…」

そう言って一夏は少女の手を握り隔離エリアの外まで少女をエスコートしたのであった……

視点・「郷田真夏」

ウチは目の前の戦場、もとい惨状を駿ちゃんに抱かれながら見守っていた。

「なんて人だ……まったく」

「あの二人に勝てる人って絶対、いや一人おるな……」

認めたくないんやけどな……

「キッヒヒヒヒ、なんや凄い腕やないか真夏ちゃんの親父は」

「てか義手って聞いてたけど……」

「ん？あのガトリングの事言うてへんかった？」

「義手ってのは聞いてたけど、ああなるなんて聞いてないよ」

アカン、言い忘れておったか？ともう片付いた様やな……

「終わったな（…お前は、何しようとしとるんや…テツ……）」

「ええ、ほとんどは片付きましたね……」

そう言っておとんとちー姉ちゃんは武器を下ろす、これじゃ規格外やのうて鬼畜外や。

「……真島さんやな？東城会の」

「そや」

「……テツは…二階堂はワシが止めるつもり」

「なんや仲間割れかい」

「ワシは近江連合を破門にされた見や、極道やあらへん」

「一人でやんのか？」

「そのつもりや」

「龍司さん！私も……」

「千冬嬢ちゃんを巻き込む訳にはアカンのや」

「で、でも……」

なんやおとん一人でやるつもりかいな……

「それと……真夏」

「うん？なんやおとん」

おとんが近づいてきてウチは駿ちゃんから下りて立つとおとんが目の前まで来て――――

「……フンッ！！」

ドゴンッ！！

「ぷぎゃ！！？？」

「あ」

「おー痛そうやな……」

（あれは痛い……）

いきなりウチの頭頂部にドゴンという鈍い打撃を受け、おもわずし

ゃがみ込んでしまったんや。

「～～～～～～～！？」

目の前にバチバチと火花が散ったような錯覚、頭頂部を触るとポッコリとタンコブができてきて……。

頭がジンジンしだしてだんだん激痛が増してくる。

目からポロポロと涙が流れる。

「い、いひゃい……」

「このドアホ！！」

なんでウチが拳骨かまされるん！？

「やっと出れた……」

「はあ…はあ…」

「大丈夫か？」

「う、うん……平気…」

一夏は無事少女を隔離エリアから脱出させた、少女は少し疲れたのか肩で息をしている。

「此処までくればもう大丈夫だろう……」

一夏達がいるのは喫茶店アルプス前である、一夏は前まで無事だったエリアが隔離エリアになっている事に驚いたが、なんとか少女を脱出させる事に成功した。

「それじゃ俺はこれで」

「あ！……」

「ん？」

少女は突然一夏の裾を掴んだ。

「あ……え、えっとぉ……」

「？」

「あ、あの！……そのぉ……」

「……ん？ケータイが……！」

一夏は表情を変えて焦りだす、

「わりぃ！友達が見つかったから俺いかねきゃ！」

「え……」

「じゃあな！」

「あ、あの……！」

「な、なんだ！？」

少女は顔を真っ赤にして何かに伝えようとする。

「な、名前……名前…教えて……」

「……一夏だ、織斑一夏だ。じゃな！」

「あ……」

一夏は急いで走り隔離エリアのある方へと走って言った。

少女は一夏の名前を何度も言って忘れぬ様に胸に刻みつける。

「織…斑…君…織斑…君……一夏…君」

自分で一夏の名前を呼んで顔を赤くする少女、そして少女はある重大な事に気づく。

（……私の名前…教えてなかった……）

少女は残念そうに肩を落とし、すでに見えなくなっている一夏にポツリと吐く。

「……私の名前は……簪……更識、簪……」

簪は自分の名を言って既に隔離エリアにいるであろう一夏（ヒーロー）を見続けていた……

オマケ・「天国と地獄の大技」

「うおりゃあああああああああ！！」

真夏（ウチは１５…もう面倒や）はまたそこらへんのチンピラに喧嘩をふっかけられた。

「はあっ！」

真夏はそれをかわした後大きく飛び太ももで相手の頭を挟む、

「ふんどっ！！」

「うおっ！！」

そして相手のチンピラは立ったまま真夏の太ももで上を向く感じで顔を固定される。

「何発耐えられるか為したる！！」

そして真夏の連続パンチが炸裂する。

「おりゃりゃりゃ

「まったくレディの扱いがなっとらんで……まったく！」

真夏はプンプン怒りながらその場を去る、これぞ太ももで相手の頭を固定してヘッドリンチする天啓『太ももの極み』！！ただし女子限定。

「あ～股がヒリヒリするわぁ～……」

二十四話や！「セーラー服と……ガトリング！？」（後書き）

真夏「いっちゃん誰やあの可愛い子ちゃんは！？」

一夏「い、いや名前聞く前に別れちゃって……」

真夏「それに惜しみなくニコポ、ナデポ出しおってからに……ムキィーー！！」

一夏「まなちゃん！？」

作者「さて出ました原作に女の子……どうかかわっていくだろうか…ご期待に添えられるよう頑張ります！！」

二十五話や！「おとんの心配する気持ち伝わったで……」（前書き）

龍也「今回もまたすれ違ったな…一夏達」
沙紀「そうだね、一夏君も苦労してるね…」

作者「さて……一夏は何時真夏に会えるやら…」

二十五話や！「おとんの心配する気持ち伝わったで……」

「い、行き成り何すんねん！？おとん！！」

「何すんねんや無いわボケ！ろくな連絡寄こさないで何言うとんやまったく！」

「う……れ、連絡はしよう思うとったんや…せ、せやけどゾンビとかでそれどころじゃ……」

「……」

龍司は真夏を見る、その目は睨んでいるようで嘘を許さないと言う目であった。

「……ごめん…なさい……」

「……はあ」

龍司は溜息を吐いて真夏の頭を撫でながら抱き上げてその存在を確かめる様に抱き寄せる。

「……ホンマ…無事でよかったわ……真夏」

「……ご、ごめ……ごめんな……うぅ…」

真夏は耐えられず龍司の顔に抱きつき静かに泣きだした、秋山はその光景を微笑みながら眺め真島はエエハナシヤナーと言いながら嘘泣きをし。千冬はどこか羨ましそうに見ていたいないとか……

「……ほな、行くで…真夏」

「ううぅ…グスッ…何処にや？」

「ちとな…」

龍司は真夏を肩に乗せて歩きだし、千冬もそれに付いて行く。

「なんや真夏ちゃん連れて行くんか？」

「コイツ一人にしたらどこか行ってまいそうやからな」

「むう……ウチはそんな子供じゃ……」

「ちゃんと連絡も寄こさん奴がか？」

「う……！」

「ふん…あぁそうや…。真島さん秋山さんワシが来るまでの間、真夏の面倒見てくれてた事…礼言うとくわ」

龍司は頭を下げて礼を言う秋山は驚き、真島は……普段通りに返す、

「キッヒヒヒヒ、わしらが好きでやってたんや礼を言われる程でも無いわ」

「そ、そうですよ！俺達がまなちゃんを守りたいから銃をとった様なものですし」

「それでもや、ほな……」

龍司は別れを告げ、千冬と真夏と共バッティング場を後にした。

「ーーーーーーーーあー真夏ちゃんとお別れかー寂しいもんや……」

「そうですね…でも、父親である龍司さんと一緒に行った方がいいと思いますよ?」

「せやな、ほなわしらもいこか」

「はい」

視点・「郷田龍司」

「ここももう駄目やな……」

「そんな……ここまで隔離エリアが……」

「おとん、神室町は…大丈夫やよね？」

ウチは不安げにおとんに話す、

「大丈夫や、お前の好きな町やで？こないな事で屈したりせんわ」

「……うん」

ウチは元気の無い声で返事をしてまう、おとんは心配になったんやけど今はとりあえず隔離エリアから出うる事にしたんや、

「……」無言でポケットから何かのメモ取り出す

「うん？なんやそれ？」

「テツがワシに渡したもんや」

「テツちは誰なんですか？」

「二階堂の事や」

「二階堂はんならさっきまでバッティング場におったで？もういないけんども」

「さよか……」

おとんは無言でそのメモをクシャリと潰して歩きだした……

回想中……

ここはある町中…そこにタコ三味の定員の服を着た龍司と……

「どうしてもあかんのですか？」

二階堂がいた。

「テツよ…何度も来てもろて悪いが、ワシは近江連合を破門にされた身や」

「兄貴にその気さえありゃわしはなんとでもします、遠慮は無用ですわ」

「…なんで、そんなワシにこだわるんや？」

「わしゃあ東城会を……そして兄貴をこないにした桐生一馬を……このままでは済ませられんのですわ」

「……桐生の事は、もうええんや、ワシはあの男に勝てれへんかっ

た……ただそれだけの話や」

龍司がそう言うと二階堂は否定する。

「嘘や！兄貴がそないなつまらん事を「おと～ん！」

突如、二階堂の声は遮られ龍司の足元に子供がひっ付く、真夏である。

「どしたんや？真夏」

「おやっさんが呼んでたで！」

「さよか直ぐに……」

「おーい、郷田！何時まで油売ってんだ！？」

龍司の声も突如遮られるタコ三昧の店主、おやっさんである。

「師匠に働かせる弟子がどこにいんだよ！？」

「すんませんおさっさん、今行きますわ」

「ウチも戻りま～す！」

真夏と龍司はそう返事をしておやっさんは二階堂に声を掛ける。

「おい、おめえも客じゃねえんならさっさと行っちまいな」

二階堂はおやっさんの態度が気に入らないのか、睨みつけておやっ

さんに迫ると二階堂の肩に手を乗せて止めさせる。

「もうワシの事は忘れろや…テツ」

そう言って肩から手を離し、言い聞かせる様に言う。

「わしゃあもう極道やない」

二階堂は龍司と向き合い、ポケットから紙を取り出す。

「気ぃが変わったら来てください」

龍司は二階堂からの紙を受け取る。

「ーーーーーもうすぐや、大丈夫……兄貴も絶対その気になりますわ」

そう言って二階堂は龍司に頭を下げてその場を去った。

龍司はその去っていく姿をずっと見続けていた。

「……」

「誰やったん？」たこ焼きモグモグ

「こら！何気になに店のたこ焼き食ってんだ！」

「あーん！おやっさん堪忍して、ウチまだ夕飯まだ何よー！」

（……アカン、後ろが全然シリアスやない…）

回想終了

「……」

「おとん？」

「何でもあらへん、ん？なんやこれ？」

龍司が地面に落ちているメモを拾う。

「なんやこれ？」

「んぅ～？ゲ、長谷川のねーちんやん」

「長谷川？」

「ゾンビ倒すとご褒美くれるっちゅう女の事や」

「ご褒美、ねえ……」

そう言って龍司はメモをポケットにねじ込み、真夏を担ぎ直す、

「わ、わ…」

「とりあえずあの壁の向こうに行くで」

「はい」

「出発や～」

龍司達は歩き出す、この地獄からの一時離脱の為に……

視点・「織斑一夏」

「ええー!?まなちゃん達はもう行っちゃったんですか!?

「あーすまへんなあ一坊」

「あはは、すれ違いで来ちゃった見たいだね」

「そ、そんなぁ……」

俺はまなちゃん、千冬姉ちゃんと龍司さんが既にいない事にガックリと肩を落として膝をつく、

「やっと会えると思ったのに……」

「そう気ぃ落とすなや一坊」

「そうだよ、死んだ訳じゃないんだから」

「……はい」

とりあえず俺は立ち直り、直ぐに追いかけようと走り出したが。

「ちょい待ち」

「ゴホッ！？」

真島さんに首根っこを掴まれ首がしまってむせてしまった。

「ケホケホ…な、何をするんですか？」

「お前はわしらと少し休憩や」

「で、でも「コツ」え……」

真島さんが急に俺の頭をコツンと叩くと俺の体はフラッと地面に腰を下ろしてしまう。

「あ、あれ？」

「お前も体が限界なんやな……」

「一夏君……」

か、体が限界？そんな筈は…まだ疲れてなんて…

「人っちゅうのは大事な事になると疲れ知らずで戦えるんや、リミッターって奴が外れたせいやろ。そして一坊の体のリミッターも限界に達したんやな」

「体の限界……」

「一夏君、君の体はもう限界なんだ。分かるね？」

「……」

…休んでる暇なんて無いのに……クソ…

「一坊、休んだ後に真夏ちゃんと合流しろや、それでええな？」

「はい……」

俺は早く行かなければと言う衝動を抑え、秋山さんにおぶられながら河原に戻った……

オマケ・「世界は変わってもうた……（妄想編）」

世界はＩＳによって変わった……ＩＳ、それは現代の兵器の理論を覆す女性だけが扱える最強の兵器…神室町の大事件での織斑千冬の活躍によりＩＳは世界に知れ渡り認められた。各国はＩＳ開発に執着し他の兵器開発は全て凍結した、それにより男性軍人、そして凍結されてしまった兵器開発の研究者は職を失なった…だがそこで彼らを雇った女性がいた……

「代行…ポイントまで約二百です」

「さよか」

装甲車の中で女性と複数の完全武装の男達が乗っていた。その男達は皆外人でいろんな国の人間がいたそして女性は立ち上がり皆に号令を掛ける。

「全員、装備チェック…」

ガチャガチャと音を出して男達は己のエモノをチェックする。
そして全員が点検し終えると、女性に点検を完了した事を報告する。

「全員の装備チェック完了…」

「よろしい……」

そして装甲車は止まり、ドアが開いた。

「第一目標は広場に設置されたジャミング兵器の破壊！第二目標は要塞化された大阪城の制圧や！ウチに付いてきぃ！近江から大阪は分捕るんや！ロックンロール！！」

郷田真夏…多国籍の退役、ＩＳによって不要になった数多くの兵士を引き連れ激戦区となった大阪へと足を踏み入れた…ここに、東城会と近江連合の第二次極道抗争が幕を開けた……

「ちゅう小説書いたんやけど…どやろ?」

「止めてくれ…話がマジでありそうで怖いからな?」

真夏は今、レゾナンスに事務所は構えている一夏に自分で書いた小説の感想を聞きに来ていた。

「だな、ホントにありそうで怖い」

弾がそう言ってクツクツと笑う、その横で一夏の幹部達も苦笑いを返していた。

「てか弾、集金行かなくていいのかよ?花さんがまた怒るぞ?」

「いやー社長の癖が付いちゃってなあ……」

「癖って…真似るなら服装だけにしたほうがええで?」

「俺も直そうとは思ったんだけどなぁ……」

頭をポリポリ掻きながらバツが悪そうに言う。弾は今幾つもの会社を抱える大社長の下に付いていた。

「まあええわ、それよかウチの小説どうやった?」

「これからの未来を小説にしてどうする」

「え?」

「小説が予言になってるぞ？」

「い、いや予言って……」

「お前ならホントに抗争が始まったら大阪に自ら兵隊引きつれて近江連合を潰しに行ってもおかしく無い、てか絶対行くな」

「ちょ！？ウチはそないに血の気は多くないで！？」

「前に暴走族が連合組んだ時単身で三百人相手に突っ込んだ奴がよく言う」

「うぐっ！？……い、いっちゃんはそんな事…いわへんよな？」

「……」顔をそむける

「いっちゃーーーーーーーーーーんっ！？」

真夏は自分の周りの人間に絶望した。そしてこの五年後、真夏が十五歳の冬に東城会、そして真夏は多国籍の軍人と共に近江に喧嘩売った事は誰もしらない……

二十五話や！「おとんの心配する気持ち伝わったで……」（後書き）

真夏「ううー……ウチって小説書くのに向いて無いんやろうか……」

作者「ファンフィクションって難しいですねぇ書くのは楽しいんですけど」

オマケのフィクションのフィクション……現実にならなきゃいいけど……

二十六話や！「嫌な予感ビンビンや……」（前書き）

遅くなってしまった……仕事がきつくて……感想待ってます。

二十六話や！「嫌な予感ビンビンや……」

「ふう……」

「大丈夫なんか？一坊」

「はい、少し休めば大丈夫です」

「ならええんやけどな」

「真島さん、そろそろ……」

「駄目や」

真島は即効で手でバッテンを作り立とうとした一夏の足をはらう。

「あいた！？」

「まだ体力戻っとらんのに河原から出す訳にはいかんで？」

「そ、そんなぁ……」

一夏はガクリと肩を落とし、真島はヤレヤレと言った感じで呆れる。

「だいたい真夏ちゃんの安否は確認出来たやろ？それにあの関西の龍とお前の姉ちゃんもいるんやから少しは安心しぃ」

「ううぅ……」

「真島さーん！てあれ？どうしたんですか？一夏君」

「また無理して真夏のところに行こうとしたから足はらっただけや」

「真島さん、相手は子供ですよ？優しくしないと」

「わしが優しくするんわ女の子だけや特に真夏ちゃん」

「ちなみに花ちゃんは？」

「対象外や」

「それ本人に聞かれたら殺されますよ？」

「せやから陰口で言っとんねん」

「そうっすか…一夏君はい、タウリナーマキシアムでよかった？」

「た、助かります……」

キリッと蓋を開けてゴクゴクと一夏は飲み干し、プハァ！と言って口を袖で拭く。

「生き返る～……」

「まるで親父やな」

「まだ子供なのにねえ」

「俺五歳児なんですけど……」

そうやったとケラケラ笑う真島、そして一夏は体を動かして体が大丈夫かを確認をして再度立ちあがる。

「ん……良し！」

「何が良しやねん」

「俺はもう大丈夫です、早く真夏ちゃんと合流したいので行きますね？」

「体は大丈夫なのかい？」

「平気です、自分鍛えてますから」

そう言って一夏はサイの花屋から餞別として貰ったサブマシンガン『雀蜂』手に取り作動と初弾装填を確認して歩きだす。

「ホンマに平気なんか？」

「平気ですって、それよりもーーーーーーーー」

「ん？」

「真島さん……腕の方が心配ですし…」

「！、……気づいとったんか？」

「腕を庇ってるのが分かりましたから……」

そう言って一夏は心配そうに真島を見つめ、真島はそれをケラケラ笑ってごまかす。

「キッヒヒヒヒ！心配すんなや一坊…わしはまだ死ねんからのう」

「真島さん……」

「……しゃあない行け」

「え？」

「真島さん？いいんですか？」

「漢が女を助けに行くうゆうとるんや、邪魔すんのは無粋やと思ってな」

「真島さん……」

「はあ……ま！真島さんがそう言うなら仕方ありませんね……一夏君」

「あ、はい！」

「これを持って行ってくれ」

「これって……」

秋山が渡したのは秋山がＤＶＤ店で手に入れたオートマグナムだった、しかし……

「黄金……」

「そう…黄金銃だ、一夏君なら反動制御も出来るしね」

一夏は伊達に真夏に連れられて来たゲイリーのグリーンベレーさながらの射撃場で訓練した訳ではない。

拳銃、散弾銃、自動小銃に爆発物、そして兵器らの運用方法と言った知識をゲイリーによって叩きこまれているのだ。子供に教える知識では無いのだが……

「そういや前にオスプレイとかって言うヘリを飛ばしたって真夏ちゃんから聞いたなぁ……」

「あははは、はい結構難しかったですけど…なんとかマスターしました」

（オスプレイって…確かティルトローター機で一番扱いが難しいヘリだってまなちゃんが言ってたけど……それをマスターするって、やはり血筋って奴なのかな……）

「真夏ちゃんは一カ月前にハリアー飛ばしたって聞いたで？」

「はい、次はライトニングを飛ばして見たいって言ってましたし」

（ハリアーは確か短距離離陸垂直着陸機だっけ？てか俺も軍オタになったなぁ…まなちゃんの影響か？）

秋山が少し困った様に唸っていると、一夏は真島との話を終えて河原から出る。

「じゃあ行ってきます！秋山さん、銃ありがとうございます！」

「気にしないでいいよ、気をつけてね」

「間違っても逝ってくんなよ？」

「逝きませんよ！？てか不吉な事を言わないでください！」

「わぁーたからさっさと行けや」

「ホントに気をつけてね一夏君」

「はい！」

そう言って一夏はズボンに黄金銃を突っ込みハーネスの付いた雀蜂を肩に掛けて走り出した。

「ーーーーーーーーーいったな……」

「行きましたね…それじゃあ真島さん腕の治療の方を……」

「まだ大丈夫や、気にすんなや」

「でも……」

「……治療して治せんならとっくにやっとるわ」

「……」

真島はそのまま河原の奥に引っ込み、秋山もそれに続いて歩きだし

た。

（まなちゃんが知ったら……悲しむだろうな……）

「どしたん？」

「…いえ、なんでも行きましょう」

「ああ…」

真島の最後は……近い…

視点・「郷田真夏」

「！？、なんや…今の胸騒ぎ……」

ウチらがバッティング場から出て後、胸が急に締め付けられる感覚

がしてやな予感がしたんや、

「ーーーーーーーどしたんや？真夏」

「何かあったか？」

「……おとん、ちー姉ちゃん…なんでもないわ」

「さよか」

「具合が悪いとかじゃないんだな？」

「うん、大丈夫や…にしてもこの地図に書かれたバッテンんって…」

ウチはおとんの言っていた二階堂はんに来てくれって言われた場所なんやけど……

「ん？おい真夏、二か所だけバツが抜け取る所があるで」

「あ、ほんとや……ここって東新ビルと…たけちゃん達がいる場所やん」

なして金村興業の事務所のところに？それに……

「他のバツ印の所って……」

「まあええわ、二つあるんなら一つづつ回ればええ事や」

「あ、ウチは金村興業の事務所があるホテル街に行くで？新井はん

が無事か確認したいし」

「一人でか？」

「それは危険だぞ？」

「平気やおとん、ちーねえちゃん、ウチはこれでも戦えるし、おとんにおんぶしてもろうたから元気百倍や！っそれに一一一一一」

ウチはウフフっと笑ってちー姉ちゃんを見る。

「お二人の邪魔したらアカンしなぁ」

「！？」

「ムフッ♪頑張ってな～」

「お、おい待て！！」

ウチはまわれ右をして出口へ向かって走り、ち一姉ちゃんは面白い位に顔を真っ赤にして慌ててたんや。

青春や…青春やのう…歳が問題なんやけど、ちなみに今分かった事やちー姉ちゃんのアレは……

「さってと…新井はんの無事を確かめに行こか」

ウチは既に隔離エリアの中にある新井はん達の事務所に向かった、新井はんたけちゃん無事でいてな！

オマケ・「美少年って不便やねぇ……」

ＩＳが世界に普及して七年……世界に女尊男否が浸透し始めた頃ある事件が勃発する、ある特別な男性が誘拐され人身売買に掛けられると言う悲惨な事件が立て続けに起きた。
これに警察は捜査を開始したが未だ証拠と実体は掴めず、思う様に進まず事件は困難を極めていた、
そこで須藤警視総監はこの事態の打開策として、東城会七代目代行「郷田真夏」に協力を要請、代行真夏はそれを承諾し東城会から選りすぐり戦力とサイの河原からは有力な情報を提供した。
次に真夏は特殊な犯罪者に対抗する為、警察、極道の連合部隊を設立、これを「東条九課」と名付けた。そしてまたの名を……

「シャイン１、配置に着いた突入する…準備はいいか？」

（ええでシャイン１、皆も配置に着いたで表では警察も包囲網を張り終わったてるってまー君が言うとったし）

ここはとある廃工場、そこに完全武装した特殊部隊員が武器を構え

て無線機からの突入の合図を待っている。

（ほな逝こか♪）

「よし……突入！ｇｏー！ｇｏー！」

古びた扉は爆破され雪崩の様に突入する隊員達は即座に発砲、次々に犯罪者を無力化する。

「敵、無力化！トラック確保！」

（上出来や、各隊員は敵の拘束、後の残りはトラックの中を確認して対象を”保護”や」

「了解まなちゃん」

（すまへんなぁいっちゃん、学校あるのに付き合わせてもろうて）

「それはお互い様だろ？まなちゃんもちゃんと学校行かなきゃだめだぜ？」

（終わったらちゃんと行くって～♪）

「ん……トラックを確認する」

（ブービートラップに引っ掛からんといてな？あの時はホンマ心臓止まり様やったし……）

「もう引っかからないよ」

そう言った一夏はガスマスクを外し、トラックの中身を確認する。

「……まなちゃんの読み通りいたよ……小さい男の子達が」

（やっぱりな～……）

そう……真夏達が”保護”したのは……

「ロリコンならぬショタコンとはな…こいつら…」

そう言って倒れ拘束されている敵、もといショタコンの女性達を嫌そうに見る一夏、

そう一夏達はショタコンを狩る者……ショタコンハウンドの隊員達である。

（ＩＳが普及した事で男の価値が下がってもうたからなあ、そのせいで男の子を生んだ家庭が少年を捨てる事件が多いんよ）

「だからって子供を売るのは許されない事だ……」

（せやね……これでまた施設が賑やかになるなぁ）

「また養護施設を建設しないとな……アサガオとひまわりに連絡は？」

（既に連絡済みや、ハル姉ちゃんも園長さんもＯＫを出してくれたで）

「そうか…よかった、それじゃあ俺はこの子たちを連れていくな？」

（後でウチにも会わせてな～）

そう言って真夏からの通信は切れ、一夏は売られた子供達を一度警察所に届けた……

「ーーーーーーーーちゅう話が昔にあったんやな～」

「あ～あの時は大変だったよな～……」

「いっちゃんが助けた子供たちに兄貴って呼ばれて困ってたんは笑えたわ」

真夏は当時の事件を思い出してケラケラと笑う、一夏は少し恥ずかしそうにして頭を掻く。

「笑うなよ……そういやこの頃は九課はどうなってるんだ？」

「弾ちゃんが指揮取って動かしてくれとるわ、ウチらはＩＳ学園にいなきゃならんから任せっきりなんやけど……」

「しかたないさ俺達の立場上、下手に動けないし」

「せやね、さていっちゃん次は三次元機動に付いて話すで？」

「まだやんのか？」

「当たり前や、いっちゃんには早よう覚えてもらわんと幼馴染に守られる事になるで？」

「う……それはちょっと…」

「せやったらちゃっちゃと覚える！ほなやろか～♪」

「へいへい……」

一夏はＩＳ学園の寮の自室で真夏からの勉強を開始した、一夏、真夏達の活躍によりショタコンはじょじょに駆逐されていったのである……

二十六話や！「嫌な予感ビンビンや……」（後書き）

真夏「謝れや、読者の皆はんに詫びを入れろや」
作者「なして行き成り!?」
真夏「遅くなったからやろ?調子も取り戻してへんし……指切れや」
作者「ご、ご勘弁を!!」
真夏「いっちゃーんごーちゃんからドス借りて来て～」
一夏「お、おう」
作者（ヤバい!真夏ちゃんなら腕事立ち切れる!?）

遅くなってすいません……仕事が夜遅くまで……

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」（前書き）

ちょっとシリアスになっちゃったかな？感想待ってます。

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」

「なんでたけちゃんドラムカンにハマってるん？」

「えっとだな……」

真夏は無事ホテル街にある新井達の事務所に到達する事が出来た、新井達の事務所は既に隔離エリアの中に入ってしまった為、到達するのに時間を食ってしまった。

「まあええわ」

「え？いいの？俺このままでいいの？」

「ええやんドラメン見たいでええで？」

「そ、そうか…（ドラメンって？）」

「新井はん、無事で何よりや」

「ありがとう真夏ちゃん」

城戸を置いて新井と真夏は話を進める、他の部下は城戸と新井意外は真夏に言われてバリケードを形成している。

「新井はん、ここは危険やウチと一緒に隔離エリアまで脱出せんと」

「どうしてだ？バリケードとドスにチャカは充実してるんだから大丈夫じゃーーーーーー」

と城戸が話しに入りこんできた、だが真夏は……

「アホ、ゾンビよりも危ない奴がいるんや。そいつならバリケード張っても紙切れ同然や」

「そ、そうなのか？」

城戸は顔をひつかせ、汗を流す。他の幹部も自分がやってる事が無意味に近い事に手を止めてしまう。

「手が御留守だぞ？早くバリケードを作れ、時間稼ぎにはなるんだからな」

「「「「「へ、へい！！」」」」」

「そやから早く荷造りして出て行かんといかんねん、皆！バリケードが終わったら荷物もってトンズラするで！」

「「「「「おう！！」」」」」

「こいつら……（なんで真夏ちゃんの命令は忠実に実行するんだ？俺がボスなのに…まあ別にいいんだが）」

「そんで問題なんわ……」チラッと城戸を見る

「な、なんだ？」

「このドラ息子どないすんねん……」

「とりあえず正面のからの出るのは無理だから全員で窓から出るしかないな…城戸は……とりあえず下にマットを引いて落とすか」

「ちょ！？兄貴！それはヒドイっす！！」

「しかた無いだろ、部下数人でも抜けなかったんだぞ？」

「大丈夫やって♪それに下に落ちてもドラムカンが守ってくれるわ（まあ落ちる時ミキサー状態になりそうやけどな……）」

「そ、そうだなドラムカンは俺を守って来てくれたから大丈夫だよな！」

（計画通り！）ニヤリ

（このアホ舎弟……）

（（（（（（若頭…ご無事で！））））））

この後、ドラムカン事落とされた城戸武は一番手で窓から落とされ、下に引いたマットにバウンドした後周りにいたゾンビ共を巻き込みながら新井達の活路開いたのであった。

「流石たけちゃん！予想外の働きや！」↑元凶

「城戸！お前が俺の舎弟で誇りに思うぞ！」↑悪乗り

「「「「「さすがです！若頭！」」」」」↑便乗する幹部達

「目が回るーーーーーーーーーーーー！！？？」転がる

隔離エリアの戦車通りまで転がって行く城戸であった……

「きーもーちーわーるーーーー！！」

「たけちゃんファイト？」

「すまん、城戸……」少し罪悪感が湧いた

「「「「若頭……」」」」」皆静かに合唱する

城戸……転がる男は今日もドラムと共に無双するのであった。

視点・「織斑一夏」

「はあ…はあ…やっぱり武器を三つも持つと疲れる……」

実は俺はまなちゃんの武器、「ラブシャインスパーク」を背中に担いで手にサブマシンガン「麻雀」を持ち。腰には「黄金銃」を指し

ている。これ持って歩くのは五歳児の俺には重労働だ…え?なんで置いていかなかったかって?それは……

（これ持ってると…安心するんだろうな……）

一夏は手を後ろに回し、真夏の武器に手を当てる。

「早く会いたいなぁ…まなちゃん……」

「あ”あ”あ”……」

俺がまなちゃんの武器に手を添えていると前からゾンビ達が迫ってくる。

「……俺の邪魔を一一一一一一」

俺は麻雀を構え、ゾンビを睨む。

「すんじゃねえ!!!!」

俺は麻雀をぶっ放す、大切で…大事ないとこに会う為に……

「てカッコ付けてる自分を殴ってやりたい」

俺は妄想しながら戦車通りまで来たはいいが絶賛ハエの様な化物に追われてホテル街まで逃げ走っていた。

「なんだよあれ!?なんなんだよあれはよおおおおおおおおおお!!!!!」

俺は走る！風の様に！……ゴメン無理だわ♪てガラでも無いことやってても意味が無い、やはり五歳児に武器三つはきついです……

「なんなんだよあのハエ見たいな奴は！？ドーパントか！？グリードか！？ゾディアーツですかこんちきしょおおおおおおおおぉっ！！！！！」

頼む！！いるならWでもオーズでもフォーゼガールでもいいいいから助けてください！！ちなみに俺が好きなのはＧ３－Ｘです、カッコイイよなーあれって機械的なとこがさ。

「てそんな感想言ってる場合じゃない！コイツ俺が撃っても簡単に避けやがる！！」

俺は後ろにウチながら撃ってはいるが、まったく当たる気配が無い。そしてそのハエ見たいな奴はじょじょに俺との距離を縮めて行く。その時、ハエ野郎は俺に目がけて何かを吐きだして俺は咄嗟に避ける。

「うわぁ！？」

だが俺はその反動で転んでしまい、相手のとの距離を縮めてしまった。

「やられるか！！」

俺は麻雀を倒れた体勢で構えて撃とうとしたが……

カチッ！

「!?、弾切れ!?」

俺は弾切れを起こした麻雀を捨てて黄金銃を腰から取り撃つ、

ドオォンッ!!

「うわあぁ!?」

だけど慌てていたせいか反動制御を忘れていたため俺は地面に転がる形で吹っ飛ぶ。

「いってぇ……」

俺は痛みを耐えて相手を見るがかすりもしなかった事に気づく。

「駄目だ……これじゃあ当たらない!!」

当たらなければどうという事はない!という格言を聞いた事はあるが、やはりどんな協力な武器も当たらなければ意味が無い。

「やべえ!?」

相手のハエ男は俺に向かって突進する、避けられない!?

(やられる!!)

俺は手を前に交差させ防御する様に身構え目を瞑る、すると突然無数の銃声が響いた。

ドドドドドドドドドッ！！！！
パンッ！パンッ！パンッ！パンッ！
ドンッ！シャコッ！ドンッ！シャコッ！ドンッ！シャコッ！
パラララララララララララッ！！！！

「キシャアアアアアアアアアアア！！？？」

「へ？」

俺は突然の銃声に驚いて目を開けるとハエ野郎は後ろから一斉射撃によって穴だらけになりながら地に落ちて言った。

「いったい…何が？」

そして俺が状況が分からないでいると聞きなれた超が聞こえる。

「撃ち方止め！！新井はんはウチといっちゃんを助けるで！他の人は周りを警戒！！」

「わかった」

「「「「「了解、まなちゃん！！」」」」」

その人物はそう言っていろんな武器で武装した黒服の人達に指示を

出し周りを警戒させ、残った二人は俺に近付いてくる。

「いっちゃん怪我ない？大丈夫なんか？」

「ま、まなちゃん……」

「一夏君、怪我はないか？」

「あ、新井さん……」

俺はまだ呆けたままでリベレーターを肩に掛けたまなちゃんは俺の体をペタペタと触り、怪我が無いか確かめる。

「……ホッ、よかったで…ウチが新井さん達を連れだして来てよかったわ……」

「そうだな、まさか一夏君とここで会うとは……」

二人が俺の再会を喜こぶ、だけど俺は体を体育座りにして顔を膝に隠した。

「ーーーーーーーー？、いっちゃんどないしたん？」

「どうしたんだ？一夏君、怪我をしてるのか？」

そう言って二人は俺を心配してくれる、だけど……

「俺は……守られてばっかだ…」

「い、いっちゃん？」

「一夏君？」

「俺は何時も姉や…皆に守られてばっかだ……！」

「そ、そりゃしかたあらへんよ、ウチらまだ五才やし…」

「でもまなちゃんは一人で戦ってる！それどころか新井さん達を率いて戦って守ってる！！」

「そ、それは……」

いとこに吐き散らすなんて最低だって分かってる…でも大好きな女の子に守られるのは、……苦しいんだ……

「なんで俺ばっか…守られてばっかなんだ……なんで俺は――――」

弱いんだよぉ……

視点・「郷田真夏」

いっちゃんは顔を顔を埋めて泣いとる……いっちゃん、そないに苦しんでやったんやな……

「ーーーーーーーーーーいっちゃん……」

「……」

「ウチな、一人で戦った事なんて一度も無いんやよ？」

「……え？」

いっちゃんは顔を上げてウチを見る、ア、アカン…泣き顔のいっちゃん可愛すぎや…

「おとんの子供にしてもろうへんかったら今頃ウチは施設で一人ぼっちやった…せやからウチは一人や無く、おとんに…皆に、そしていっちゃんに助けられたんや」

「俺…に…？」

「せや、いっちゃんがいてくれへんかったらウチはおとんの娘になったとしても、多分一人になってたわ……」

「俺は……まなちゃんを守ってなんか…」

「守ってくれたでいっちゃんは…だって、いっちゃんが幼稚園で声を掛けてくれはらなかったらウチは幼稚園でも孤立した筈や」

「そんな事ーーーーーー」

ある訳ない…まなちゃんは誰でも仲良くーーーーーーーーー

「ウチな…怖かったんよ…」

「怖かった?」

「うん…ウチな、自分の両親がウチを捨てて蒸発したんわ。ウチが良い子やないと思ったからや」

「良い子じゃない?」

「そや……ウチは…虐待されてたんや、両親に…」

「!?」

「なんだって……」

俺と新井さんは驚いた、まなちゃんの両親がそんなヒドイ事を……でも、どうしてそんな話を?

「ウチはあの時幼かったから分からへんかったんやけど、ウチが良い子になってへんと何時も打たれたり飯抜きにされたんや。せやから良い子にしてりゃあ両親も優しくなってくれはると思っとったんや」

「そんな…事が……！」

新井さんは拳を震わせながらまなちゃんの話を聞いていた。
俺も新井さんと同じでまなちゃんの両親に怒りが湧いているだろう。

「でも…結局両親は二歳になったウチを蒸発したんや無くて山奥に捨てて行きおったんや…あの時の事はよく覚えてへんけどウチが餓死寸前の所で道路まで戻って、通り掛った人に助けられんたんは覚えとるてかかなり奇跡やな」

「……なんで…その話を今話すんだ？」

俺は真夏に問いかける、俺の話と何が関係があるのか……

「……いっちゃん、ウチらはまだ子供や」

「そんな事は分かってーーーーーー」

「分かっっとらんて、いっちゃんその黄金銃は誰から貰うた？」

「え？えっと、秋山さん」

「じゃあさっき撃ってたマシンガンは？」

「…花屋さん」

「そう言うこっちゃ♪」

「……意味が分かんないんだが…」

「つまりや、ウチらは絶えず人に頼ったり守られたりしとるんや、それだけやないいっちゃんがいるから今のウチが守られておるんや」

「今のまなちゃんを…俺が？」

「せや…ウチは施設での生活が始まった時も怖かったんよ」

「なんで？」

「嫌われない為や……皆に愛想振り回して、必死に嫌われん様に頑張ったんや…たぶん両親との関係のせいでウチは何時からか両親のご機嫌とりが当たり前になってそれでウチは我がままになれへんかったんやろうな…そしておとんの話に合わせて話してたらおとんは突然ウチを養子にするって言うて園長さんと話して養子縁組をしよったんや、あの時はホンマビックリやで……」

「……」

「そんで…ウチはおとんの前でも自分を殺して良い子を演じた、せやけど…おとんには直ぐにばれてもうたわ。ウチはおとんに言われて自分を隠さんでもワシはお前を捨てたりせんって言うてくれたんや、それどころか我がままの方が似合ってるって言うんやで？おとんは意地悪やで……でも、それでもウチは怖くて自分を騙してた……」

「……」

「そんでここからが重要や」

「？」

「ウチがおとんと過ごしてから一年立った頃や、ウチはおとんが通わせてくれた幼稚園で昔のウチを今のウチに変えてくれる存在に出会った……」

「……誰…なんだ?」

「織斑一夏」

「え?」

「いっちゃんの事や…」

俺が?まなちゃんを変えた?

「いっちゃんがウチの中に詰まった鬱憤を晴らしてくれたんや、覚えとるやろ?ウチが友達も作らず一人ぼっちで砂浜で遊んでた所をいっちゃんが無理やりウチの手を引いて友達の輪に入れてくれたんわ」

「それは…」

えっと…そうだっけ?

「その時ウチは反発して喧嘩になったんよな~あの時はキツク手を握られて痛かったでぇ……」

「う!……悪い」

「ええって♪そのお陰でウチは…温かみを知ったんや」

「温かみ？」

「そうや、だーれもウチに見向きもしないのにいっちゃんだけウチを見て、ウチを孤独の世界から…ウチからは地獄と呼べる底から引きずり出してくれた…」

「俺が…まなちゃんを？」

「うん……いっちゃんがウチを孤独から引きずりだして、そんで自分自身の本音を吐きださせてくれた…ウチはそれに救われたんや、ウチはもう良い子で無くてもええって、ウチは自分自身でいてええんやって、教えてくれたんわいっちゃんなんよ？」

俺がまなちゃんを救った？

「いっちゃんがいるから今のウチがおる、いっちゃんがいたからこそ自分自身に正直に生きられたんや……いっちゃん」

まなちゃんは急に俺の首に手を回して自分の顔を俺の顔に近づける。

て近！？近いよまなちゃん！！

「ま、まなちゃん…近いって」

「ありがとう」

「へ？」

「ありがとういっちゃん、ウチを守うてくれて、ウチを救ってくれて……ウチの最初の友達に…そしてウチのいとこであって――――

「おおきにな♪いっちゃん？」

俺はその言葉を聞いた時体の中から熱いものが再度ぶり返す。

「う…うえ…」

「いっちゃん、ウチらは守られてもええんよ？それは恥やないんや」

「そうだぞ？一夏君」

「グズッ…新井さん」

「俺も…君や真夏ちゃんがいたから俺や城戸は神室町に戻れた…一夏君、君のお陰だ…ありがとう」

新井さんは俺の頭に手を置いて撫でてくれた。それが俺にはたまらなく嬉しくて……

「……うぅ…」ポロポロ

「いっちゃん、覚えといて…いっちゃんはウチなんかよりもいぃ～ぱい！人を守って、救って、助けてるんやよ？そのお陰で東城会や神室町の皆とも仲良うなれたんやから、もう苦しまんといて…いっちゃんが苦しんでたり悲しんでたら皆も…ウチも心配してまうから

な？」

俺は真夏にそう言われ、目をこすり涙を拭くそうだ…俺は子供だ、
だからこそ強くなってまなちゃんを守れる大人に…漢になるんだ！！

「……グスッ…ああ！」

「お？もう泣きやんだんか？お早いなぁ…さすが男の子や！」

「……ハッ、何時までも泣いてられねえよ（もうまなちゃんを心配
させたくないからな……）」

「さよか、ほな……皆移動や！総員集合！」

「「「「「合点だ！！」」」」」

そう言ってまなちゃんは皆を集合させる。

「ほい、いっちゃん」手を差し出す

「さんきゅ」手を握って立ちあがる

「全員警戒を怠るなよ？」

「「「「「ウッス！」」」」」

新井さんは皆に指示を出して歩き始める、そして俺はまなちゃんと
手を繋ぎながら歩いた。

「もう守られてるだけとか思ってへんよな？」

「大丈夫だって…俺だって守れてたって分かったし」

「ならええんやけどな、無理したらあかんで？」

「わかってるさ」

俺は歩き出す、この手に握る温かみと安らぎを守りたいが為に……

……ん？

「新井さんがいるって事は……城戸さんは？」

「……あ”」

「そう言えば……」

「「「「「ずっと転がったままですね」」」」」

うおおおいぃ！？それでいいのか組として！！てか転がるって！？

その頃の城戸は……

「うおおおおおおおおおおおっ！！！！！」ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！！

「ゴアアアアアアアアアアアッ！！！！！」ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！！

城戸は絶賛イワダルマと己のプライドを掛けて競争中であった……

「走り抜け！俺のドラ魂ぃ！！」ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！！

「ゴア！？ゴゴア！？（コイツ！？さらに早く！？）」ゴロゴロゴロゴロゴロゴロッ！！！！

城戸のドラムカンが赤くなり（ただ転がり過ぎて表面が過熱しているだけ、）さらに転がるスピードを上げた。

「俺の…勝ちだ！！」ゴロゴロッ！

「ゴゴゴアっ！！ゴアッ！！（まだだ！！まだ終わって無い！！！）」ゴロゴロゴロゴロッ！！！

「イワ男おおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！」↑勝手に付けたイワダルマの名前

二人は熱く激しく転がり続けた、そして新井達が城戸を発見した時には既にドラムカンは真っ赤になり城戸はその暑さに暴れ、イワダルマは「良い勝負だったぜ……」と言う言葉?を残し息を引き取った。

後にこれは話題となり神室町の名物となるドラムカン転がし祭りが開催され、それは全国のドラカー（ドラムカンに入る者たちの通称）を熱くさせたと言う。ちなみに真夏はまったくもって意味がわからん大会であったと言っている。

オマケ・「ブルドーザーって脆いわあ…」

「こぉのポンコツ！なんでこないに早く壊れんねん！」

ゲシゲシと煙と炎を出すブルドーザーを蹴る真夏、元は砂や土砂を運ぶ為の物であってゾンビ引き様では無いのだ。

「チッしゃあない歩いて行くか」

真夏は歩いてミレニアムタワーまで行く、その直後ブルドーザーは大きな音を立てて爆散した。
そして真夏がミレニアムタワー前までくるとゾンビを引きながらこちらにやってくる車を見つける。

「な、なんや？」

真夏が身構えて銃を構える、そして視認出来る所まで来た車は……

「……フォークリフト？」

真夏の目の前で止まった車はゾンビを引いてスプラッターカーになった血みどろのフォークリフトだった。

「まなちゃ～ん！」

「いっちゃん！？」

「そうだぜ」

「これどないしんたん？」

「道端ので拾った」

（人はそれを盗む言うんやで、いっちゃん……まあええけど♪）

真夏は一夏の乗ってきたフォークリフトに乗り込み、一夏の後ろに座った。

「ほないこか！」

「おう！」

がちゃがちゃと操縦してフォークリフトを走らせる一夏、真夏達が隔離エリアに出るまで一夏と真夏は目に見えるゾンビ達を引いて行ったという。一夏、真夏…恐ろしい子！！

「にしてもいっちゃんがフォークリフトの免許持ってたんやな」

「免許？」

「そや、もっとるやろ？」

「それって食えるのか？」

「……ここで下ろしてええな」

「え”？」

無免許運転はやめましょう。

二十七話や！「頼ったってええんや…それが”人”やもん」（後書き）

真夏「なんでブルドーザーよりフォークの方が耐久度が上なんや」
龍司「知らへんなぁ……」
真夏「てかそれだとブルドーザーの存在意味が無くないんやないか？作者もブルよりフォーク使ってカー無双しとるし」
龍司「そうやな……ブルの意味はあらへんなぁ」
真夏「出す意味あったんか？」

作者「無いかもしれませんねぇ……ホント」

どうしてだろ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7589v/

ＩＳ　いとこが如く

2011年12月11日15時53分発行